

## 序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積792.31km<sup>2</sup>、内、森林が約92%を占める山間地域に、4つの町から成る自治体として、平成29年3月現在、約25,000人の人々が生活しています。

この4町において最も多くの人口を擁する古川町は、町の西寄りを清流宮川が貫流し、その周囲に形成されている市街地には、古墳や古代寺院・古代遺跡が数多く点在し、特に縄文時代の遺跡である「沢遺跡」や「中野山越遺跡」は、これまでの考古学研究における重要な役割を担ってきました。

さて、本報告書は、その沢遺跡を旧古川町史編纂事業に伴って発掘調査した結果をまとめたものです。本遺跡は、縄文時代早期の押型文土器最古段階となる沢式土器の標識遺跡であり、押型文土器研究上からも貴重な遺跡として認識されていましたが、調査では竪穴住居跡2軒と大量の土器類が出土し、その文様や胎土などの分析を通じて押型文編年研究に大きな一石を投じました。現在、その重要性に鑑み、飛騨市指定史跡として現地保存されています。

今回、本報告書を刊行することにより、沢遺跡に残された先人の生きた足跡を古代ロマンとして紐解くだけでなく、今後の考古学研究の礎、さらには文化財保護への関心を高めるための一助になることを強く願うものです。

結びに、発掘調査の実施に対しまして深いご理解とご協力をいただいた周辺地域の皆様、そして、本報告書の作成も含めて多大なるご指導・ご支援を賜りました(故)大野政雄先生・岡本東三先生はじめ研究者の皆様はもとより、関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成29年3月

岐阜県飛騨市教育委員会

教育長 山本 幸一



# 序

すべてはここから始まったのである。大野政雄が縄紋時代前期の村山遺跡を本格的に発掘調査する、1951（昭和26）年夏の事である。大野42歳、古武士のような斐太人であった。また村山遺跡の発掘は、戦後の飛騨における科学的歴史の解明への先駆けとなる学術調査でもあった。その翌々年の1953年、村山遺跡の遺物を携えて東京大学理学部人類学教室に内地留学する。山内清男の指導のもと研鑽を積まれるとともに、第一線で活躍する研究者とも知己を得る。後に『村山遺跡』（1960年）の報告書に関わることになる佐藤達夫もその一人である。村山遺跡を通して結ばれた大野・山内・佐藤の信頼関係は生涯続くことになる。それは学問以前、互いに響き合う“生きざま”を共有していたからに他ならない。いったん意に沿わぬ不条理なことが起きれば、梃子でも動く事はなかった。それぞれ人として、研究者として、孤高・清貧・真摯な立ち位置を頑なに守られた。

『村山遺跡』を上梓された数年後の1964（昭和39）年、大野は沢遺跡を発見し、予備調査を実施する。村山遺跡同様、沢遺跡の出土遺物は阿佐ヶ谷の佐藤のもとに送られた。その新資料の重要性に鑑み、佐藤は直ちに大野とともに1967年春、本格的な発掘調査を行う。その年の秋には「岐阜県沢遺跡調査予報」と題した報告がなされる。

「予報」は単なる発掘速報ではなく、透徹した佐藤型式学によって周到に準備された本報告のエッセンスともいべきものであった。戦前、山内がひじ山遺跡の押型紋土器をとおして「古式縄紋土器」に位置づけたように、佐藤は「沢式」押型紋土器をその最古段階に位置づけたのである。戦前のひじ山遺跡、戦後の沢遺跡、この飛騨の二つの遺跡が押型紋土器研究史上大きな画期となった。

今回の整理作業にあたっても、佐藤が「予報」で提示された内容および整理・分析法を越えるものはなに一つない。佐藤が復元した沢遺跡の住居の窓辺で、改めて「予報」を熟読して欲しい。資料を託された身として、この半世紀にわたる歳月は何であったのであろうか。忸怩たるものがある。東京オリンピック開催の2020年には、山内没後50年を迎える。今年2017年は佐藤没後40周忌、大野と佐藤の意思を守り続けた静江夫人の10周忌、また発掘調査から50年の節目の年もある。古くからの友人戸田哲也の多大な助力のもと、沢遺跡の資料を公開できたことは、託された後進が担った責務の一端を果たせたと思う。

平成29年3月吉日

阿佐ヶ谷先史学研究会

岡本東三



## 例　　言

1. 本書は、飛騨市古川町（旧吉城郡古川町）大字上氣多字沢に所在する沢遺跡（岐阜県遺跡番号G 06F00194）の発掘調査報告書である。

2. 本調査は、旧古川町市史編さん事業の分布調査で発見された遺跡の発掘調査である。調査後、遺跡は旧古川町で買い上げられ、現在飛騨市指定史跡となっている。

3. 発掘調査は、旧古川町教育委員会が主体となり第1次・第2次の2回にわたって行われた。第1次調査は、県立斐太高等学校教諭（当時）であった（故）大野政雄が佐藤達夫の協力を得て行った。第2次調査は、大野政雄のもと、岡本東三をはじめとする阿佐ヶ谷先史学研究会の諸氏によって行った（参加者11ページ参照）。

調査主体 古川町教育委員会

調査担当 大野政雄 岐阜県文化財保護審議委員会・日本考古学協会員

調査期間 第1次調査 1964（昭和39）年（予備調査）

1967（昭和42）年4月5日～9日

第2次調査 1986（昭和61）年8月24日～31日

調査面積 第1次調査 約78m<sup>2</sup>（1964年調査－約38m<sup>2</sup>、1967年調査－約40m<sup>2</sup>）

第2次調査 約108m<sup>2</sup>

4. 報告書作成作業は、飛騨市よりの業務委託を受けた株式会社玉川文化財研究所が担当した。委託業務名称は、埋蔵文化財発掘調査等事業（沢遺跡二次整理作業業務 委託／仕様書番号飛市教委-36号）である。

事務局 飛騨市教育委員会

清水 貢（生涯学習課長）

清水則久（生涯学習課文化財係）

沢遺跡二次整理作業業務委託業務担当

調査主任 戸田哲也

調査員 石川真紀（出土土器分類・観察表）、麻生順司（出土石器分類・観察表）、

大貫由美・田村正義（出土土器接合・復元）、赤間和重（出土遺物写真撮影）

5. 本件二次整理作業委託業務に係わる履行期間は、2015（平成27）年11月13日～2016（平成28）年7月10日迄である。

なお、岡本東三氏より整理・報告書作成にわたる全体的助言と玉稿を頂戴した。また、中村由克氏よりは分析編の玉稿を寄稿いただいた。

6. 本書の執筆は以下のとおり分担し、戸田哲也が全体を編集した。

岡本東三 第1章～第3章第1節(2)、第4章第1節(1)、第5章第1節(1)・(2)、第2・3節

戸田哲也 第3章第1節(1)、第2・3節、第4章第1節(2)・(3)、第5章第1節(3)～(5)

石川真紀 第4章第1節(4)

麻生順司 第4章第2節、第5章第1節(6)

中村由克 第6章

7. 調査記録および出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管・公開している。

# 目 次

序	i
序	iii
例 言	v
第1章 発掘調査と報告書刊行の経緯	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的景観	3
第3節 飛驒の押型紋遺跡	5
第3章 発掘調査の成果	8
第1節 発掘調査の概要	8
(1) 第1次調査(1964(昭和39)年調査・1967(昭和42)年調査)	8
(2) 第2次調査(1986(昭和61)年8月24日～31日)	11
第2節 層 序	13
第3節 竪穴住居址	15
(1) 1号住居址	15
(2) 2号住居址	17
第4章 出土遺物	19
第1節 土 器	19
(1) 带状押型紋土器分類基準	19
(2) 第1次調査の出土土器	21
山形押型紋(A群)土器 格子目押型紋(B群)土器 結節回転紋(C群)土器 条痕紋 土器 無紋土器 土製環飾 押型紋土器期以後の土器 他時期の土器	
(3) 第2次調査の出土土器	37
2号住居址出土土器 山形押型紋(A群)土器 結節回転紋(C群)土器 無紋土器 押型紋土器期以後の土器	
(4) 第1次・第2次調査出土土器観察表	42
第2節 石 器	47
(1) 第1次調査の出土石器	47
1号住居址出土石器 包含層出土石器	
(2) 第2次調査の出土石器	55
2号住居址出土石器 包含層出土石器	
(3) 第1次・第2次調査出土石器観察表	57

第5章 考 察 .....	59
第1節 発掘調査のまとめと考察.....	59
(1) 佐藤型式学のまなざしとその分析法.....	59
(2) 押型紋土器に関する佐藤編年.....	60
(3) 再整理の分析 .....	62
(4) 出土土器・土製品のまとめ .....	67
(5) 1号住居址の構造 .....	70
(6) 出土石器について .....	72
第2節 沢式土器の型式学的検討.....	75
第3節 沢式とネガティヴ押型紋の系統と編年.....	84
引用・参考文献 .....	89
第6章 分析編 .....	95
沢遺跡出土の黒鉛混入土器の胎土分析.....	95
参考資料 岐阜県沢遺跡調査予報 .....	(1) ~ (15)
写真図版 .....	
報告書抄録 .....	

## 挿図目次

第1図 沢遺跡位置図	2	第26図 第1次調査出土石器(2)	52
第2図 周辺の遺跡	4	第27図 第1次調査出土石器(3)	53
第3図 飛驒の押型紋遺跡の分布	6	第28図 第1次調査出土石器(4)	54
第4図 沢遺跡第1次・第2次調査区設定図	8	第29図 第2次調査2号住居址出土石器	55
第5図 沢遺跡第1次・第2次調査区設定図	12	第30図 第2次調査出土石器	56
第6図 第1次・第2次調査グリッド土層断面図	14	第31図 1号住居址上屋想定図	71
第7図 1号住居址実測図	16	第32図 はつや遺跡の帶状押型紋土器	76
第8図 2号住居址実測図	18	第33図 向陽台遺跡の帶状押型紋土器	79
第9図 帯状押型紋土器の分類	20	第34図 帯状押型紋土器の三段階(飛驒)	80
第10図 第1次調査出土土器(1)	22	第35図 帯状押型紋土器の三段階(信州)	81
第11図 第1次調査出土土器(2)	24	第36図 平板貝塚の格子目・山形押型紋土器と 沈線紋土器	84
第12図 第1次調査出土土器(3)	26	第37図 大川遺跡・鶴山遺跡の山形押型紋土器	86
第13図 第1次調査出土土器(4)	28	第38図 大川2式土器と立野1式土器の施文規範	87
第14図 第1次調査出土土器(5)	30	第39図 ネガタイプ押型紋と帯状押型紋の互換性	88
第15図 第1次調査出土土器(6)	31	佐藤原資料-1 ①~⑤佐藤野帳の発掘日誌メモ	10
第16図 第1次調査出土土器(7)	33	佐藤原資料-2 押型紋土器に関する佐藤編年メモ	62
第17図 第1次調査出土土器(8)	33	佐藤原資料-3 第1次調査出土押型紋土器の 佐藤分析メモ	63
第18図 第1次調査出土土器(9)・土製品	36	佐藤原資料-4 1号住居址佐藤スケッチ図	71
第19図 第1次調査他時期の出土土器(古代)	37	佐藤原資料-5 発掘区・層位別出土石器の 佐藤分析メモ	74
第20図 第2次調査2号住居址出土土器	38	〔分析編〕	
第21図 第2次調査出土土器(1)	39	図1 沢遺跡出土の胎土の実体顕微鏡写真	98
第22図 第2次調査出土土器(2)	41	図2 飛驒片麻岩と黒鉄鉱床の分布	100
第23図 第2次調査出土土器(3)	41		
第24図 第1次調査1号住居址出土石器	48		
第25図 第1次調査出土石器(1)	50		

## 表 目 次

第1表 沢遺跡出土土器一覧表	19・66	(佐藤メモ)	64
第2表 帯状押型紋土器の分類基準	21	第11表-2 押型紋原体(佐藤メモ)	64
第3表-1~4 第1次調査出土土器観察表	42	第11表-3 土器の厚さ(佐藤メモ)	64
第4表-1・2 第2次調査出土土器観察表	45	第11表-4 縞帶・横帯施紋順(佐藤メモ)	64
第5表 第1次・第2次調査出土石器組成表	57	第12表 第1次・第2次調査出土土器観察表	65
第6表 第1次調査1号住居址出土石器観察表	58	第12表-1 口縁部破片数と紋様別観察表	65
第7表 第1次調査包含層出土土器観察表	58	第12表-2 山形紋原体の直徑表	65
第8表 第2次調査2号住居址出土土器観察表	58	第12表-3 山形紋の原体長	65
第9表 第2次調査包含層出土土器観察表	58	第12表-4 山形紋土器の厚さ	66
第10表 押型紋土器の佐藤編年	62	第12表-5 縞帶・横帯施紋順	67
第11表 1964年・1967年出土土器佐藤メモ	64	第13表-1 第1次・第2次調査 山形押型紋 分類表(拓本分)	69
第11表-1 口縁部破片数と紋様別観察表			

第13表－2 第1次・第2次調査 山形押型紋	85
分類表(未掲載分) ..... 69	
第14表－1～4 はつや遺跡早期土器の出土区別・ 紋様別総数表 ..... 77	87
第15表 黒鉛入押型紋土器の原体長・径分布図 非黒鉛入押型紋土器の原体長・径分布図 ..... 77	88
	[分析編]
表1 沢遺跡出土の主な土器の胎土記載 ..... 97	
表2 沢遺跡出土土器の胎土分析結果 ..... 97	

## 写真図版目次

卷頭図版1 沢遺跡第1次調査出土押型紋土器	図版12 第2次調査2号住居址北壁石器出土状況
巻頭図版2 沢遺跡第1次・第2次調査出土押型紋土器、 結節回転紋土器	第2次調査参加者スナップ写真
図版1 沢遺跡遠景	図版13 第1次調査出土土器(1)
第1次調査D-2～5区(西南から)	図版14 第1次調査出土土器(2)
図版2 第1次調査土層セクション(1・2・4層)	図版15 第1次調査出土土器(3)
第1次調査D-1区山形押型紋土器出土状況	図版16 第1次調査出土土器(4)
図版3 第1次調査1号住居址覆土下層調査状況(西北 から)	図版17 第1次調査出土土器(5)
第1次調査1号住居址東北壁と礫出土状況(東 南から)	図版18 第1次調査出土土器(6)
図版4 第1次調査1号住居址全景(西北から)	図版19 第1次調査出土土器(7)
第1次調査1号住居址全景(東北から)	図版20 第1次調査出土土器(8)
図版5 第1次調査1号住居址覆土中土器出土状況	図版21 第2次調査2号住居址出土土器
第1次調査1号住居址床面石器出土状況	第2次調査出土土器(1)
図版6 第1次調査1号住居址床面石器出土状況	図版22 第2次調査出土土器(2)
第1次調査1号住居址と大野政雄	第1次調査出土板状粘土成形土器拡大(原寸)
図版7 第2次調査F-0～11区(西北から)	図版23 第1次調査出土板状粘土成形土器拡大(150%)
第2次調査G-2区南壁セクション	第2次調査2号住居址出土異種原体併用土器拡 大(120%)
図版8 第2次調査G-4区西壁セクション(南西から)	第2次調査出土無紋小突起口縁部拡大(120%)
第2次調査H-1～3区(東北から)	第2次調査出土沈線紋併用山形押型紋土器拡大 (120%)
図版9 第2次調査G-1～8区(東北から)	図版24 第1次調査1号住居址出土石器
第2次調査2号住居址山側壁と床面(南西から)	第1次調査出土石器(1)
図版10 第2次調査2号住居址全景(西南から)	図版25 第1次調査出土石器(2)
第2次調査2号住居址山側壁と床面(東南から)	図版26 第1次調査出土石器(3)
図版11 第2次調査2号住居址覆土(F-5区南壁) 第2次調査2号住居址覆土(F-4区南壁)	図版27 第2次調査2号住居址出土石器
	第2次調査出土石器



## 第1章 発掘調査と報告書刊行の経緯

沢遺跡は岐阜県飛騨市古川町（旧吉城郡古川町）大字上氣多字沢に所在する。当時、県立斐太高等学校教諭であった大野政雄が、古川町史編さん事業の分布調査によって発見した遺跡である。

**第1次調査** 1964年調査と1967年調査については一括して整理作業が行われており、本報告にあたり合わせて第1次調査と呼ぶ。必要に応じて1964年調査、1967年調査と呼び分ける。

1964（昭和39）年、大野によって予備調査が行われた。しかし、予備調査を実施した日時・発掘地点・発掘面積の記録は残されていない。1967年調査の全体図（第4図）からみて、A-I～X区、B-I・II区、C-I区が予備調査の発掘区と推定される。出土した押型紋土器はひじ山遺跡などで知られていた押型紋とは異なり、黒鉛を含んだ特徴的な帶状施紋の押型紋土器であった。その情報は直ちに山内清男・佐藤達夫の元にもたらされ、佐藤による整理・分析がはじまつたのであろう。押型紋土器のなかでも、より古い要素をもった新型式の可能性を確信した佐藤はその解明のために、以降、積極的に沢遺跡の発掘調査に係わることになる。

大野とともに佐藤も加わった本格的な発掘調査は、1967（昭和42）年4月5日～9日に実施された。発掘調査には県立吉城高等学校の生徒が参加している。発掘区はD-0～5区・D拡張区、E-1～3区・E拡張区で、D区とE区の交わる所から浅い皿状の竪穴住居址1軒（1号住居址）が検出された。1964年調査と1967年調査の発掘成果は直ちに、その年の9月、大野・佐藤の連名による『岐阜県沢遺跡調査予報』『考古学雑誌』第53巻第2号として発表される（以下「予報」と呼ぶ）。その後「沢式土器」の標式遺跡として学界に知られることになる。なお、この「予報」は卷末に転載しているので参照されたい。

**第2次調査** その後、沢遺跡の発掘資料は本格的な報告書作成のため佐藤の元で保管されていたが、1977（昭和52）年、佐藤の急逝により整理作業は中断することになる。1985（昭和60）年に至り、地元古川町の新設展示施設設計画（現山椎館）が構想され、地元で展示したい旨の申し入れが大野から佐藤夫人に伝えられた。こうした古川町教育委員会との話し合いのなか、「予報」にとどまっている沢遺跡の補足調査と正式報告書の刊行をめざし、第2次調査を実施することになった。

第2次調査は1986（昭和61）年8月24日～31日、大野と岡本東三を中心に阿佐ヶ谷先史学研究会諸氏によって実施された。発掘区は第1次調査区一段下のF-0～11区、第1次調査A区とB区の間のG-1～8区、道を挟んだH-1～3区の3ヶ所を発掘した。F-4・5区を中心に2号住居址が検出された。その後、沢遺跡は古川町で買い上げられ、飛騨市指定史跡として保存が図られている。

**報告書刊行の経緯** 佐藤宅で保管していた第1次調査の遺物は、第2次調査の遺物とともに岡本の所属する千葉大学文学部に移される。第2次調査の遺物は、飛騨高山出身の千葉大学大学院生松井朗によって基礎的な整理作業が進められた（松井 2001）。しかし、なお正式報告書の完成をみないまま、2007（平成19）年に発掘調査を主導された大野（4月）、保管に尽力された佐藤夫人（6月）が相次いで逝去された。そして2015（平成27）年に至り、第2次調査時の古川町教育委員会の担当者であった飛騨市副市長白川修平による再度の熱心な要請を受けることになった。これを契機に発掘にも参加された戸田哲也の協力のもと、玉川文化財研究所で報告書作成のための整理作業が進められた。このようにして最初の発掘調査から半世紀すぎた今、漸く報告書の完成に至ったのである。

## 第2章 遺跡の環境

沢遺跡はJR高山本線飛騨古川駅から北東に直線距離で1.2kmを測る。岐阜県飛騨市古川町（旧吉城郡古川町）大字上気多字沢に所在する押型紋土器期最古段階の単純遺跡である（第1図矢印）。

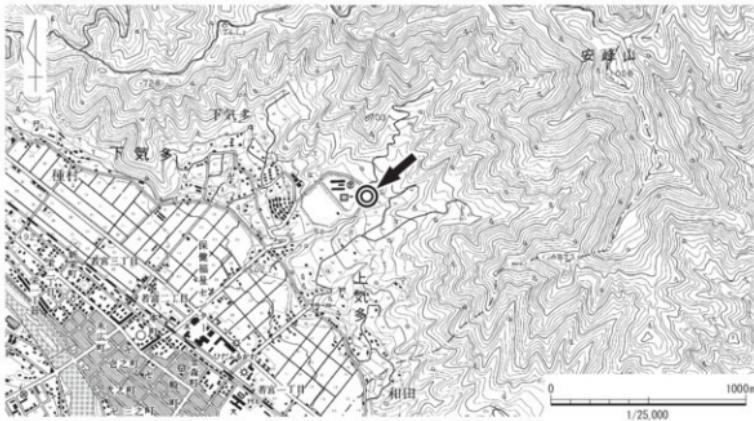
遺跡は安峰山（標高1,058m）の南西裾部標高580～590mの南西に緩く傾斜している高位斜面地に存在している。遺跡の斜面下方の旧地形は500m近くにもわたる緩く下る傾斜地であり、標高約500mの古川町市街地に達する。また遺跡の南東側は谷となっており、北東から南西に流れるこの谷も古川町市街地まで達する。

「予報」では斜面地の約40mの範囲に土器片が散布するとされるが、かつての遺跡下方に広がっていた広大な斜面地形からみると、沢遺跡は高位斜面地の谷に接近したごく限られた面積に存在していたことがわかる。

なお、本遺跡の西～南西斜面下方は県立吉城高校の校地となっており、1976年前後の高校建設に伴って斜面中腹を中心に縄文時代中期および古代の遺物が出土したことが知られている。

### 第1節 地理的環境

東の飛騨連峰と西の白山連峰に挟まれた飛騨高地は、その中央部に宮川と高原川が流れ、やがて合流し越中に入り神通川となって日本海に注ぐ。位山（標高1,529m）の宮峠が分水嶺となり、宮川は日本海側に流れ、もう一方の飛騨川は太平洋側に流れる。こうした山地を流れる河川を中心とした交易路は古く先史時代から発達し、日本海沿岸部側、信州の松本・木曽地域、美濃・東海地方との多様な文化と人々の交流によって、飛騨地方の独自な文化を生み出していったのである。



第1図 沢遺跡位置図

（国土地理院発行2万5千分の1地形図「飛騨古川」を一部改変）

宮川の上流域は沖積低地とそれを取り巻く山地（標高約1,000m）からの地形となっている。この上流域には高山盆地と古川・国府盆地が形成され、地勢的・文化的にも飛騨地域の中核となっている。沢遺跡は宮川右岸の古川・国府盆地の山麓裾部に位置している。遺跡は安峰山（標高1,059m）南西の山麓裾部の傾斜面の標高約580～590mに立地し、眼下には沖積地に広がる古川市街を望むことができる。立地する遺跡の斜面部と沖積面との比高差は約80mを測る。また、飛騨古川駅から北東に直線距離にして12kmを測る。

遺跡を形成する基盤層は黄褐色の花崗岩（船津花崗岩）の風化土層で、上部は粘土化するが、下部は花崗岩が風化した礫を含む土層からなっている（第4層）。こうした花崗岩が風化した砂は真砂土と呼ばれ、山麓部から大雨などによって流出して基盤層を形成したものと考えられる。また沢遺跡は黒鉛を産出する飛騨変成岩帯から直線距離にして約10kmにある。

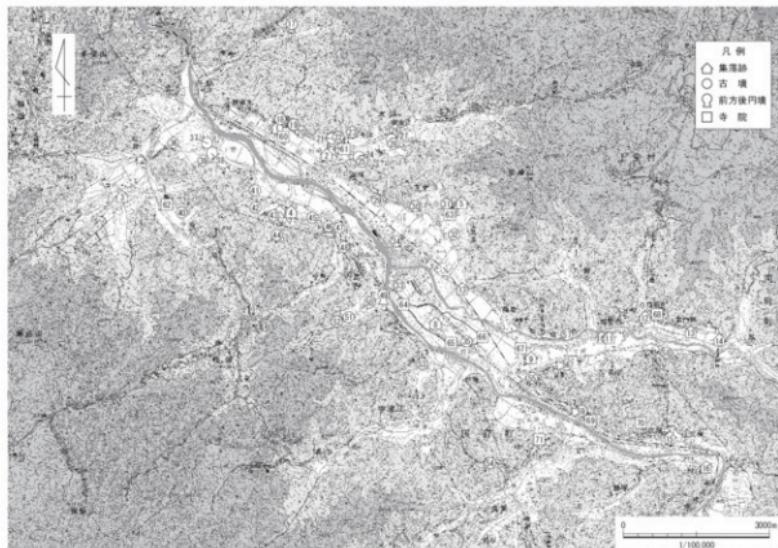
## 第2節 歴史的景観

古川・国府盆地から高山盆地にかけての宮川沿いの地域は、原始・古代から栄えた飛騨地方の中心地である。各時代にわたって多くの遺跡が分布し、現在もなお、飛騨の中核をなす先進的な地域である。また、豊富な遺跡と遺物に注目する飛騨人の関心や風土は、江戸時代の神代石収集家二木長嶌にはじまり、戦前の「ひだびと」や中部考古学会、戦後の大野政雄の考古学的調査、飛騨考古学会の「どっこいし」などの活動につながっている。戦後、こうした考古学的関心が本格的な村山遺跡・沢遺跡などの学術調査の契機となったといつても過言ではない。

現在、古川・国府盆地には沢遺跡に匹敵する縄文時代早期の遺跡は確認されていないが、下流の宮ノ前遺跡（飛騨市宮川町）からナイフ形石器時代から縄文時代草創期の遺物が発掘されている（宮川村教委 1998・2000）。前期の村山遺跡（高山市国府町）の発掘調査では、戦後はじめてとなる竪穴住居址が検出された（塩谷・大野 1960）。これを契機に宮ノ前遺跡（高山市上宝町）・御番屋敷遺跡（飛騨市古川町）が発掘され、中期後半の住居址と遺物が出土した（大江 1958、笠原 1956）。また中野山越遺跡は中期の集落跡や晚期の包含層が発掘され、出土した中期の土器・石器群は、飛騨の地域性をよく示す一括遺物として国の重要文化財として指定されている（戸田ほか 1993）。

稲作文化を伝えた弥生時代を迎えると、この地域では遺跡や遺物はほとんど確認できない。飛騨地域全域をながめても断片的な弥生式土器や石器が存在するにすぎない。高冷な飛騨山岳地域の弥生文化の実体は明らかになっていないが、続く古墳時代の基盤を築く独自の山根みの弥生文化を形成していたに違いない。古墳時代になると、信包古墳群・中野古墳群・高野古墳群など古川町で103基、高山市国府町で387基の古墳が確認されている。四世紀と推定される三日町大塚古墳、五世紀代の亀塚古墳（高山市国府町）、六世紀代の信包古墳（飛騨市古川町）など、前方後円墳や大型円墳の首長墓が宮川沿いの段丘面に形成される。

『日本書紀』朱鳥元年（686）条には「飛騨の伽藍」の記載があり、この地にも仏教文化が波及する。「飛騨の伽藍」については左近庵寺（飛騨市古川町）や三仏寺庵寺（高山市三福寺町）が、その推定地としてあげられている。古川盆地には11ヶ所の古代寺院が所在し、なかでも杉崎庵寺は発掘調査により創建は七世紀末に遡り、法起寺式の伽藍配置の全貌が明らかになっている（古川町教委 1998）。こうした多数の古代寺院の分布をみても七世紀代の飛騨の中心は古川盆地であり、八世紀の国府・国分



1. 岡前遺跡(縄紋・古代) 2. 御番屋敷遺跡(縄紋) 3. 黒内細野遺跡(縄紋) 4. 中野山越遺跡(縄紋・古代) 5. 沢遺跡(縄紋) 6. 太江遺跡(縄紋・古代) 7. 中野大洞平遺跡(縄紋・弥生・古墳・古代) 8. 上町遺跡(弥生・古墳・古代・中近世) 9. 半田塙内遺跡(弥生後期末～古墳後期) 10. 桜本遺跡(古墳後期～奈良前期) 11. 立石遺跡(縄紋・弥生) 12. 深沼遺跡(水田跡) 13. 森ノ木遺跡(縄紋) 14. 荒城神社遺跡(縄紋) 15. 宮ノ下遺跡(縄紋・古墳) 16. 村山遺跡(縄紋) 17. 戸市古塚敷1・2号墳(古墳後期) 18. 岡前諏訪神社裏1・2号墳(古墳後期) 19. 杉崎嵯峨山古墳群(1～10号)(古墳後期) 20. 杉崎嵯峨山古墳(古墳後期) 21. 福荷神社古墳群(1～3号)(古墳後期) 22. 太江多度古墳群(1～8号)(古墳後期) 23. 太江前平1～3号古墳(古墳後期) 24. 太江中ヶ野1～4号古墳(古墳後期) 25. 沼田町天王洞古墳(古墳後期) 26. 太江福藏1・2号古墳(古墳後期) 27. 太江灰古墳(古墳後期) 28. 太江中日影古墳(古墳後期) 29. 種村古墳(古墳後期) 30. 小坂神社跡古墳(古墳後期) 31. 上気多1～3号古墳(古墳後期) 32. 上氣多古墳(古墳後期) 33. 五阿弥塙古墳(古墳後期) 34. 中氣多三塙1～3号古墳(古墳後期) 35. 上町三塙1～3号古墳(古墳後期) 36. 丸山古墳(古墳後期) 37. 羽根坂古墳群(4基)(古墳後期) 38. 信包八幡神社跡古墳(前方後円墳)(6世紀前) 39. 八幡古墳(古墳後期) 40. 寺地西ヶ洞1・2号古墳(古墳後期) 41. 中野宮田古墳(古墳後期) 42. 中野祢宜ヶ洞古墳(古墳後期) 43. 大洞平古墳群(5基、内3基方墳)(古墳後期) 44. 中野山越古墳群(12基)(後期古墳) 45. 上野水上洞古墳群(17基)(後期古墳) 46. 上野井西古墳群(5基)(後期古墳) 47. 上野井西1・2号古墳(古墳後期) 48. 上野城山古墳群(5基)(後期古墳) 49. 高野溝添古墳(古墳後期) 50. 高野巾ノ上古墳(後期古墳) 51. 高野水上円墳(後期古墳) 52. 高野光尊寺円墳(後期古墳) 53. 海具江古墳(方墳)(7世紀後) 54. かうと洞1・2号古墳(7世紀後) 55. 広瀬亀塙古墳(円墳)(5世紀) 56. 三日町大塙古墳(前方後円墳)(5世紀) 57. 半田稗洞古墳群(1～5号)(古墳後期) 58. 南垣内円形周溝墓(4～5世紀) 59. こう岬口古墳(前方後円墳)(6世紀) 60. 杉崎庵寺跡(白鳳) 61. 左近庵寺(寿榮庵寺)(白鳳) 62. 西ヶ洞庵寺跡(平安) 63. 沢庵寺跡(白鳳) 64. 古町庵寺跡(白鳳) 65. 上町庵寺跡(久中庵寺跡)(白鳳) 66. 塔の腰庵寺跡(大日庵寺跡)(白鳳) 67. 堂前庵寺跡 68. 安国寺庵寺(白鳳) 69. 橋石庵寺跡(白鳳) 70. 光寿庵寺跡(白鳳) 71. 名張庵寺跡(白鳳)

第2図 周辺の遺跡（戸田・河合 2015を一部改変）

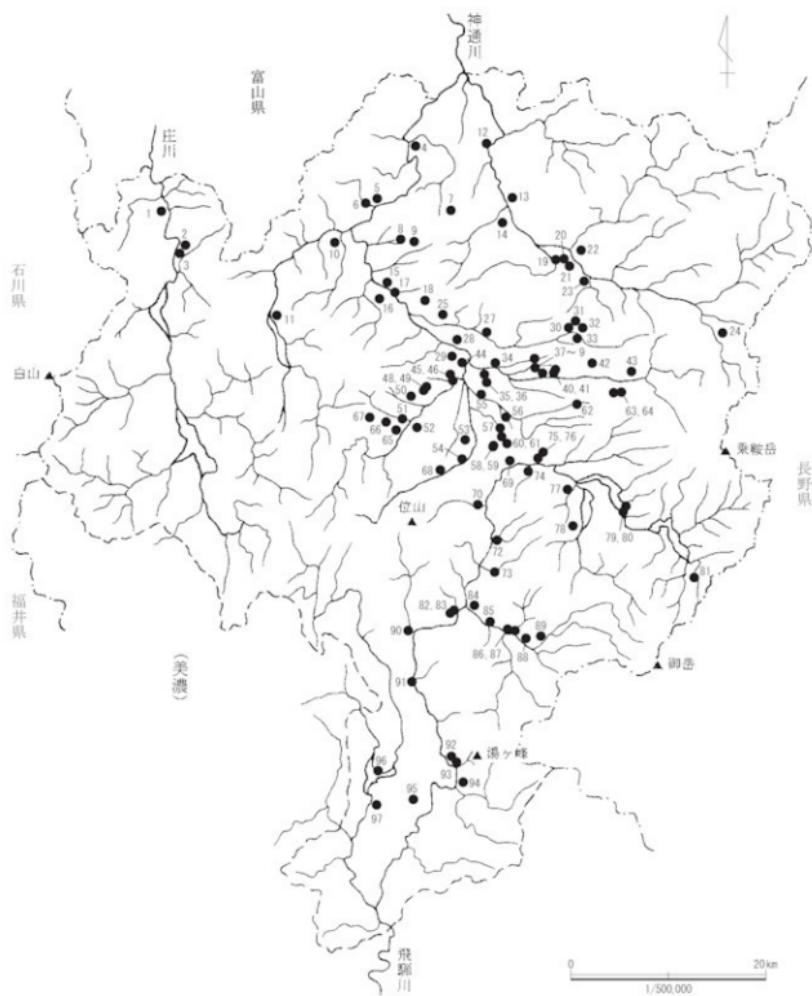
寺がつくられる律令国家形成期を迎えて、その中心は飛驒盆地に移ったことが推定される。なお、上町遺跡からは古墳時代～中世にかけて多くの住居址や荒城都衙と関連する掘立柱建物址群が発掘されている（河合ほか 1991）。

### 第3節 飛驒の押型紋遺跡

飛驒地方の押型紋土器が知られるようになったのは、1933（昭和8）年ひじ山遺跡の押型紋土器の発見にはじまる（笠原 1933）。当時、押型紋土器については各地で見つかっていたが弥生式か繩紋式か、その所属年代も施紋技法も充分に解明できていない時代であった。そうしたなか、山内清男は繩紋文化の上限を追究する過程で、押型紋土器が古式繩紋土器の一群であるという確信に辿り着く（山内 1930）。そして、ひじ山遺跡の押型紋土器が研究史において重要な役割を果たすことになる。江馬修から送られたひじ山遺跡の押型紋土器について、山内は単に紋様を押捺したものではなく彫刻棒を回転した押型紋であることを明らかにするとともに、最古の繩紋土器の仲間に位置づけたのである（山内 1934・1935）。山内からの手紙を受けた江馬は、新たな飛驒の押型紋土器の紹介とともに、古式繩紋土器としてのひじ山遺跡の押型紋土器の本格的な追究を行っていく（江馬 1934、赤木 1936・1937）。こうして、ひじ山遺跡の押型紋は全国的な標式遺跡の一つとして注目され、飛驒の地元でも広く関心をもたれるようになった。現在では飛驒の押型紋土器は100ヶ所近くの遺跡を数え、美濃の押型紋遺跡約80ヶ所を加えると、岐阜県内では約180遺跡を数える（大石 2011）。信州の押型紋遺跡（約175遺跡）を加えた中部山岳地帯が、東部押型紋文化圏の中核であることは明らかである。

飛驒の押型紋遺跡は日本海に注ぐ庄川・宮川流域と伊勢湾に流れる飛驒川流域に分布する（第3図）。沢式や黒鉛を含む帶状押型紋は現在、約30遺跡で確認されている。沢遺跡・はつや遺跡・中道遺跡・下田遺跡など、比較的短期間の単純遺跡がある一方、宮ノ前遺跡・宮ノ下遺跡・牛垣内遺跡・西田遺跡・上ノ平遺跡など、継続的・拠点的な遺跡も形成されている。美濃にもその広がりをみせている（九合洞穴遺跡・西ヶ洞遺跡）。なお越後の帶状格子目紋の卯ノ木1式が、宮ノ前遺跡・宮ノ下遺跡から出土していることは注目されよう。

飛驒と美濃の押型紋遺跡の違いは、伊勢湾に流れる飛驒川水系すなわち美濃に西のネガティヴ押型紋が多くみられることである（飛瀬遺跡・富田清友遺跡・落合五郎遺跡）。飛驒ではまとまった資料は亀ヶ平遺跡（萩平型）が唯一の例である。細久保式段階になると両地域に共通してみられ、牛垣内遺跡・西田遺跡などの拠点的遺跡が出現する。裏面に柵状紋を有するものはあるが、なぜか柵状紋+押型紋の黄鳥式は現在のところ確認できない。続く終末期の高山寺式、穂谷・相木式は両地域に分布し、東千束遺跡・向畠遺跡・的場遺跡では沈線紋土器が共伴している。



第3図 飛驒の押型紋遺跡の分布（大石 2011を一部改変）

### 飛驒の押型紋遺跡一覧（大石 2011を一部改変）

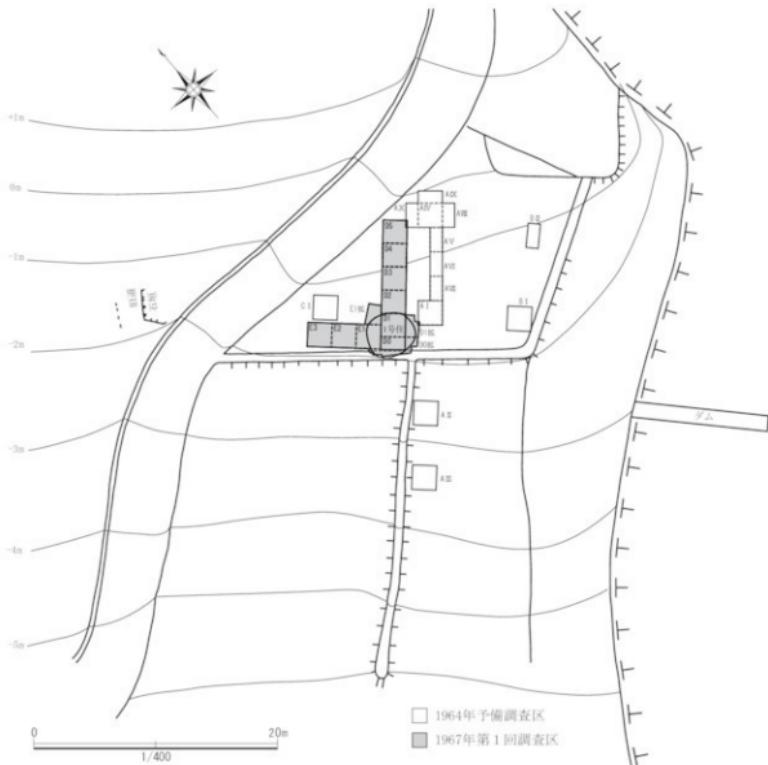
## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 発掘調査の概要

#### (1) 第1次調査 (1964(昭和39)年調査・1967(昭和42)年調査)

調査の経緯でも述べたように1964(昭和39)年の予備調査と1967(昭和42)年の第1回調査は大野、佐藤の一連の調査として行われたものであり、この2度の調査を第1次調査とする。

第4図は第1次調査の前後2度の調査区配置図であり、1964年調査はA-I～X区と、B-I・II区、C-I区の合計13区の調査が行われた。予備調査らしく斜面の上下左右に広くグリッドを配している。この調査に関する記録類はほとんど確認できなかったが、僅かにセクション図を認めることができる。



第4図 沢遺跡第1次調査区設定図

なお1964年調査の出土遺物は、この後の1967年調査の出土遺物と一緒に佐藤達夫が整理を進め、メモ類が残されている（佐藤原資料-3・5参照）。

1967年調査はA区の西側にD-0～5区、D-0・1拡張区、E-1～3区、E-1拡張区の合計12区を設けて調査が行われた。

調査期間は1967（昭和42）年4月5日～9日までの5日間である。佐藤による簡単な調査日誌が残されており以下に記す（佐藤原資料-1参照）。

#### 発掘日誌（1967年4月5日～4月9日）

- 4月5日：大野先生と2人Dトレーナーを設定1～5区に分つ。2区を完掘す。大形の破片やや多く出る。  
 4月6日：吉城高校の生徒8人来援。3、4、5区を完掘す。土器少し。1区には土器多出。  
 4月7日：高校生8人来る。3～5区埋立てる。1区を掘る。竪穴の東北壁を確認す。土器・石器多し。略円形のプラン出る。床面をけずりはじめて止む。D区と直角に西北方にEトレーナーを設定。E1、E2、E3とす。E1区には竪穴の1部がかかる。2、3区土器殆どなし。（第1層のみ）層序は次の如く、  
 黒土（1層）→褐色土（2層）→黒土（2'層）→床面（佐藤原資料1-②）  
 土器2'層の上面に多し、（cf写真）2層にも多く含まれる。4月6日の第3層とせしは第2層の誤り。  
 D0の第1層を剥ぐ、途中にて止む。E1、2、3を埋立つ。  
 4月8日：E1～2層 石皿、大形1完全  
 4月6日：D1～2層上部 台石1完全  
 4月9日：D1～拡張部～2層中（床面に近い大石の上に乗りたるもの）台石1半切  
 烧石D1～2層 2ヶ 他（D1～2層）2ヶ 以上、置いてゆくもの

この調査では日誌にもあるようにD-1・E-1・D-0区を中心にして竪穴住居1軒が完掘され、出土遺物もこのD-1区を中心にして大形土器破片を含む多くの量が出土した。この1967年4月初めの調査の後、半年を経ずして「予報」がまとめられたのである。1964年の予備調査遺物の分析がある程度進んでいたこともあったであろうが予報の記述を読むほどに土器観察の緻密さと、集中的に分析が進められたことに驚くばかりである。

## 押し型紋時代（四千年前）住居 岐阜・古川町でみつかる



岐阜県古川町で発見された押し型紋土器時代の円形クテ穴住居跡

### 当時の新聞報道記事

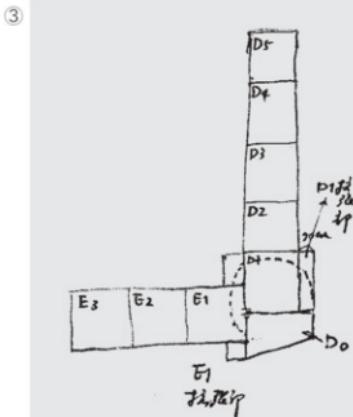
中日新聞 昭和42年4月14日  
(金曜日)

【古川町】岐阜県古川町で、約4000年前の「押し型紋時代」の円形クテ穴住居跡が発見された。岐阜県立歴史博物館の佐藤達夫氏によると、この住居跡は、直径約4メートルの丸い土坑で、その中に土器が積み重ねられていた。また、土器の中には、骨器や石器などの道具が含まれていた。この住居跡は、これまで岐阜県内で発見された最も古い住居跡であり、その構造や道具の種類から、この時代の生活様式が詳しく理解できる貴重な発見である。今後、この住居跡の詳細な調査が行われることで、古墳時代以前の歴史研究に大きな進歩が期待される。

① 4-5  
大型甕と2人でDTU-4を設立  
1~5匁に分り、  
2匁を空挺す。大型の器物や  
多く見え。

4-6.  
吉原高段、唯住8人来援、  
3, 4, 5匁を空挺す。  
土を少しだ。  
1匁の土を多く出。

4-7  
吉原も8人ほど。  
3~5匁を空挺す。  
1匁を8段。里元の化粧盆を  
堆積す。土平、石平より、  
10匁19段の2段階踏み。  
床面をけりりめでせび。



D0の1匁を削ぐ。途中にて止む。  
E1, 2, 3匁を設立。

② 口凹と色肩は西側方にE1-P  
を設立。E1, 2, 3匁とす。  
E1匁は里元の1/3がかかる。  
2, 3匁 土を設立しない。

(井戸口付)

底部>2mm,

—VVV—

里土 (1P)

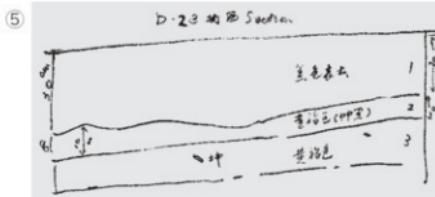
3色土 (2P)

里土 (2P)

本面

土層 2Pの上面にさし、(4.5段)  
2Pは6段と合計3。4106kgの  
3Pとせば2Pの2段。

④ 4月8日 E1-2P  
石面、大型 / 室空  
4月6日 D1-2P土押  
台面 / 室空  
4月9日 口/-板16cm -2P  
(木脚10cm、大石の上に築7.36m)  
台面 / 半仰  
地元  
D1-2P, 2P  
K(D1-2P) 2P  
2上、走りてわくもの、



## (2) 第2次調査 (1986(昭和61)年8月24日～31日)

佐藤没後(1977年)、沢遺跡の発掘資料は正式報告書刊行の準備作業のまま、阿佐ヶ谷の佐藤宅に残されていた。未完成の状態を危惧した大野は佐藤夫人を訪ね、報告書の刊行や遺物の地元への返還を話合われた。その結果、古川町教育委員会の協力のもと報告書の完成をめざし、再度の発掘調査を実施することになったのである。第2次調査は大野と岡本が呼びかけ人となり、東・西の若き研究者が手弁当で参加してくれた。

発掘調査は第5図にみるように第1次調査のA区とB区の間にG-1～8区、一段下の面にF-0～11区の発掘区を、遺跡の広がりをみるために道を隔てた北側にH-1～3区を設定し、調査を進めた。

調査の結果、F4・5区から2号住居址を検出し、拡張区を設け全体の調査を行った。住居址の北半は壁や柱穴を検出できたが、南半は傾斜面のため削平されていた。上段のG区は遺物は出土するが、流路や風倒木痕によって搅乱されていた。第1次調査のA区を確認した。

### 発掘参加者

安斎正人、天野孝博、今田あさり、太田晴久、大塚達朗、岡本東三、木下哲夫、高井良夫、鷹野光行、高橋龍三郎、出川紫乃、戸田哲也、中島 宏、西脇対名夫、本間理恵子、松尾香弥子、宮原義郎、矢野健一

### 発掘日誌 (1986年8月24日～8月31日)

8月24日(日)：発掘開始。第1次発掘調査区の一段下の桑畑であった所にF-0～11区(2×30m)、A区とB区の間にG-1～8区を設定する。F-4・5区で住居跡とみられる落ち込みを検出。

8月25日(月)：F区で検出した住居跡を2号住居址とし、拡張区を設け全体を確認する。

G区は地山近くまで約70cm。土層が一部搅乱している

8月26日(火)：F区の2号住居址のプランを確認に勉める。床面から黒鉛入土器やチャート片を検出。

G-4区で第1次調査のA-1区を確認。住居跡の可能性ある黒色土は部分的な堆積であった。

8月27日(水)：2号住居址の全形プラン(4.50×4.26m)を検出。北半は壁が残るが、南半の壁は斜面のため、検出できず。

G-1・2～G-4・5区の落込みは、住居ではなく風倒木痕の可能性が高い。

8月28日(木)：2号住居址の清掃し写真撮影。F区の土層断面作成。

G区の風倒木痕は約2.9×2.5mの円形で、断面はすり鉢型を呈する。

地形測量及び発掘区全体の測量を開始。遺跡の広がりをみるために道を隔てた北側に、H-1～3区を設け発掘。

8月29日(金)：F区の調査完了。

G区南半部のため押し発掘。写真撮影。

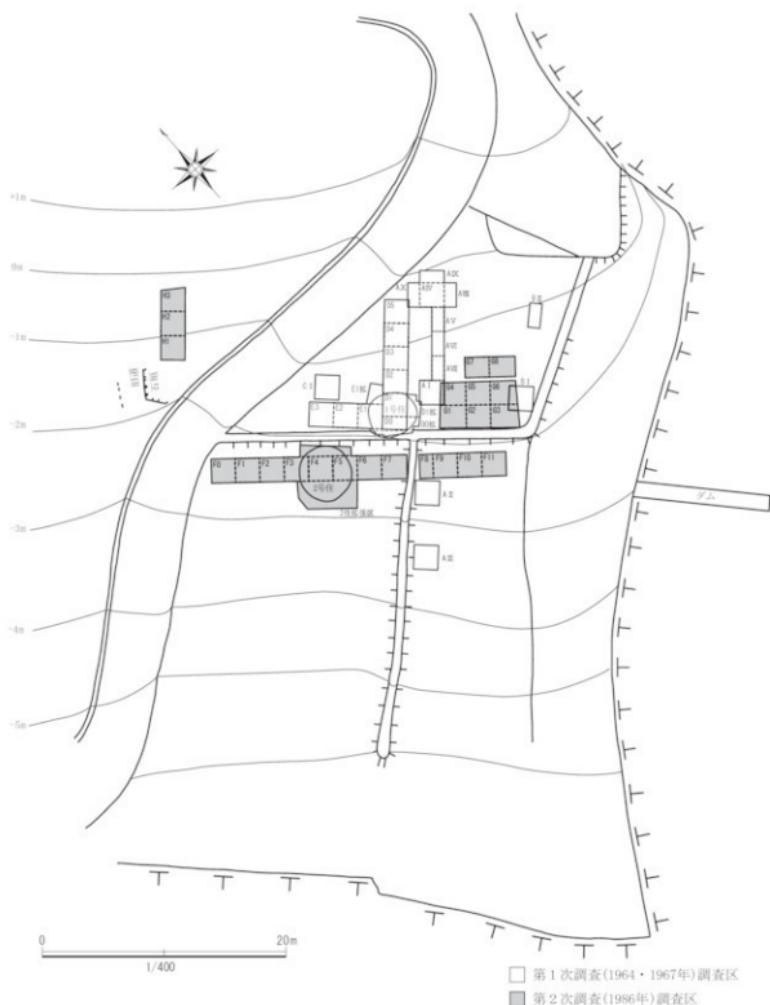
地形測量継続。

8月30日(土)：F区の埋め戻し完了。

G区西北・南西断面図を作成後、写真撮影を行い、埋め戻し完了。

地形測量を完了。

8月31日(日)：調査團を解散し、それぞれ帰途につく。



第5図 沼遺跡第1次・第2次調査区設定図

## 第2節 層序

「予報」で記述された第1次調査の層序を上層から順に示すと、第1層（表土層）は黒色土層。第2層は褐色土層。第3層は住居の床面直上部のみ堆積が認められる風化砂礫を含む黒褐色土層となる。第4層は基盤層で黄褐色を呈する花崗岩の風化土層で、上部は粘土化しているが、下部は砂質となり花崗岩の風化礫を含んでいる。なお第2次調査の層序も基本的に第1次調査と同一であり、層位名を統一して用いている。

セクション図は第1次調査におけるA-I区東壁①、A-IV区東壁②、B-I区東壁③、C-1区東壁④、D-2区西壁⑤を示し、第2次調査ではF-1区南壁⑥、F-6区南壁⑦、G-1区西壁⑧、G-2区南壁⑨を示した。

第1層（表土層）の層厚は約25~80cmを測り、斜面上方から中央部にかけて堆積が厚くなり、斜面下方に向かって薄くなる。斜面上方のA-IV区では層厚25~40cm。斜面中央の1号住居址周辺では、A-I区で層厚40~55cm、D-2区で30~35cm、G-1区で60~70cm、やや東側のG-2区で50~80cmを測る。斜面南側ではA-II区で層厚20cm弱、F-6区で15~20cm、斜面下方A-III区では層厚15cm弱となる。また東端に位置するB-I区では層厚約25~40cm、西側のC-1区では層厚約30~35cm、南西側のF-1区では層厚20~40cmであった。「予報」によれば、第1層は上下2層に分層できる場合があり、上層からは近世の墓が穿たれていたことが記されており、A-IV区の第1層下部の掘り込みが相当すると考えられる。また第2次調査では、G-1区およびG-5・6区で第2層を切り込む土坑がそれぞれ1基ずつ検出されている。

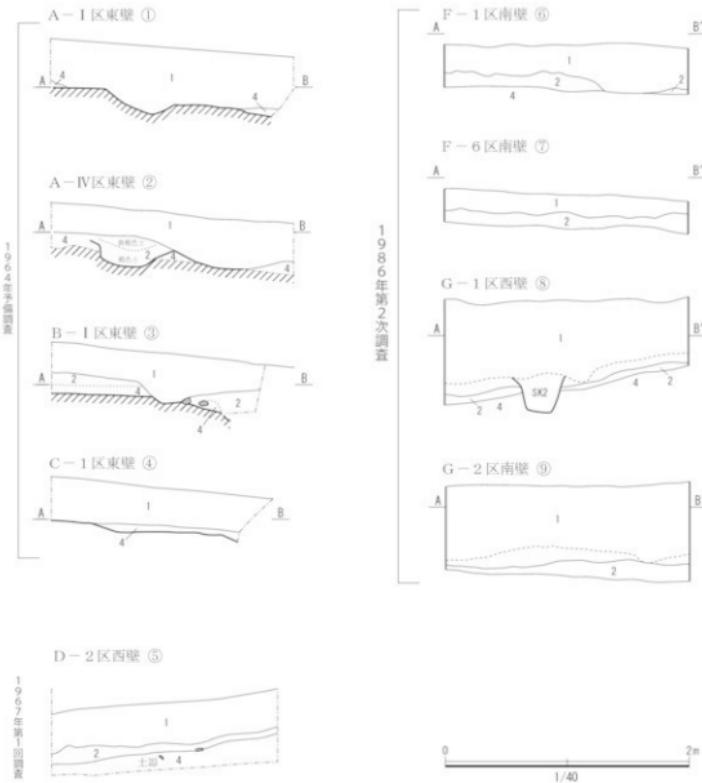
第2層はD-2区で層厚5~15cm、G-1・2区で5~15cm、B-I区で10~15cm、F-1区で5~15cm、F-6区で10~15cmの堆積が確認された。また予報第2図に記された1号住居址のセクション図では「住居址の部分は最も厚く、第1層は約50cm、第2層は約35cmに達する」と報告されている。第8図に示した2号住居址の上面では部分的ではあるが最大で10cmの堆積が確認された。

第3層は前述したように、住居址の床面直上部にのみ堆積が確認され、遺跡の他の部分には堆積が確認されていないことから、住居内の生活に伴って生じたものと記述されている。予報第2図をみると、堆積が最も厚い北壁側で約20cm、南側では堆積が薄くなっている。また第2次調査で検出した2号住居址では、1号住居址と同様に床面直上に第3層の堆積が確認され、東側では20cmほど堆積していたが西側に向かって薄くなり西壁際ではほとんど堆積していなかった。

第4層は基盤層で、図示したセクション図では上部の粘土化した土層の一部が記録されている。D-2区では上部の粘土化した層の上面より4cmほど下位で土器片が出土している状況が記録され、「予報」での記述を裏付けるものである。なお発見された住居址は第4層から掘り込まれ、上部には住居址外と同様に第2層が被覆している状況であった。

押型紋土器の破片は第1層から第4層までの各層に含まれるが、予報では「量的には第2層が最も多く、第3層には細片が目立った」と報告されているように、第2層の堆積が厚いD-1区を中心にして土器片や石器が多く出土している。また第3層から出土した土器は、上層のものと同一個体に属するものがかなりあるとの所見が記されており、遺跡から出土した押型紋土器と住居址の時期は大体において等しいものと捉えられている。

1964・1967年第一次調査



第6図 第1次・第2次調査グリッド土層断面図

### 第3節 壊穴住居址

沢遺跡では第1次調査、第2次調査においてそれぞれ1軒ずつの壊穴住居址が発見され、完掘されている。今回の報告にあたり調査年次は異なるが、一連の目的をもって行われた調査であったということに基づき住居址の号数を通算させることとし、第1次調査-1967年検出分を1号住居址、第2次調査-1986年検出分を2号住居址と呼称する。

#### (1) 1号住居址(第7図、図版3~6)

1967(昭和42)年4月の調査においてD-1区より発見され、D-0区、E-1区および拡張区を設けて全体が完掘された。前掲した調査日誌の4月7日の項に壊穴住居址調査の記述をみる。

「予報」では1号住居址の規模は、西北-東南3.95m、東北-西南3.5mを測り、不整円形を呈する。壊穴の掘り込みはごく浅いが、北側(山側)の掘り込みはやや深く15cm前後を測り、斜面下方の西南側は僅かな立ち上りとなる。床から壁は浅い皿状を呈する。炉はないと思われる。

土層は住居址の部分が最も厚く、第1層は約50cm、第2層は約35cmを測り、第2層は住居址覆土内にも堆積している。第3層は住居址の床面直上部にのみ認められる(第7図点線範囲)黒褐色土層であり、最も厚い部分で約20cmを測る。この第3層は住居内の生活に伴って生じたものとみるべきと考えられ、この部分に生活の中心があったものと推定している。なお第3層中出土の土器片は細片が多く踏み碎かれたかのごとき觀を呈していたとされ、上層出土のものと同一個体に属するものがかなりあることから、住居と押型紋土器は時期を等しくするものと結論されたのである。床面に密着する遺物は3個の磨石があったにすぎないとされ、第7図の平面図に出土位置が記録されている。

なお調査日誌4月7日の住居内堆積土の記述とスケッチ図では、「黒土(2'層)」の表現をみる。調査時では2'層と呼んでいたものを、予報にあたって第3層に変更されたものと考えられる。

また住居内C-Dセクション図では、住居中央部付近に第3層が落ち込む深さ10cm、幅60cm程の凹み(掘り込み?)が認められる。平面図には表現されていないので推測の域を出ないが、関東-東北の撲糸紋土器期~早期の壊穴住居中央にみられる掘り込みとの関連を想起させるところがある。

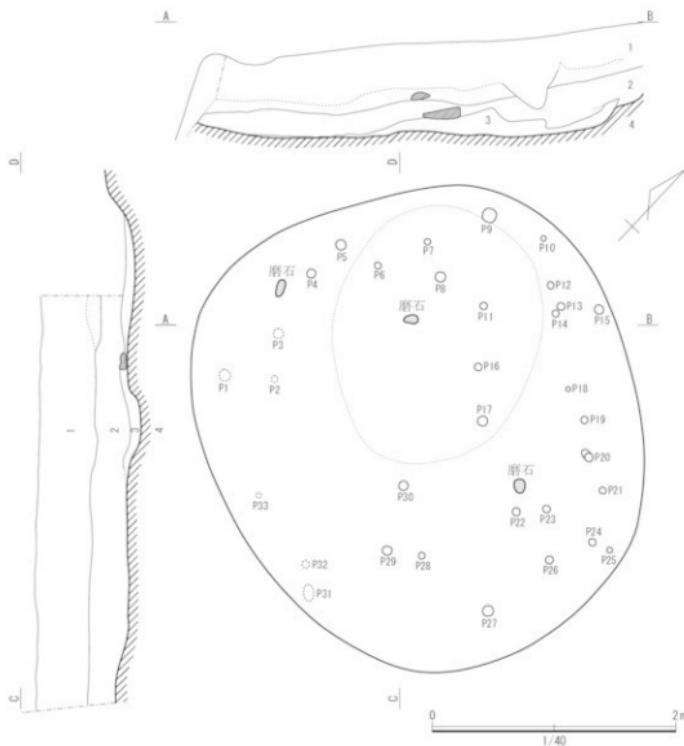
次ぎに「予報」では1号住居址の柱穴配置と住居構造について詳しく述べられており、その記述に関わるメモ書が残されている(佐藤原資料-4参照)。詳細は第5章の考察において検討するが、ここでは予報の内容をまとめておきたい。

主柱穴は2個(P17、P30)で深さ18cmと19cmで、側柱穴に比べて深い。側柱穴は壁に沿って並び、東北側のP10~P25までが直線的に並ぶ。北西側の側柱穴はP5とP9であり、北西壁が直線的であることもふまえ、方形家屋の構造を推定されているが、その背景として当時僅かに知られていた花輪台貝塚の方形住居址の伝統にあることを憶測されているのである。

主柱穴と側柱穴列の間には中間柱穴を認め西北、東北、東南各部のほぼ中央にある、とされP16、P22・23、P28・29が該当する。このうちP22・23とP28・29は対になるものと捉えている。

入口は東南を推定し、対の内側にあるP22、P28は入口との関係も考えられている。これに対する北西壁側のP6、P7は窓を想定されている。

このように1号住居址について柱穴の配列から上屋の構造までも検討されており、この時代まだ調査例の少ない繩紋早期の壊穴住居址に関しての先駆的分析が加えられたのであった。



1号住居址柱穴一覧表

柱穴番号	規模	深さ	柱穴番号	規模	深さ	柱穴番号	規模	深さ
P 1	径10	10	P 12	径6	8.5	P 23	径7	10
P 2	径6	9	P 13	径11	18	P 24	径7	10
P 3	径9	10	P 14	径6	9.5	P 25	径5	6
P 4	径8	9	P 15	径8	6.5	P 26	径7	7
P 5	径8	7	P 16	径7	10	P 27	径9	8
P 6	径6	10	P 17	径9	18	P 28	径6	11
P 7	径5.5	7	P 18	径4	5.5	P 29	径8	10
P 8	径9	9	P 19	径6	6.5	P 30	径8	19
P 9	径12	11	P 20	径7	8	P 31	10×14	5
P 10	径4.5	6	P 21	径6	9	P 32	径7	7
P 11	径7	12	P 22	径7	10	P 33	径5	5

第7図 1号住居址実測図

## (2) 2号住居址(第8図、図版9~12)

1986(昭和61)年8月に実施された第2次調査では、第1次調査で住居址が検出されたDトレンチの斜面下方にあたる南側にFトレンチ、東側にはGトレンチをそれぞれ設定した。また斜面上方西側のやや離れた地点にはHトレンチを設定した(第5図)。第2次調査では、調査区西側のF-4・5区を中心に壊穴住居址が1軒検出され、第1次調査で1号住居址をすでに付していることから、その通し番号で2号住居址と命名した(第8図)。2号住居址は1号住居址と同様に第4層に掘り込まれ、床面直上には第3層が最大で20cmほど堆積していた。その上部には部分的ではあるが、第2層が10cmほど確認された。

基盤の傾斜下方にあたる南西側は失われているが、平面形は略円形と推定される。壊穴の直径は、壁面が遺存している北西-南東側で4.30mを測る。

壊穴の掘り込みはごく浅く、断面形は皿状を呈する。壁面はやや開ききみに立ち上がり、斜面上方にあたる北東側の掘り込みの深さは38cmである。壊穴内に炉は検出されていない。また壊穴の中央部には、2.12m×0.72mの範囲に貼床が確認されている。

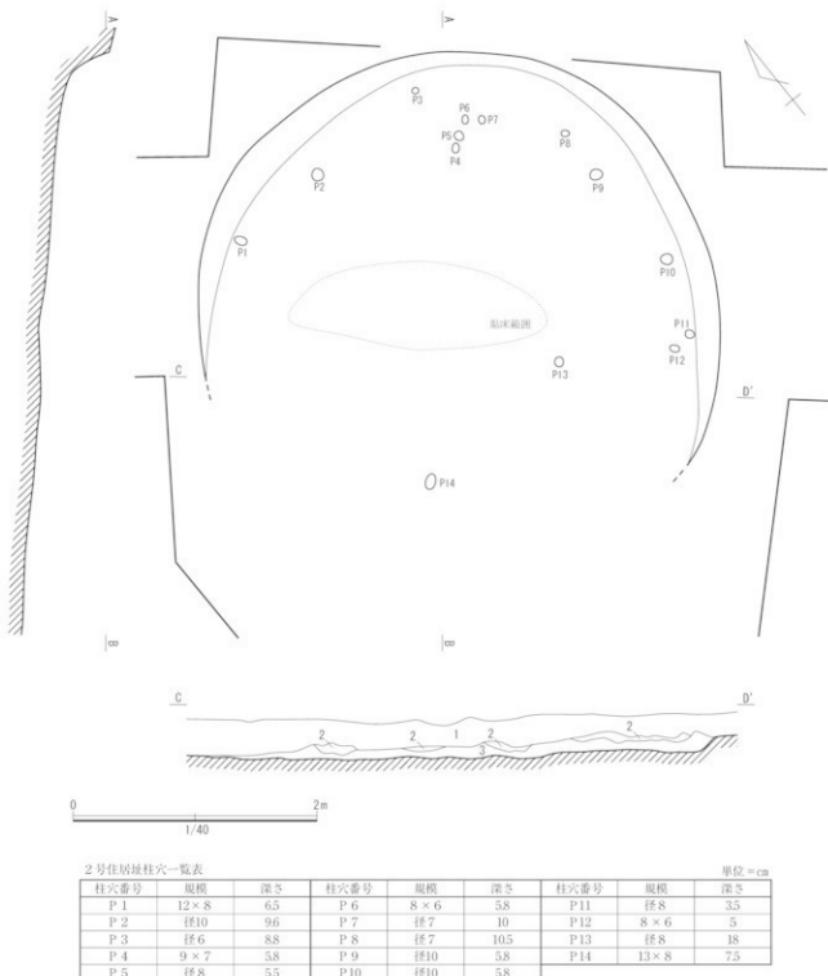
住居址の床面直上からは、山形押型紋2点、格子目押型紋1点、無紋土器1点が出土している。

壊穴の遺存部分では側柱穴(P1~3・P6~12)が壁に沿って内側に並ぶ。東北側では側柱穴のやや内側に2本の柱穴(P4・5)が確認されている。P13は径8cm、深さ18cmを測り主柱穴の可能性があるが1本のみであり確定はできない。P14は1号住居址にもみられた西南方向の入口中央に関わる柱穴かもしれない。側柱穴は長径6~12cm、深さは3.5~10.5cmであった。1号住居址で指摘された中間柱穴は認められない点が大きな差異となる。第2次の調査日誌によれば、これらの柱穴は垂直に掘り込まれているものと壊穴の中央部に向かって斜めに掘り込まれているものがあり、北側で検出された側柱穴が斜めに掘り込まれていたと記されている。

2号住居址は1号住居址よりもひとまわり大きな規模をもち、プランは円形基調で側柱穴も円形の列となる。方形基調を推定している1号住居址と比べプラン、柱穴の配列に差異が認められるが、山側に壁をもち、南側に開くとみれる壊穴の形態は類似しており、片屋根のような構造も今後考慮する必要があるかもしれない。



第2次調査2号住居址北壁と床面(南から)



第8図 2号住居址実測図

## 第4章 出土遺物

### 第1節 土器

沢遺跡出土土器は1964(昭和39)年の予備調査と1967(昭和42)年の第1回調査において出土したものを第1次調査出土遺物とし、1986(昭和61)年に行われた第2回調査において出土したものを第2次調査出土遺物として、図版と記述を分けて報告する。ただし土器分類については今回の報告において設けた分類基準のもとに統一して記述する。

なお今回の整理の結果、「予報」で指摘された4種(押型紋・結節回転紋・条痕紋・無紋)の土器以外の同時期土器類は含まれていないことが再確認された。そのうえで今回の報告に図示しえる主要土器破片を抽出した点数の一覧表を第1表として以下に示し、全体把握の参考とする。また拓本によって図示した破片は土器観察表において紋様、胎土、出土位置、層位、破片の細部観察事項等を記載しており、参照されたい(第3・4表)。

第1表 沢遺跡出土土器一覧表

	拓本分		未掲載分		合計
	第1次	第2次	第1次	第2次	
山形紋	132 (口縁49)	27 (口縁9)	178 (口縁12)	73 (口縁14)	411 (口縁85)
格子目紋	4 (口縁2)	1	1	0	6 (口縁2)
山形紋+格子目紋		1 (口縁1)			
結節回転紋	9 (口縁3)	6 (口縁2)	9	7	31 (口縁5)
条痕紋	3				3
無紋土器	26 (口縁14)	20 (口縁10)	3 (口縁3)	8 (口縁8)	57 (口縁35)
底部先端	3				3
無紋胴部			1019	222	1241
	177	55	1210	310	1752

#### (1) 帯状押型紋土器分類基準

はつや遺跡や向陽台遺跡の発掘報告においては、「樋沢遺跡報告」(岡谷市教委 1987)で提示された帯状押型紋の分類基準に準拠した表記がされている(塩尻市教委 1988、清見村教委 1989)。本報告では「予報」の分類に準拠し、合わせて沢遺跡以外から出土した帯状押型紋の紋様構成を参考しながら、次のように分類する(第9図、第2表)。

この分類基準を表記すると、A I型1帶a種は、山形紋・表面のみ施紋・口縁部横帯に接して縦帯を施紋した構成を示す。山形紋のa'種は口縁部に無紋帯を設けた第一横帯から縦帯を施紋するもの。A II型2帶b種は、山形紋・表・裏施紋・第一横帯に接した縦帯が第二横帯と直交する構成を示す。なお、縦帯のみのO帶は、a種のみである。しかし、口縁部の小破片ではI型O帶aとI型1帶a'種、II型O帶a種とII型1帶b種の各2種、I型1帶a種とI型2帶a種、II型1帶a種とII型2帶a種の各2種、I型1帶a種とI型2帶b種、II型1帶a種とII型2帶b種の各2種の判別は難しい。また口縁部でないとI型1帶a'種・I型2帶a種、II型1帶a'種・II型2帶a種の4種の判別はできない。胴部の直交した施紋部片ではI型1帶b種・2帶b種とII型1帶b種・2帶b種の4種の判別

施紋類	I型			II型		
	0带	1带	2带	0带	1带	2带
山形紋(A群)	a					
	a'					
	b					
格子目紋(B群)	a					
	b					
結節紋(C群)	a					
	b					
繩紋(D群)	a					
	b					

第9図 帯状押型紋土器の分類

定は不明。なお、口縁部に広く無紋帯をもつ1帶a種は、現在のところ山形紋のみに確認されている。

沢遺跡で確認される紋様構成は、山形紋のA I型0帶a種・A I型1帶a種・A I型1帶a'種・A I型2帶a種・A I型2帶b種、A II型0帶a種、A II型1帶a種・A II型2帶a種、格子目紋のB I型1帶a種(?)・B II型1帶a種、結節紋のC I型0帶a種・C I型1帶a種・C II型0帶a種である。山形紋8種、格子目紋2種、結節紋3種の計13種の紋様構成をもっている。結節紋を施紋するC群は、沢遺跡のみである。繩紋を帶状施紋するD群は信州に多い。なお他の回転紋としたE群には、はつや遺跡の魚骨紋があり、唯一の例である。

なお、樋沢遺跡の山形紋と楕円紋を併用した横帶のみのものや卯ノ木1式と呼ばれる格子目紋の横帶のみの0帶b種は、口縁部内面や口唇部には施紋されず楕円紋を併用している。沢式にはみられないことから後出的な要素を有している

第2表 帯状押型紋土器の分類基準

紋様の種別	A群－山形紋、B群－格子目紋、C群－結節紋、D群－繩紋、E群－その他の回転紋(魚骨紋)
表裏の施紋	I型－表面のみの施紋、II型－裏面口縁部施紋
帯状の構成	*口縁部に施紋された横帶を基準にして 0帶a種－縦帶のみの構成、0帶b種－横帶のみで構成、1帶－一帶構成、 2帶－二帶構成  *口縁部の横帶と胴部の縦帶の関係 0帶a種(+)－口縁部から縦帶のみで施紋するもの 0帶b種(−)－口縁部から横帶のみで施紋するもの 1帶a種(T)－口縁部横帶に接して縦帶を施紋するもの 1帶a'種(τ)－口縁部に無紋帯を設けた横帶に接して縦帶を施紋するもの 1帶b種(+)－口縁部から施紋した縦帶と横帶が直交するもの 2帶a種(〒)－第二横帶に接して縦帶を施紋するもの 2帶b種(ヰ)－第一横帶に接した縦帶が第二横帶と直交するもの

## (2) 第1次調査の出土土器

以下、今回の整理による新分類に基づき土器群の説明を行う。

### 山形押型紋(A群)土器

#### I型0帶a種(第10図1)

I型は口縁下外面にのみ施紋を行い、口縁裏の施紋は行わない。0帶は口縁直下の横帶施紋を欠くものであり、a種は表面縦帶施紋の分類名称である。

Iは山形押型紋が口縁直下より縦位に帯状施紋されるものであり、予報の第4図4にあたる。器形は大きく外反し、口縁上面は平坦かつ断面形は角張っている。第1次調査の口縁部破片で本種と確認できるのはこの1片であるが、第2次調査で1片出土している(第21図1)。

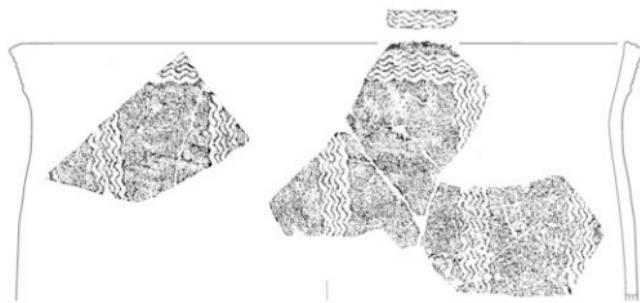
#### I型0帶a種(第10図2・3)

II型は口縁裏の横位施紋が施されるものである。0帶は口縁直下の横帶施紋を欠くものであり、a

I型O帶a種



I型1帶a種



第10図 第1次調査出土土器 (1)

0 5cm  
1/2

種は表面縦帶施紋の分類名称である。

2は1と同様に口縁部から山形押型紋が縦位に帯状施紋されるものであり、口縁裏には横位に施紋され、II型として分類される。器形は大きく外反し、口端上面は平坦に整形される。山形紋は少し左傾する縦位の帯状施紋が施される。縦帶間の無文部は2.5cm以上空く。なお同一個体である右側の破片は第2次調査の出土である。

3は口縁部の小破片であるが、表面右端に縦位に施紋される山形紋の一部が確認され、0帶に属す。

#### I型 1帶 a種 (第10図4・5)

口縁下に1条(1帶)の横位施紋を施し、それに接して縦位に帯状施紋される。口縁裏には施紋しない。確実な例は以下の2例である。

4は口縁下5mmほどを空けて横位1帶の山形押型紋を施紋し、それに接して縦位帯状施紋を施す。縦帶間の無文部は4.2cmを測る。器形はゆるく外反し、口端上は平坦に作られ、強く押型紋を施紋することにより口端部の粘土がはみ出す状況がみられる。予報の第3図3にあたり、縦帶を先に施すと説明されているが今回の観察でも追認された。器形は大きく屈曲のない外反形態となり胴部で僅かにくびれる。推定口径20.1cm、現存高12.7cmを測る。本個体の裏面の一部には板状の剥離痕を明瞭に確認することができ、板状粘土の貼り合わせにより土器成形が行われていることを示すものである(図版23-4参照)。

5は口縁下に横位1帶、それに接して縦位施紋を施す。縦帶間の無文部間隔は3.1cm、3.6cm、4.2cmであり、3~4cm間隔で縦帶が施紋されていることがわかる。予報の第3図1にあたり、横位施紋が先とされる。外反する口縁下で強くくびれる器形をもち、胴部がふくらむ器形となる。口縁部は肥厚し、口端上は幅広く平坦に作られ、加えて押型紋の施紋により口端前部が明瞭にせり出す。しかし口縁下の横位帯上部は明瞭に回転圧痕が残されていることから、横位施紋が先で口端上の施紋が後に行われたことがわかる。器内面には整形痕とみられる口縁裏横位、胴部裏縦位の弱い擦痕が認められる。推定口径26.1cm、現存高10.4cmを測り、本遺跡では最も大形の個体となる。

#### I型 1帶 a'種 (第11図6~11)

口縁下に無紋部が大きくみられるものおよび口縁下に無紋部をもつa'種であり、予報では口縁直下の横帯を欠くものが1例、とされたものである。口縁下に1cmを超える無紋部を生じる破片があり、口縁下無紋幅のバラエティとして本分類に加えた。

6は予報の第4図6にあたり、口縁直下の横帯を欠くものと説明されたものである。頸部上端に横位1帶の帯状施紋が施されるが施紋帯が左から右へ傾斜して施紋される。頸部下の縦位施紋帶の上端に横位施紋の下端が一部認められ、横位1帶であることがわかる。器形は短く屈曲外反する口縁部形態をもち、頸部でゆるくくびれ胴部は大きくはふくらまない。推定口径18.0cm、推定現存高12.3cmを測る。

7は口縁下1cmほどを空け、横位1帶の山形紋に接して縦位帯状施紋の一部が認められる。ゆるく外反する口縁部をもち、口端上は平坦に作られ、押型紋の施紋により口端部から粘土がはみ出る。

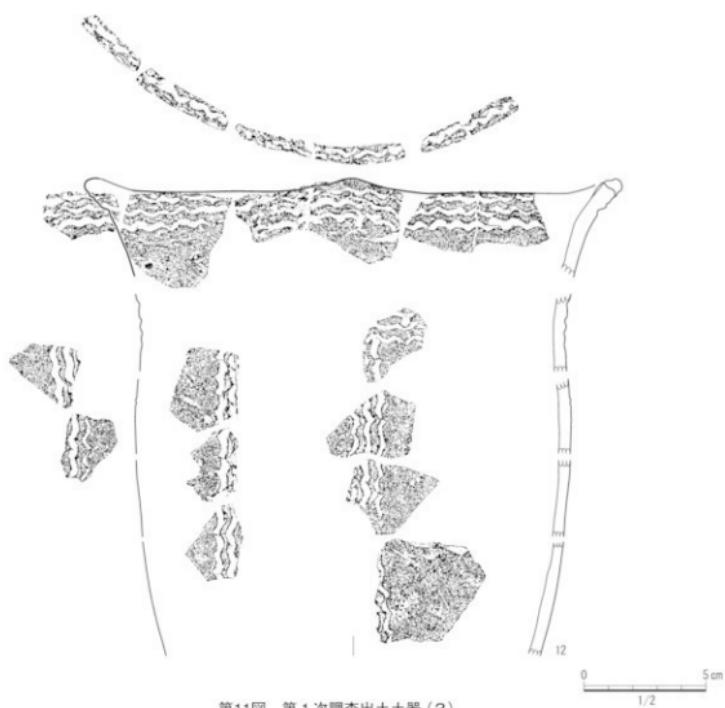
8は同一個体の口縁部が2片あり、口縁下1cmほどを空け横位施紋の山形紋が認められる。口縁部はやや肥厚外反し、口端上は平坦に作られ、口端前部が外側に小さく突出する。

9は口縁下1.2cmほどを空け、波状の山形紋が横位施紋される。口端はやや肥厚し、幅広の口端上面は平坦面を作る。口端前部はせり出すように作られる。

I型1帶 a'種



I型2帶 a種



第11図 第1次調査出土土器(2)

10は口縁下に無紋部がみられ、口縁無紋部を作るI型1帯a'種の可能性と、縦位施紋間の無紋部とみて、I型0帯a種とする両方の見方がある。どちらに属すとしても貴重な1例となる。薄手の作りであり、口縁部はゆるく外反する形態をもち、口端上面に施紋される。本破片は表面の一部が剥がれるように割れており、貼り合わせた板状粘土面と考えられる(図版22下段-10参照)。

11は直口に近い口縁部形態をもつ。表面には押型紋は認められないが、横帶施紋となるa'種あるいは口縁部から縦位施紋の0帯の可能性もある。

#### I型2帯a種(第11図12~第12図14)

口縁下と頸部に2条(2帯)の横位施紋を施すものであり、口縁裏には施紋しない。

縦帶は上位の第1種横帶から起こって、第1・第2横帶間の空間を貫くものと、下位の第2横帶から起こるものとの2者があり、本種はその後者に属す。

12は予報の第4図1にあたり、口縁直下に波状に近い山形紋が横位に施紋され、その下2.5cmほど無紋部を設け、頸部下に2帯目の横位施紋を施す。胴部縦帶の施紋は2帯目より起こり、横帶施紋が先で縦帶施紋が後となる。同一個体破片が多く摘出され、器形推定が可能となった。口縁部は強く外反し、一部に山形の小突起が作られる。頸部はゆるくくびれ、胴部は僅かにふくらむ。口端上は紋様の施紋により平坦となり、内端、外端に粘土がはみ出る部分がある。推定口径22.2cm、現存推定高18.4cm(小突起より19.0cm)を測る。本個体の裏面の一部は図版22下段-12にみると剥がれており、板状粘土の貼り合わせによって土器が成形されていたことが推定される。

13は口縁直下に横位施紋され、1.5cmの無紋部を空けて2帯の横位施紋を認める能够である。口縁部断面形は角張る形となる。

14は予報の第3図4にあたり、口縁下の横帶1条の可能性が指摘されていた。今回の整理により口縁部の同一個体破片が2点確認され、その破片を加えても第1横帶より起こる縦帶施紋がみられないことから、無紋部をもつ横帶2条と推定して本種に加えた。口縁部はゆるく大きく外反し、口端上は平坦かつ断面形は角張っている。

#### I型2帯b種(第12図15・16)

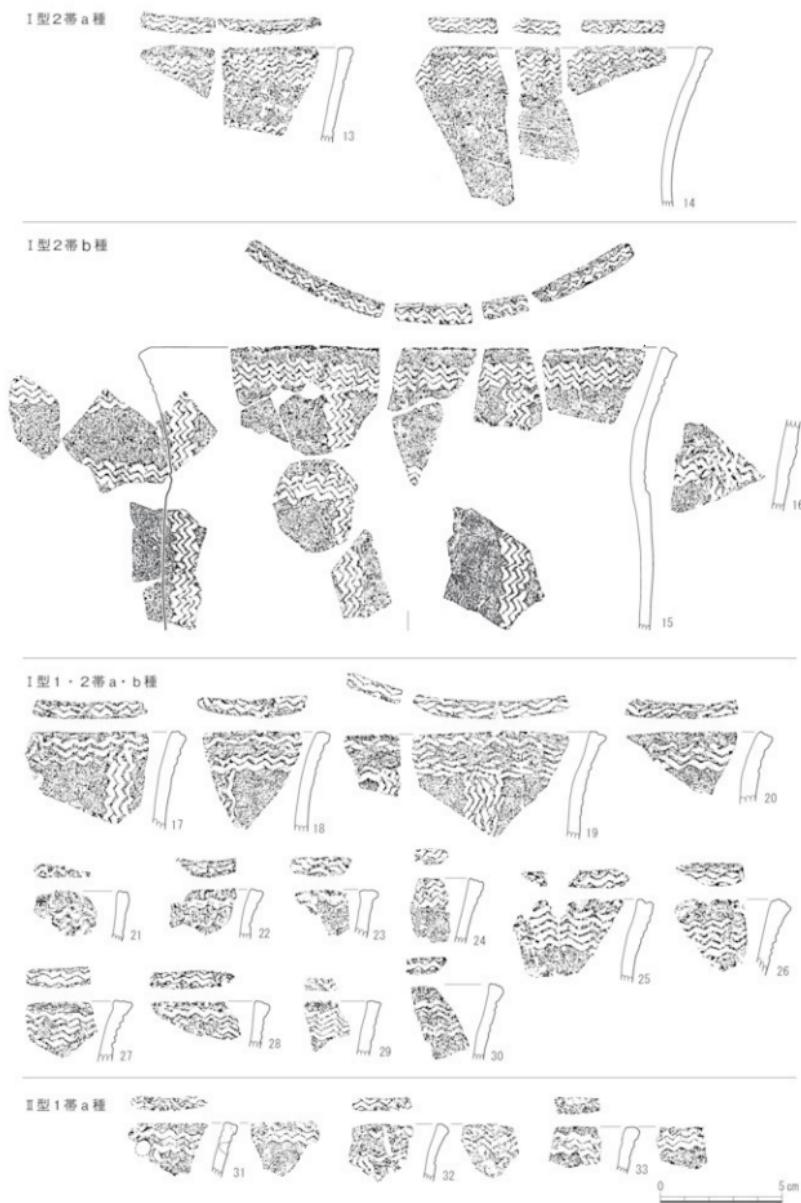
横位施紋帯を2条(2帯)施紋するもので、縦帶が上位の第1横帶から起こって、第1・第2横帶間の空間を貫くものをb種とする。15と16の2個体が確認されている。

15は予報の第4図5にあたり、同一個体破片が多く、器形が推定できることになった。大きく外反する口縁部形態をもち、口縁直下に少し無紋部を空けて1帯目の横位帯状施紋を行い、くびれ部下端に2帯目の横位帯状施紋を施す。縦帶施紋が先に行われ、横帶2条がそれを切るように重複する。口縁直下の無紋部はa'種に近いところがあり、a'+b種とも分類できる。口縁部断面形は四角形に近く、口端上面は平坦であるが口端前部に粘土がはみ出る。推定口径22.2cm、推定現存高11.6cmを測る。

16は胴部破片であるが屈曲をもたず、口縁部方向に向かって開く器形となる。第2横帶と考えられる横位施紋帯と、それを切るように縦帶が施紋されていることから、第1横帶から起こる縦帶と考えて間違いないであろう。

#### I型1・2帯a・b種(第12図17~30)

口縁裏の施紋を施さないI型の口縁部破片類であり、破片が小さいため横位施紋帯が1帯か2帯かが不明であり、また縦位施紋のみられるものは1帯目からのみのa種あるいは2帯目まで施紋がつながり直交するb種であるかは不明であり、これらの破片をまとめて報告する。



第12図 第1次調査出土土器(3)

17~19は口縁下の横位施紋とそれに接する縦位施紋のみられるものである。施紋の順序は17は縦位が後、18は横位が後、19は予報第4図8にあたり、山形紋の突起部が正しく重疊せず、部分的に1周1箇の突起になっているとされたものである。横帯と縦帯の関係で縦帯が先とされているが、縦帯は後とみることができる。この3点に加えて20は器厚、外反度、口径が近似しており、また口端上も平坦かつ口端前部が小さくせり出し、やや幅広の口端上面を作り出す。表面の施紋の後に口端部の施紋が行われたと考えられるが、本遺跡の押型紋土器は極めて共通する基準のもとに土器作りが行われていることがわかる。

20~30は縦帯の施紋は認められず、横位1帯か2帯となるかは不明である。

22は予報第4図3にあたり、山形の起伏を上下並行させず、反対の位置に置いた例とされたものであり、メガネ状の紋様を作り出す。

口縁部の断面形態は21・25・29のように角張る形と24・26~28・30のように口縁部がやや肥厚し、平坦な口端前部が小さくせり出す形の両者が認められる。

#### Ⅱ型1帯a種(第12図31~33)

Ⅱ型は口縁裏に施紋が行われるものであり、表面は口縁下に横位施紋され、それに接する縦位施紋が認められるものである。3例が確認できる。

31・32は外反する口縁部で、口縁直下に横位施紋し、それに接する縦位施紋が認められる。施紋順は2点とも横帯が先で縦帯が後に施紋される。口端上は平坦に作られ、口端前部が少しせり出す特徴は本遺跡の他例とも共通する。また31には円形の補修孔が作られる。

33も口縁下表裏に山形紋が横位施紋され、表面右端に縦位帶状施紋帯が認められる。施紋順は横位施紋が後となり、31・32とは逆である。

なおこの3例は横帯2条の縦帯と直交するb種の可能性もあるが、本遺跡のⅡ型2帯を示す他の例では第1横帯から起こる縦帯施紋はみられず、第1横帯(1帯)のみと推定した。

#### Ⅱ型2帯a種(第13図34~39)

山形押型紋が口縁裏に横位施紋され、表面は横位2帯が施紋されるものである。なお第2横帯から縦帯が確実に起こるのは「予報」でも指摘された34・36の2個体である。

34は予報第3図2にあたり、同一個体破片を多く抽出することができたものであり、残存度が約1/3個体と、破片量が最も多い個体であるが胴部下半が欠失している。大形の個体であるが器厚は4mmと薄手の作りであり、口縁部は大きく外反し、ゆるく屈曲する頸部をもち、胴部が大きくふくらむ器形となる。口端上面は平坦に作られ、断面形態は角張る形であるが、口端前部に少し突出する。器表面は良く研磨されている。山形紋は口縁下に横位施紋し(上位第1横帯)、約3cmの無紋部を空け、頸部のくびれ下に下位の第2横帯が施紋される。縦帯の施紋は第2横帯より起り、横帯の後に縦帯が2cm、4cmと不規則な間隔を空けて施紋される。

35は同一個体の口縁部破片直下に横位施紋が施されるが、それに接する縦位施紋帯はみられず、下位横帯をもつ横位2帯の施紋と推定することができる。口縁部は僅かに外反し、口端上は平坦であるがやや肥厚し、口端前部が小さく突出する。

36は予報第4図2にあたり、口縁下2帯の横位施紋がみられる。第2横帯から縦帯が起こるが、縦帯が先に施される。横帯間の無紋部は狭い。口縁部の外反度は弱く、口縁部断面形は角張るが、口端前部に少し突出する。



第13図 第1次調査出土土器(4)

37~39は横位2帯の施紋が認められるが、いずれも第1横帯からの縦帶はみられず、34・36と同様に第2横帯から縦帶が起るものと考えられる。

37は予報第4図7にあたり、表面に横位2帯の施紋がみられるが、第2横帯の施紋が左から右へゆるく傾斜している。山形紋は高さの低い波状に近いものである。口縁部の外反度は強く、頸部のくびれが明瞭である。口端上の施紋により口端前部、後部に粘土のはみ出しがみられ、口端前部は少し突出する。破片左端に未穿孔の円形補修孔1個が認められる。

38はゆるく僅かに外反する口縁部形態をもち、頸部の屈曲はほとんどない。39と同様に山形紋のジグザグ状が強い。

39は表面の磨耗が激しいが、横位2帯施紋が確認され、山形紋はジグザグ状が強い。大きく外反する口縁部形態をもち、頸部の屈曲は弱い。

#### II型1・2帯a・b種(第14図40~50)

口縁部表裏両面に横位施紋が施されるものでありII型に属す。表面は横位1帯か2帯かは不明であるが、40はこの範囲で縦帶が認められず2帯の可能性が強い。なお48は裏面のみ、49・50は表面のみ残存し裏面は不明である。縦位施紋の有無は40を除いていずれも小破片のため不明である。

口縁部形態はいずれも外反口縁となり、41・43・45は口端前面は突出する特徴をもち、特に45はひさし状のせり出しが顕著である。

47は小さなゆるい山形の口縁突起部である。表面の横位山形紋は水平に施紋しているために、突起部分に無紋部を生じるが、裏面は突起部分に沿って施紋されていることが印象的である。

48~50は同一個体ではないがいずれも表裏面が剥離するよう割れており、板状の粘土を貼り合わせるように器壁を作ったものとみられる(図版23上段2片参照)。この特徴は胴部破片でも比較的多く認めることができ、一方輪積み等の接合痕は明瞭には確認されないこととあいまって、板状粘土の貼り合わせによる土器製作が推定されるのである(図版22下段・図版23上段参考例)。

#### I・II型2帯a・b種(第14図51~56)

横位施紋の認められる破片類であり、第1横帯か第2横帯か厳密には確定できないが、胴部破片とみられる51~53は第2横帯の可能性がある。54は上端部が肥厚することから口縁下の第1横帯の可能性がある。55・56は少し屈曲することから口縁下あるいは頸部下両方の可能性がある。

なおこれらのいずれも裏面の施紋はみられない。

#### 山形紋胴下部~底部破片類(第14図57~第16図135)

57~123は胴部から胴下部の破片類であり、山形紋が縦位帯状施紋されている。なお拓本をとるにあたって、原体長、刻み条数、直径=回転長のいずれかが判定できる破片を選択した。数値等は土器観察表に示している(第3表-2・3)。また原体に関するまとめは第5章の考察で述べたい。

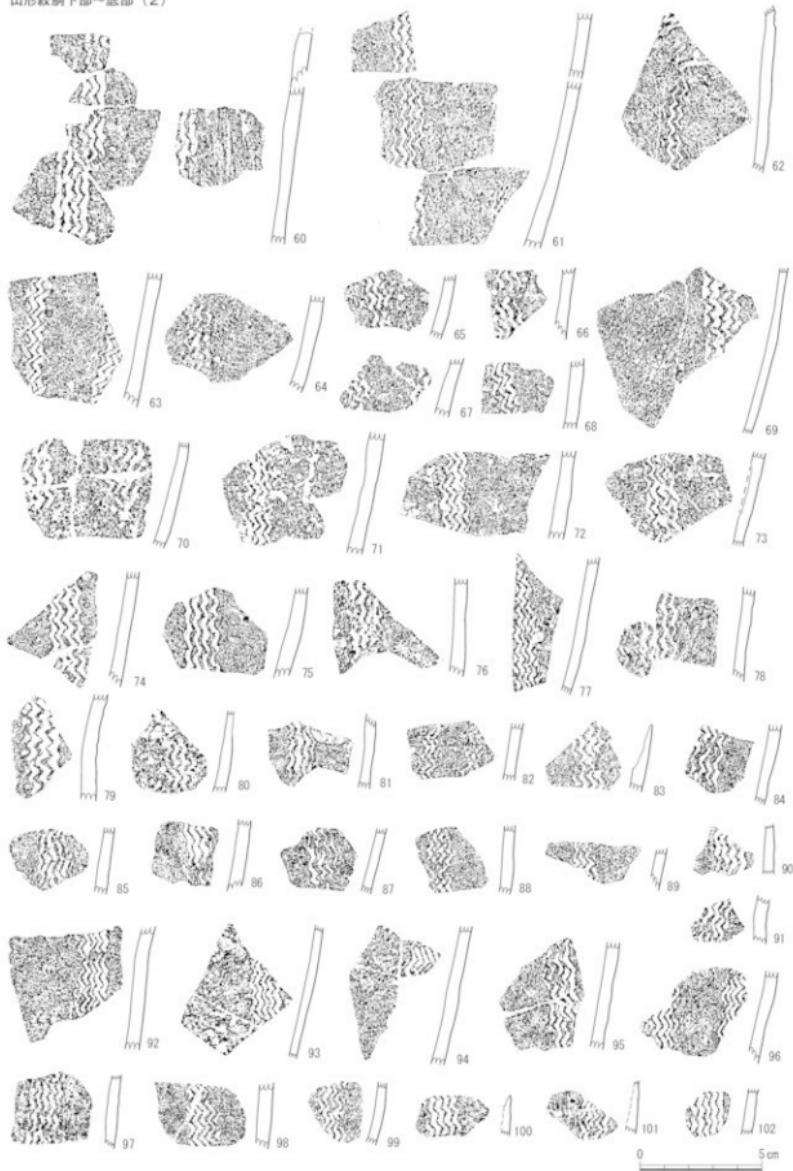
57は大きくふくらむ胴部器形をもち、推定最大胴径は約20cmを測る。縦帶の間隔は3.5cmと4.5cmの比較的広い空白部をもつ部分があり一定しない。

58はゆるい波状の山形紋が施紋され、「予報」で触れられている1周に1箇の突起(山形)を刻んだものの可能性がある。縦帶間の無紋部の間隔は左から3cm以上、2cm、3.5cmとなる。なお61にみる無紋部の間隔は4.5cm以上を測る。

71・73の個体裏面は薄い板状に剥落している箇所を認めることができ、板状粘土による成形の痕跡とみられる(図版22下段-71・73)。



## 山形紋洞下部～底部（2）



第15図 第1次調査出土土器（6）

0 1/2 5 cm

59~123は土器観察表を参照されたい。

124~131は底部付近の破片であり、132~135は尖底部の破片である。130~132は底部先端近くまで山形紋が施紋される。このうち131・132は予報第4図18・19にあたる。底部の器形は124~129・131にみるようにやや鋭角な尖底となるものが多いが、130・132は角度が大きい。器厚は底部付近でも4~5mmを測り薄手である。底部先端は少し突き出すように小さな乳頭状を呈する。

#### 格子目押型紋（B群）土器（第17図1~4、図版19）

##### B I型1帯a種（第17図1）

1はゆるく外反する口縁部で、口縁直下に斜格子目紋が横位に施紋され、裏面には施紋されない。口端上は平坦に作られ同一原体による施紋が行われる。口端前部は小さく突出する。予報第4図10にあたり、格子は細かく4条おきに同一のものが現れるとされ、また原体両端のV字状切り込みは山形紋のそれを踏襲するものと指摘されている。なお「予報」ではこの土器の縦帶の部分破片があるとされるが、今回の整理では確認することができなかった。

また本資料に施紋される格子目紋は第2次調査2号住居址内出土の第20図2の口端上面に施紋されている格子目紋と同一原体の可能性があり、異個体間の同一原体例として注目される。

##### B II型1帯a種（第17図2）

2はゆるく外反する口縁部で、口縁直下および裏面に斜格子目紋が横位に施紋され、表面の横帯に接する縦帯施紋の一部が認められる。口縁部は丸頭状に近いが、格子目紋が施紋される。予報第4図9にあたり、縦帯が先で横帯が後に施紋され、格子の条は1条おきとされる。

##### 格子目紋胴部破片（第17図3・4）

拓本で示した3・4の他に格子目紋の可能性がある1片が認められる。

3は胴下部の破片であり、2と同一個体の可能性がある。

4は薄手の作りであり、1・2とは別個体と考えられる。

#### 結節回転紋（C群）土器（第17図5~15、図版19）

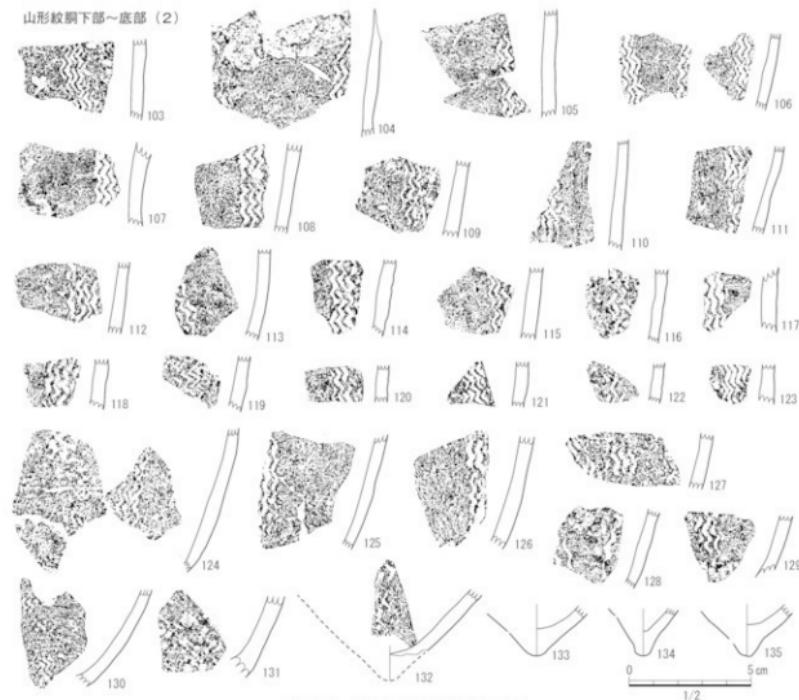
結節回転紋土器は「予報」でも指摘されているように、縄自体の結節とみられるものと、単軸絡条体第3類とみられるものの2種がある。「予報」では6個体を数えており、今回の整理では拓本で示した11片（8あるいは9個体）が選別されるが、そのうち2片については今後の検討をする。なお拓本に図示しえなかつた9片の胴部小破片がある。

結節回転紋は帯状に施紋され、口端上の施紋も含めて押型紋のそれと全く等しいことが指摘されている。さらに口縁裏に施紋する（II型）破片が第2次調査において出土している（第21図28）。なお「予報」では口縁部破片が3片あるとされ、拓本で示した5~7と考えられる。

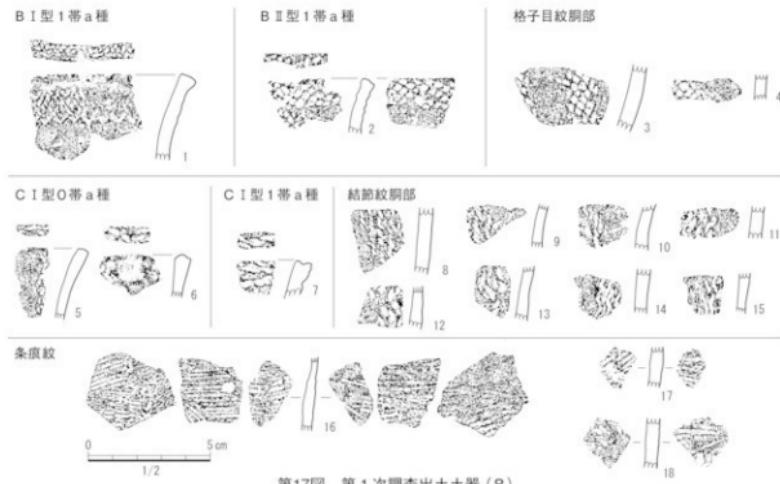
##### C I型0帯a種（第17図5・6）

5は予報第4図11にあたり、ゆるく外反する口縁部破片である。口縁部から縦方向の結節回転紋が帯状施紋される。細い一段Rの縄による結節部の一部が認められる。

6は口端上に結節回転紋が施紋され表面は一部剥落しているが器面に紋様は認められないことから、0帯a種あるいは1帯a種と考えられる。なお表面の剥離痕は板状粘土の剥離痕跡が観察される。



第16図 第1次調査出土土器 (7)



第17図 第1次調査出土土器 (8)

**C I型 1 帯a種 (第17図7)**

7は口縁下に結節回転紋が横位に施される。口端上は平坦に作られ、口端前部が僅かに突出する。原体はやや太い1段しが認められる。予報第4図12にあたり、同一個体の胴部として示されたのが11の胴部破片であるが、器厚の差があり別個体の可能性が高い。

**結節紋胴部破片 (第17図8~15)**

結節回転紋と考えられる縄紋の施紋される破片は8~15の拓本で示した8片(5あるいは6個体)と圧痕が不鮮明のため図示しえなかつた9片の破片(太い縄8片、細い縄1片)がある。

8は予報第4図13にあたり、単軸縦条(体)第III(3)類とされた胴部破片であり、直線的な1段Rの縄が4条認められ、結節を伴う縦条体回転紋の可能性が高い。

9は口縁部に近い外反部分の破片とみられ、細い1段Rの縄が縱位に3条ほど認められるが曲線的(おそらくZ字状)で縄自体の結節部とみられる。

10は口縁下のくびれ部破片とみられ、結節した1段の縄の束の端部の可能性がある。

11は1段Lの縄が数条認められS字状の結節とみられる。

12・13は同一個体破片と考えられ、やや太い1段Lの縄数条が縱位Z字状に施されており、1段数条の束を結節した回転施紋とみられる。

14・15は細いS字状の連続紋が縱位に施紋されており、粗く擦り合わせた植物繊維状の原体を回転施紋したと推定されるものであり、同一個体の可能性もある。

**条痕紋土器 (第17図16~18、図版19)**

櫛状施紋具による条痕が内外面に施される土器であり3個体分ある。

16は器内面の一部が削られるようにくびれる胴部破片である。器厚は上端で2mm、下端は3~4mmと極めて薄い作りである。3片は同一個体と考えられさらにもう1片ある。内外面に細く密な櫛状施紋具による条痕紋が、外面は斜方向と横向方に、内面は横向方に施紋される。胎土には黒鉛を含有し、色調は薄い銀鼠色を呈する。主体を占める押型紋土器の胎土と同一であり、同時期の組成と考えられるものである。

17は表裏に条痕紋を施す小破片であり、器厚は5mm、胎土に黒鉛を少量含む。

18は表面は無紋であり、裏面に横位のやや太い条痕紋が施される。器厚は6mm、色調は茶褐色を呈し、黒鉛は含まれない。

**無紋土器 (第18図1~26、図版20)**

無紋土器は「予報」において押型紋土器の約1/3を占めるとされ、口縁部個体数の比較では押型紋58個体に対して無紋土器21個体と報告された。今回の報告では第1次調査分の拓本に用いることのできた(微小破片を除いた)口縁部破片を基準としてみた場合、押型紋51点、無紋土器14点となり、押型紋の約1/3の量と捉えることが追認できた。

無紋土器の器形、器厚、胎土、色調ともに本遺跡の押型紋土器と差異はなく、黒鉛の混入も認められるが、銀鼠色の色調をもつ口縁部破片はみられない。表面は平滑に調整される。押型紋を施紋しない無紋地のままの土器ともいえ、口端上面に施紋が認められないことが無紋土器分類上の大きな特徴となる。

無紋土器は口縁部の形態において大きく2つに分けることができる。1～8は口縁部がやや強く外反し、口端上は平坦に作られるが、口端前部に僅かに突出する形態となる。この口縁部形態は押型紋を施紋する土器にも認められる特徴であり、両者の同一性を示すものといえる。

1はやや強く外反する口縁部破片であるが、薄手の作りである。破片から推定された口径は22.1cmを測り、押型紋土器の大形のものと類似する大きさとなる。

8は器厚が3mmと薄手で、口径から見て小形土器に属するものであるが、外反器形と口端部の形態は1～7と共通する。なお口縁部の一部に頂部がゆるい山形を呈する小突起が作られる。波状口縁ではなく、突起といえるものである。「予報」では山形の口縁部が3例あるとされ、そのうちの1例となる。また第2次調査においても口縁部に小突起をもつ新例が追加された(第22図7)。

9～14は前者と比べて口縁部の外反度がやや弱く、口端前部の小突出はみられない。口縁部断面形は丸頭あるいは角張る形となるが、9・10・13は口端上が平坦に作出されており前者とも共通する点である。

15～22は無紋土器の胴部破片と考えられるものであり、幅4cm以上の無紋部をもつ15～17・19～21は無紋土器とするが、18・22は帯状施紋帶間の無紋部も考慮しなければならない。このように無紋土器と押型紋無紋部との分別は小破片においては行うことができなかつた。

21は表裏面に、17は裏面に指頭による凹凸痕が認められ、土器製作上の手法が考えられる。

26は口縁下から胴下部の大形破片であり、現存高9.5cm、推定胴径10.2cm、器厚4mmを測り、このサイズから全体を推定すると、口径11cm前後、器高は13cm前後の小形深鉢となる。

#### ミニチュア土器(第18図27)

手づくね状の無紋ミニチュア土器である。推定高4cm前後の小さな土器であるが口縁下はくびれて外反する形態をもち、胴部は丸く屈曲しておそらく丸底と考えられる底部に向かう。押型紋土器の器形をミニチュア化した観がある。口縁下にヘラ状の調整痕が認められる。色調は褐色を呈し、胎土には白色の粒子が含まれ黒鉛は含まない。口径6.5cm、胴径6.3cm、現存高3.3cm、器厚5mmを測る。

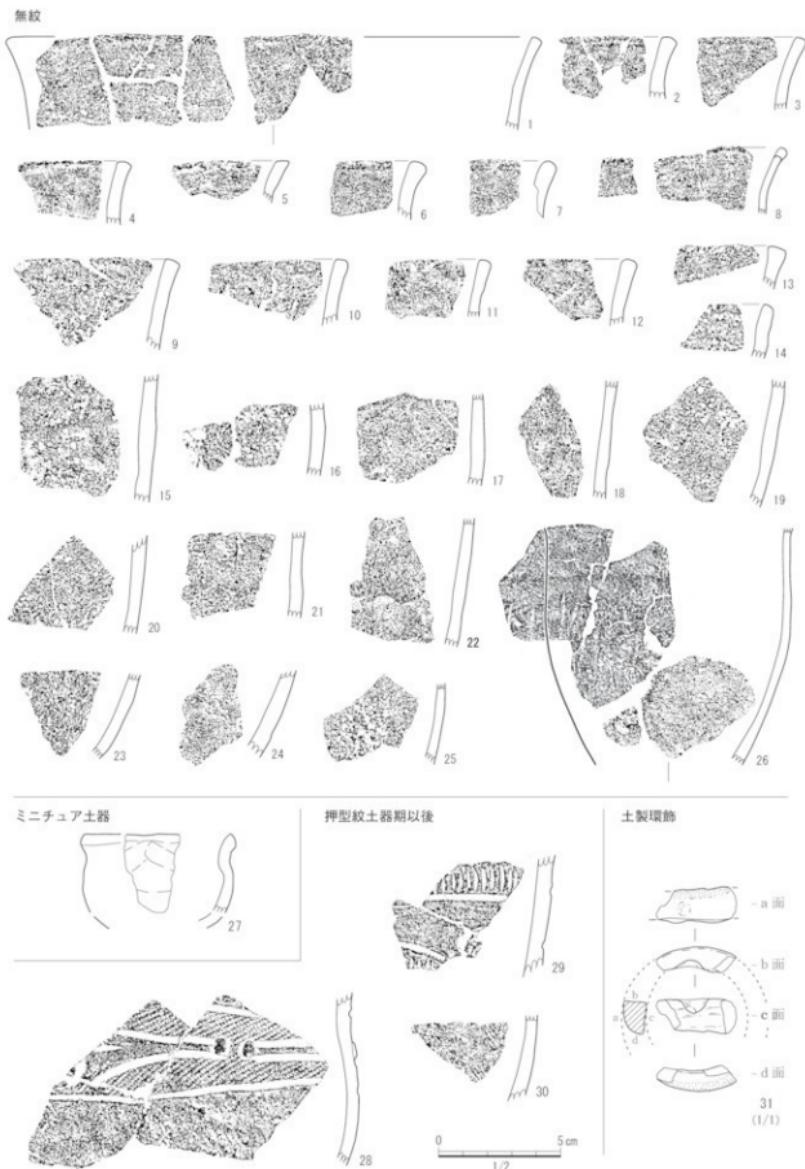
#### 土製環飾(第18図31、図版20)

「予報」において「中国新石器時代の環飾に類似するものがある」と報告された特殊な土製品である。外径3cm、内径2cm前後を測る環(?)状に近い小さな破片であり、なめらかな外面(a面)と線状痕のみられる内面をもち、正面とみれる環体的一面(b面)は幅4cmほどの平坦な面として作られている。その平坦面には小さな押圧痕が残されている。厚さ(高さ?)は6mmを測る。胎土には多量の黒鉛を含み、押型紋土器と同時期のものであることは確かである。なお本資料については第5章の考察において改めて取りあげたい。

#### 押型紋土器期以後の土器(第18図28～30、図版20)

繩紋後期に属すと考えられる破片が6個体(13片)認められる。拓本で示した有文土器2片と細い繩紋の施される破片(拓本30と同一個体破片5片)以外に、沈線文が僅かにみられる破片2片、R.Lの繩紋が施される破片3片(同一個体2片)がある。

28は東北日本の縫付土器の系統に属するものであり、磨消繩文と2ヶ所の小さな瘤が貼付される。次の29とともに後期末葉に属す。



第18図 第1次調査出土土器(9)・土製品

29は沈線文と沈線間の縦のキザミ紋様が施される東日本系後期末葉の土器である。28と同時期同系統のものであり、北陸方面あるいは信州方面との関連が考えられる。

30は細いLRの縄文が施される鉢形土器の胴部破片である。器厚は5mmと薄手の作りであり、胎土はきめ細かく、色調は表面は茶褐色、裏面は炭化物が付着し黒色を呈する。同一個体の破片が5点認められる。後期中～後葉に属すと考えられる。

### 他時期の土器(第19図1・2)

沢遺跡の調査では、表土層および表採資料として平安時代の須恵器長頸瓶および灰釉陶器塊の底部資料が出土している。なお、調査地内からは、これらに関連する遺構は確認されていないが、本地点の下段、吉城高校の建設地において古代の遺物が出土したことが伝えられており、本遺物はそれらとの関連があるものと考えられる。

1の須恵器長頸瓶は、G区表土層出土の資料で、高台部が約半分ほど残存する。高台外面は回転系切りののち、外周部を回転削りしてから高台を添付したもので、高台の周縁にはナデが加えられている。高台部外面の調整から判断すると9世紀後半から10世紀前半ごろの時期と推定される。

2の灰釉陶器塊は、調査区内で採集された資料で、高台部が1/5ほど残存する小破片である。高台外面の現存部は回転削りののち、やや厚みのある高台を添付したもので、高台の周縁にはナデが加えられている。内面の現存部は研磨され重ね焼き痕が認められる。また、現存部は無釉である。時期の詳細は不明であるが、高台部の特徴から判断すると9世紀後半から10世紀前半ごろの時期と推定される。



第19図 第1次調査他時期の出土土器(古代)

### (3) 第2次調査の出土土器

#### 2号住居址出土土器(第20図1～4、図版21)

1は山形押型紋(A群)I型1帯a種に分類される口縁部破片である。口縁部はゆるく外反する。口縁直下に山形紋が横位に施紋され、それに接して縦位の山形紋が帶状施紋される。施紋は横帯が先行し、縦帯が後である。口端部上面は平坦で、山形紋が施紋される。口縁部断面形は角張り、口端前面が小さくせり出している。なお本例は横帯2条の縦帯と直交するb種の可能性もあるが、本遺跡のII型2帯を示す他の例では第1横帯から起くる縦帯施紋はみられず、第1横帯(1帯)のみと推定した。

2は同じくA群のII型2帯a種の可能性の高い口縁部破片である。口縁部はゆるく外反する。口縁直下の内外面に山形紋が横位に施紋される。以下は無紋部となり、表面の無紋部は22cmあり、以下に横位2帯目が施紋された可能性がある。口端部上面は平坦で、注目すべき異種原体となるやや横長の格子目紋が施紋される(図版23-2)。第1次・第2次調査を含め、異種原体により施紋された珍しい例となる。なお口端上面に施紋される格子目紋は、第1次調査出土の第17図1の格子目紋原体と同一の可能性があり、別個体の同一原体施紋例としても注意される。口縁部断面形は角張り、口端前面が小さくせり出している。

3は格子目紋（B群）の胴部破片で、同一個体破片が4点ある。横長の格子目紋が縦位に帯状施紋される。原体長は14cm、遺存部分での無紋部の最大幅は1.3cmである。原体端部はV字状に加工されており、山形紋にみられる端部加工と同様の特徴をもつ。

4は無紋の胴部下半の破片である。大きく湾曲していることから底部に近い部分と考えられる。



第20図 第2次調査2号住居址出土土器

#### 山形押型紋（A群）土器（第21図1～26、図版21）

##### I型〇帯a種（第21図1）

明確な本種の破片は、第1次・第2次調査で各口縁部1点ずつである。

1は口縁直下から山形紋が縦位に帯状施紋されるもので、横帯の施紋はみられない。縦帶間の無紋部は2.3cm以上空く。器形は大きく外反するものと考えられる。口端上面は平坦に作られ、断面形は角張っている。口端部には山形紋が施紋され、端部前面は小さくせり出している。

##### I型1・2帯a・b種（第21図2）

2は口縁部直下に山形紋が横位施紋される。小破片であるため横帯施紋が1帯か2帯かは不明であり、縦位施紋は確認できない。器形はゆるく外反するものと考えられる。口端上面は平坦に作られ、断面形は角張っている。口端部には山形紋が強く施紋され、口端前部が小さくせり出している。

##### II型1帯a種（第21図3）

明確な本種の破片は第1次調査で3点（第12図31～33）、第2次調査ではこの1点である。

3は外反する口縁部形態をもち、口縁直下の内外面に山形紋が施紋され、それに接して山形紋が縦位施紋される。施紋の順序は横帯が先行し、縦帯が後に施紋される。口端上面は平坦で、山形紋が施紋される。口縁部断面形は角張り、口端前部がせり出している。

##### II型1・2帯a・b種（第21図4～8）

4～8は口縁部直下の表裏面に山形紋が横位に帯状施紋されるが、4や8の外面は施紋部分が屈曲部にあたることから原体が当たっていない部分が認められる。6の表面は口縁下に僅かな無紋部が認められる。いずれも小破片のため縦位施紋部は確認されない。口端上面は平坦で、断面形は角張った形状を呈するが、4や6は口端前部が小さくせり出している。

##### I・II型1・2帯a種（第21図9・10）

横位施紋の認められる破片で、第1横帯か第2横帯かの判断は難しい。9は横帯に接する縦位の帯状施紋が施される。施紋順序は縦帯が先行し、横帯が後に施紋される。頸部に近い破片とみられることがから、第2横帯の可能性が考えられ、I・II型かは不明であるが2帯a種の可能性が高い。10は外反部とみされることから、口縁部直下の破片の可能性がある。横位に螺旋状山形紋が施紋され、以下は無紋部となり、無紋部の幅は2cmを超える。



第21図 第2次調査出土土器 (1)

### 山形紋胴下部～底部破片類（第21図11～26）

11～26は縦位に帯状施紋された山形紋の胴部破片である。13は右巻きの螺旋状山形紋、17は左巻きの螺旋状山形紋、18は波状を呈する。21は大振りの山形紋で、一周1単位の可能性がある。23は第1次調査出土の第17図114とは別個体であるが、同一原体を用いて施紋されている可能性がある。19は紋様が途切れる部分が確認される。24には斜め方向の2条の並行する細い沈線が認められる（図版23～24）。押型紋に沈線が併用される例としては第1次・第2次調査を含め本破片のみである。

胴部破片にみる縦帶無紋部の幅は、16が2.2cm、21が2.8cmと空間が空くものが多い。26は紋様が重複していることから底部付近の破片と考えられる。

### 結節回転紋（C群）土器（第21図27～32、図版21）

#### C I型○帶a種（第21図27）

27は結節回転紋の口縁部から胴部にかけての破片10点をもとに復元した。口縁部の器形はゆるく外反し、頸部は僅かにくびれる。口縁部から縦位に結節回転紋が帯状施紋される。口端上面は平坦で、同一原体による施紋がなされる。口縁部断面形は角張った形態をもつ。原体は1段Lの繩3本をゆるく結節した回転施紋で、Z字状の圧痕が認められる。原体長を示す縦帶の幅は8mm、無紋部の幅は3.5～5cmとばらつきがある。復元口径は16.1cm、残存高は7.6cmを測る。

#### C II型○帶a種（第21図28）

28は結節回転紋の口縁部破片で、大きく外反する。表面は横帯施紋は行わず、口縁部から縦位に結節回転紋が帯状施紋される。口縁裏には横位に施紋されるが、口縁部から5mmほど間隔を空けて帯状施紋されている。口端上面は平坦で、結節回転紋が施紋される。口縁部断面形は角張っているが、口端前部は小さくせり出している。原体は1段Rの繩3～4本を結節した回転施紋で、Z字状の圧痕が認められる。原体長は13mm、無紋部の遺存幅は32mmを測る。

#### 結節紋胴部破片類（第21図29～32）

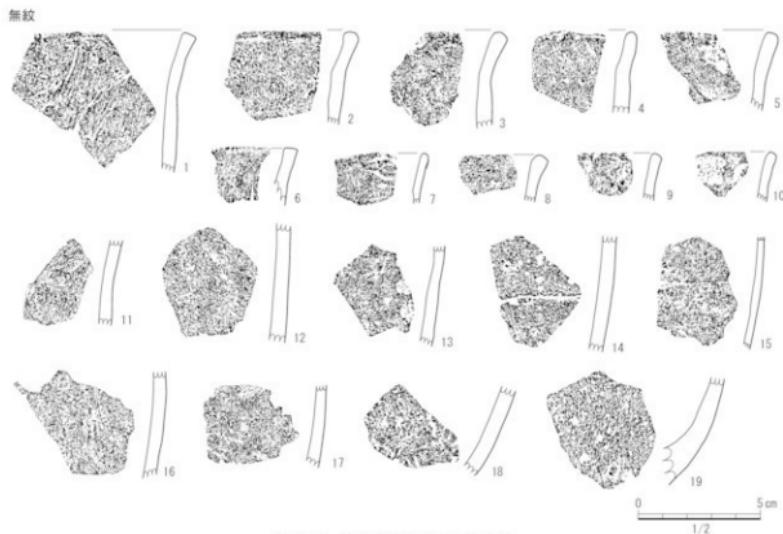
29～32は結節回転紋の胴部破片である。29は太目の繩1段R3条が横位に施紋されており、C I・II型1・2帶となるものであり、a種とみられるが縦位の施紋は破片の範囲では認められない。なお結節部がゆるいか、ほぐれないとみられる。30～32は縦位施紋されており、30では1段R数条がZ字状の圧痕として認められる。

### 無紋土器（第22図1～19、図版22）

1～10は無紋土器の口縁部破片である。いずれも口縁部形態は外反し、1～5はやや強い外反、6～10は弱い外反となる。口端部は1・6のように平坦に作出されるものと2～5・7～10のように丸味を帯びるものがある。第1次調査出土の無紋土器の説明において述べたように、押型紋を施紋する直前の無紋地土器ともいえるものであり、口端上面が丸味を帯びた類も山形紋を強く施紋することにより平坦かつ口端に粘土がはみ出る結果となるものと考えられる。

7の口縁部は山形の小突起状となり、図版23～7にみるように薄い粘土塊を貼付して小突起を作り出している。山形紋施紋のA群土器と共通する特徴といえる。2・4・7の内面には指頭による調整痕が観察できる。

11～18は無紋範囲からみて無紋土器の胴部破片と考えたものである。19は底部破片である。無紋土

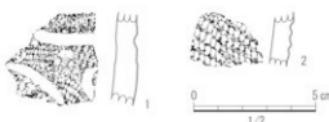


第22図 第2次調査出土土器(2)

器は内外面ともに擦痕が観察され、16の器面には顕著に認められる。

#### 押型紋土器期以後の土器 (第23図1・2、図版22)

1・2は繩紋後期前葉に属す破片で、いずれも胴部破片である。1は繩紋と太い沈線により磨消繩紋が描かれる。2はR Lの繩紋が施されるが、おそらく同時期に属す破片と考えられる。



第23図 第2次調査出土土器(3)

#### (4) 第1次・第2次調査出土土器観察表

第3表-1 第1次調查出主器皿表

第3表-2 第1次調査出土土器観察表

測定番号	出土位置・層位	手標	根幅	部位	色調	基盤	周体部(原体部)	周体部(原体部)	鏡片	口縁部	鏡頭	備考	
												(mm)	(mm)
B11036 A-1[5.3]				山形部	灰褐色	6	5	11	-	-	-		
B110317 E-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	3	12	-	-	-		
B110348 A-7[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110319 不明				山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110350 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110351 B-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110352 B-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110353 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110354 A-1[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110355 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110356 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	3	13	2	-	-		
B110357 K-1[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110358 K-2[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110359 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110360 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110361 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110362 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110363 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110364 E-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110365 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110366 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110367 E-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110368 A-1[5.3]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110369 E-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110370 A-1[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110371 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110372 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110373 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110374 E-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110375 E-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110376 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	5.5	13	2	-	-		
B110377 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110378 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110379 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110380 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110381 B-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110382 B-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110383 E-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110384 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110385 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110386 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110387 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110388 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110389 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110390 E-1[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110391 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110392 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110393 C-1[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110394 C-1[5.1]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		
B110395 D-1[5.2]	層			山形部	灰褐色	6	4.5	13	2	-	-		

第3表-3 第1次調查出土土器觀察表

第3表-4 第1次調査出土土器観察表

測定番号	出土位置・部位	手觸		部位	色調	器形 (mm)	測定長 (mm)	測定幅 (mm)	測定高 (mm)	点数	備考
		横径	縦径								
第17回3 D-2(5.1)~2号				脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—
B17814 D-1(5.1)~2号				脚部	灰褐色	6	3.5	—	—	—	—
B17816 D-1(5.2)~2号				脚部	灰褐色	6	4	—	—	—	—
B17817 B-II-3号				脚部	灰褐色	6	5	—	—	3	—
B18811 D-0(1.2)号	D-1底面2層	4回14	素盞	脚部	灰褐色	6	4	—	—	—	—
B18812 D-0(1.2)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5.5	—	—	—	—	—
B18813 D-1(5.2)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B18814 D-1(5.2)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B18815 D-0(1.2)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B18816 A-1(5.1)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B18817 A-1(5.3)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B18818 D-0(1.1)号		素盞	脚部	灰褐色	6	4	—	—	—	—	—
B18819 D-1(5.1)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5.5	—	—	—	—	—
B18820 D-0(5.2)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5.5	—	—	—	—	—
B18821 D-1(5.1)号		素盞	脚部	灰褐色	6	4.5	—	—	—	—	—
B18822 D-1(5.2)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B18823 D-0(5.1)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5.5	—	—	—	—	—
B18824 D-5(1.1)号		素盞	脚部	灰褐色	6	6	—	—	—	—	—
B18825 D-1(5.2)号		素盞	脚部	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B18826 D-0(1.2)号		素盞	脚部下平	褐色	—	4	—	—	—	2	復元調査馬人頭0.2m、外縁陶管
B18827 D-1(5.2)号		素盞	脚部下平	褐色	—	5	—	—	—	9	二二ナード、復元調査馬人頭0.2m、外縁陶管
B18828 D-1(5.3)号		素盞	脚部側面	褐色	—	6	—	—	—	2	調査馬人頭
B18829 D-2(3.3)号		素盞	脚部側面	褐色	—	7	—	—	—	3	調査馬人頭
B18830 A-0(5.1)号		素盞	脚部側面	褐色	—	5	—	—	—	2	調査馬人頭
		素盞	脚部側面	褐色	—	5	—	—	—	1	馬人頭

第4表-1 第2次調査出土土器観察表

測定番号	出土位置・部位	手觸		部位	色調	器形 (mm)	測定長 (mm)	測定幅 (mm)	測定高 (mm)	点数	備考
		横径	縦径								
第21回1 2(4.5)号				山形紋	灰褐色	6	4.5	5	2	135	—
B2042 D-2(4.5)号				山形紋	灰褐色	6	5	4	2	135	—
B2043 D-2(4.5)号	F-4(5.1)号, F-5(5.2)号, G-1(5.1)号	4回14	素盞	山形紋	灰褐色	6	4.5	4	14	3.5	11
B2044 D-2(4.5)号		素盞	山形紋	灰褐色	6	5	—	—	—	—	—
B2045 D-2(4.5)号		素盞	山形紋	灰褐色	6	5	—	—	—	1	—
B21回1 F-9(4.5)号		素盞	山形紋	灰褐色	6	5	—	—	—	1	—
B21回2 F-6(5.1)号		素盞	山形紋	灰褐色	6	5	—	—	—	1	—
B21回3 G-1(5.2)号		素盞	山形紋	灰褐色	6	4.5	3	2	13	4.8	15
B21回4 G-2(5.2)号		素盞	山形紋	灰褐色	6	5	2	2	11	4.3	135
B21回5 F-6(5.1)号		素盞	山形紋	灰褐色	6	5	2	2	11	4.3	135

※条数の( )は複数でさる数。

第1節 第2次調査出土土器観察表

第4表-2 第2次調查出土土器觀察表

## 第2節 石 器

### (1) 第1次調査の出土石器

#### 1号住居址出土石器 (第24図1~10、図版24)

1号住居址に属する石器は、覆土内より44点の出土が認められた。器種別の内訳は、クサビ形石器4点、削器1点、磨石2点、凹石2点、砥石1点、剥片類33点、石核1点である。

#### クサビ形石器 (1~4)

本石器は、從来から曾根型石核、ピエス・エスキュー、裁断面ある石器等と呼ばれている石器である。本住居址からは図示した4点が出土した。

1・2は所謂石核状の厚手の素材に両極打法による上下方向からの二次加工が施されたものである。特に1は上下からの二次加工とともに器体の右側縁には裏面からの連続する二次加工が観察される事から、削器の機能も合わせもつ石器の可能性もある。石材はいずれも下呂石である。

3・4はいずれも剥片を素材としたものと考えられ、3の平面形は小形の寸づまりを呈し、4は縱長の形状をもつものである。石材はいずれもチャートである。

#### 削 器 (5)

本石器は、剥片を素材としてその縁辺部に二次加工を施して刃部を作出したものであり、図示した1点が出土した。5は下呂石の小形剥片を素材とし、刃こぼれ状の小剥離痕が観察されるもので、「予報」では剥片の縁に小さいノッチをもつ小形石器とされている。

#### 磨 石 (6・7)

本石器は、「予報」では凹みを合わせもつものも含めて磨石として報告している。報告による石器の特徴から6・8・9の3点が住居址の床面から出土した石器と考えられる。

磨石としては図示した2点が出土した。7は欠損品であるが、いずれも器体の一側縁あるいは両側縁に研磨による顯著な磨面が観察される所謂「特殊磨石」と呼ばれる磨石である。これらの特殊磨石には、器体の側縁のみに研磨面が観察される7と器体の平坦面にも研磨は観察される6があり、さらにこのタイプには端部に敲打痕も合わせもつ。石材は6は石英斑岩、7は砂岩である。

#### 凹 石 (8・9)

本石器は、扁平蹠を素材としてその平坦面に敲打による顯著な凹みをもつものを一括したが、「予報」ではこの凹みは磨石としての使用時の指かけとされている。

本住居址からは図示した2点が出土した。いずれも扁平蹠を素材としたものであり、器体表裏の平坦面に1ヶ所ずつの凹みが観察されるものである。また、2点とも平坦面には研磨痕、右側縁には粗い研磨による面取りが施され、器体の端部には敲打痕も観察されるものであり、磨石と敲石の機能も合わせもつ石器である。石材は8が石英斑岩、9は安山岩である。

#### 砥 石 (10)

本住居址からは図示した1点が出土した。10は部分破片であるが、砂岩の扁平蹠を素材としたものであり、器体の平坦面に研磨痕が観察されるものである。



第24図 第1次調査1号住居址出土石器

### 包含層出土石器（第25図1～第28図72、図版24～26）

第1次調査では、包含層から計387点の石器が出土した。器種別の内訳は、石槍1点、石鎌4点、クサビ形石器42点、石錐2点、削器21点、磨製石斧3点、打製石斧1点、磨石8点、四石2点、敲石2点、礫器3点、砥石15点、剥片類277点、黒曜石剥片3点、石核2点、チャート原石1点である。

#### 石 槍（1）

D-1区2層上部から出土した。胴部から先端部を欠損するものであり、平面の形状は左側縁に明瞭な角をもち、右側縁の下部にも緩い角が認められ、残存部の形状は非対称形を呈する。器厚はやや厚めであるが、調整加工は表裏両面に丁寧な加工が施される。欠損面は右側縁からの裁断状の剥離痕が観察され、製作途中での欠損の可能性も考えられる。石材は下呂石である。

#### 石 鎌（2～5）

図示した4点が出土した。層位的に押型紋土器に伴うものは2であり、3・4は表面採集と表土層、5はA-Ⅲ区の表土層からの出土である。2～4は4が大きく欠損するが、いずれも下呂石の剥片を素材とし、調整加工は器体の縁辺部を中心に行われるものであり、裏面には大きく素材面を残すという共通した技術的特徴をもつ。平面の形状も3点とも三角形凹基無茎鎌であり、4は基部の抉りが浅いものである。

5は平面の形状が長三角形凹基無茎鎌であり、調整加工も器体の表裏全面に丁寧に施される。側縁に鋸歯状の小突起を有することから、2～4とは異なる形状を呈する。5の石材も下呂石である。

#### 石 锥（6・7）

図示した2点が出土した。いずれも下呂石の剥片を素材としたものであるが、つまみ部を欠損する。調整加工は素材の端部を中心に施されるが、6では左側縁に連続した顕著な加工が観察される。

#### クサビ形石器（8～37）

本石器は、從来から曾根型石核、ピエス・エスキーユ、裁断面ある石器等と呼ばれている石器である。包含層からは42点が出土し、定形石器としては最も出土点数の多い石器である。

「予報」では9が両刃のノッチとされ、8は右側縁にみられる加工から整状の刃部をもつ彫器に近い石器とされている。一方で剥片または石核の一端あるいは両端に薄い両刃の刃をもつ小刀として、石核を利用した31があるとし、特に31は曾根型石核とされ、類品が埴沢遺跡（戸沢 1955）にあると指摘されている。また、石核にも曾根型及びこれに類するものがあるとされるが、これらの石器も両極打法を技術的特徴とするものとして本類に含めた。

このクサビ形石器は第1次調査の定形石器としては最もまとまった点数をもち、さらに上述のように素材の用い方の技術的特徴から大きく2種類に分類することができる。

#### a類-小形の剥片を素材としたもの（8～30）

本類は小形の剥片を素材としたものと考えるが、表裏面の全面に加工痕がみられるものについては不明である。いずれも器体の上下に両極打法による二次加工が施されるものであるが、さらに平面の形状から、8・20・27・29のように小形の寸づまりの形状をもつものと21・26・30のように継長の形状をもつものに細分される。二次加工は上下方向からの加工とともに8・9・10・12・14・15・18・20・27・28では横方向からの加工も観察される。また、10・11・15・17～19・22・23の側面には上下からの加工による裁断面が認められる。石材は8～10・12・15・18・20・21・24・25・30が下呂石、



第25図 第1次調査出土石器（1）

11・13・16・17・19・22・23・26・28・29がチャート、14・27は頁岩である。

**b類- 爪核素材あるいは厚手の分割剥片を素材としたもの (31~37)**

本類は、「予報」では曾根型石核と技術的関係をもつ石核とされたものである。爪あるいは厚手の分割爪を素材としたものと考えられ、器体の一部に自然面を残すものが多い。加工は器体の上下から施された両極打法による石核状の剥離痕が観察されるものである。形状は全体的に不定形で、器厚は厚いものが多く認められる。加工による剥離痕はa類よりも大きなものであり、これらの石器から剥離されたものと考えられる打面の潰れた小剥片も確認されていることから、a類の素材となっている可能性も考えられる。石材は31~33・36がチャート、34・35は下呂石である。

**削 器 (38~46)**

包含層からは21点が出土した。本石器は、剥片を素材としてその縁辺部に二次加工を施して刃部を作出したものを一括したが、素材の大きさや石材により大きく2種類に分類することができる。

**a類- 主に下呂石やチャートの小形剥片を素材とし、その縁辺部に加工が施されたものを本類としたが、一般的に使用痕のある剥片とされるような刃こぼれ状の小剥離痕が観察されるものも本類に含めた (38~41)。**38・39はいずれも下呂石の剥片を素材とした欠損品であるが、38は主要剥離面側の側縁に刃こぼれ状の小剥離が施される。また、39は打面部付近にノッチ状の加工が観察されるものであり、「予報」ではつまみ部の可能性も指摘されている。40はチャートの二等辺三角形状の剥片を素材とし、端部と片側縁に連続した細かな二次加工が施される。41は下呂石のやや大きな剥片を素材として、その縁辺部に連続した二次加工を施して刃部を作出している。

**b類- 主に砂岩を中心としたやや大形の剥片を素材とし、その縁辺に粗い二次加工が施されたもの (42~46)。**42~46は主に砂岩を中心としたやや大形の剥片を素材とし、その縁辺に連続する粗い二次加工を施して刃部を作出しているものである。特に44は器体の主要剥離面と打面の一部に研磨痕が観察される特殊な石器であり、「予報」でも指摘されている。また、45は右半分を欠損するが、やや大きめの剥片の縁辺に連続した二次加工を施して刃部を作出している削器である。石材は42・43・45・46が砂岩、44は凝灰岩である。

**磨製石斧 (47~49)**

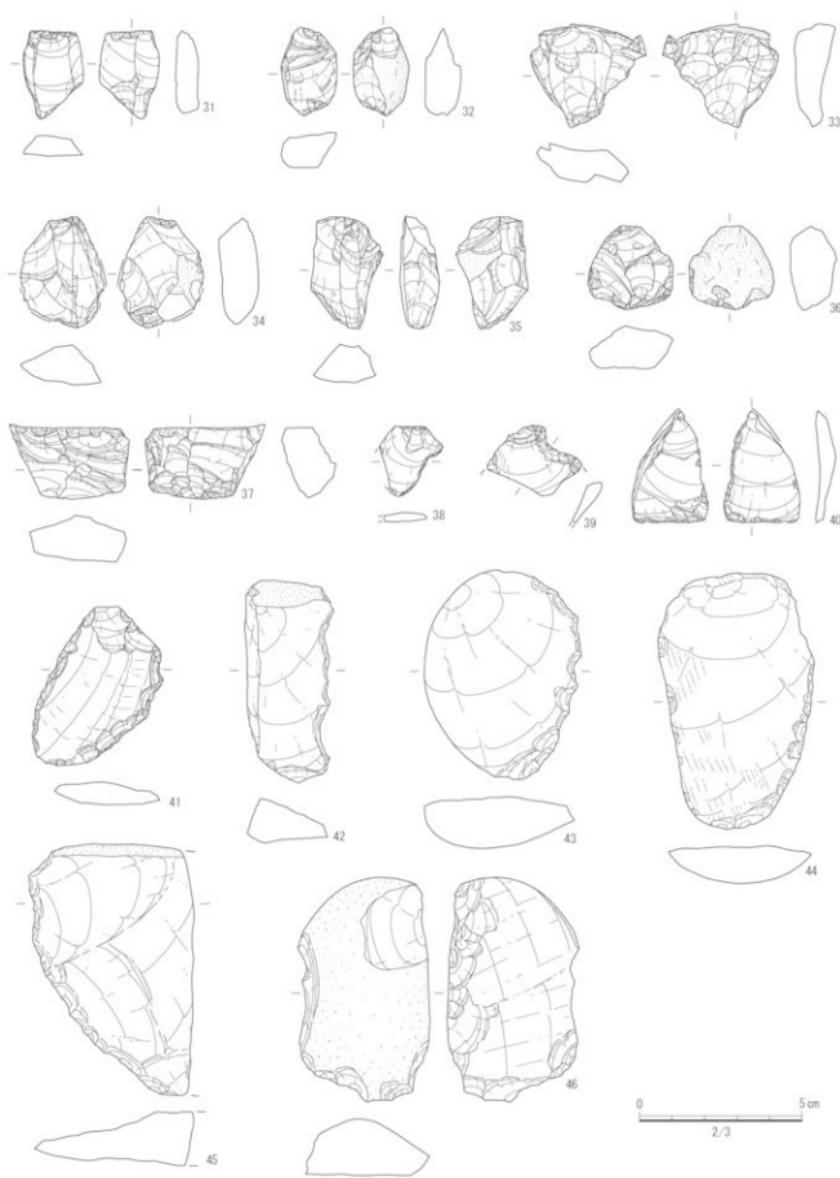
図示した3点が出土したが、A-Ⅲ区出土の1点と表採品2点である。いずれも部分破片であり、頭部破片1点、刃部破片2点である。研磨はいずれも残存部器面全体に丁寧に施されており、頭部破片と48の刃部破片には側面の面取りも観察される。石材は3点とも蛇紋岩である。

**打製石斧 (50)**

E-1区1層から1点出土した。砂岩の扁平砾を素材としたものであり、器体の表裏と左側縁に自然面を残す。調整加工は縁辺部からの粗い二次加工により整形され、下面からの加工は刃部欠損による再加工の可能性が高い。

**磨 石 (51~54)**

包含層からは8点が出土した。一般的な砾の平坦面に研磨痕が観察されるものは53のみであり、その他の磨石はいずれも器体の一側縁あるいは両側縁に研磨による顕著な磨面が観察される所謂「特殊磨石」と呼ばれる磨石である。これらの特殊磨石には、器体の側縁のみに研磨面が観察される54と器体の平坦面にも研磨が観察される51・52があり、さらに52には端部に敲打痕も合わせもつ。石材は51・53が安山岩、52・54は石英斑岩である。



第26図 第1次調査出土石器（2）



第27図 第1次調査出土石器（3）

0  
1/3  
10cm

**凹 石 (55・56)**

図示した2点が出土した。55は石英斑岩のやや細長い礫を素材としたもので、表裏の平坦面に凹みが観察されるものである。56は安山岩の扁平礫を素材としたものであり、表裏の平坦面に施された凹みとともに両側縁に面取りをもつ粗い研磨面が観察されるものである。

**敲 石 (57・58)**

図示した2点が出土した。いずれもやや小形でさざまりの棒状礫を素材としたもので、下端部に敲打痕とそれに伴う剥離面が観察されるものである。石材は57が閃緑岩、58は砂岩である。

**礫 器 (59・60)**

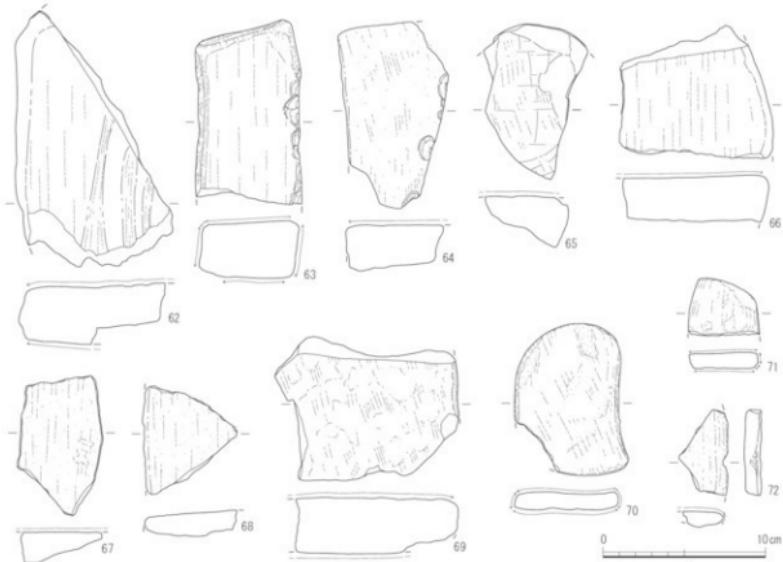
3点が出土した。59は一部を欠損するが、安山岩の扁平礫を素材として、その一端に裏面からの粗い二次加工を施して刃部を作出したものである。60も頭部を欠損するが、砂岩の分割礫を素材として端部から右側縁にかけて連続した粗い二次加工を施して刃部を作出したものである。

**石 核 (61)**

包含層からは2点が出土した。61は砂岩の厚手の礫を素材としたものであり、素材を横にしてその上面から自然面や古い剥離痕を打面として剥片剥離を行ったものである。剥離作業はそれほど多くは行われていないが、打面部の形状は両刃の礫器状を呈する。

**砥 石 (62~72)**

包含層からは15点が出土した。62~64はいずれも部分破片であるが、砂岩の扁平礫を素材としたものであり、器体の平坦面に研磨痕が観察されるものである。また、62は平坦な磨面とともに3条の溝状の磨痕が認められる有溝砥石である。63は角柱状の礫を素材として平坦な4面に研磨痕が認められ



第28図 第1次調査出土石器(4)

る。65～69はいずれも砂岩の扁平礫の平坦面に研磨痕が観察されることから砥石としたが、5点とも欠損品の部分破片であることから扁平石皿が含まれている可能性も考えられる。70・71は「予報」で砂岩製板状の磨製品として報告されているものであり、残存部に全面に研磨が観察される。72も部分破片であるが、砂岩の板状砥石の側縁に刻み状の抉りが観察されるものであり、「予報」では抉り部を線刻として捉えている。

## (2) 第2次調査の出土石器

### 2号住居址出土石器 (第29図1・2、図版27)

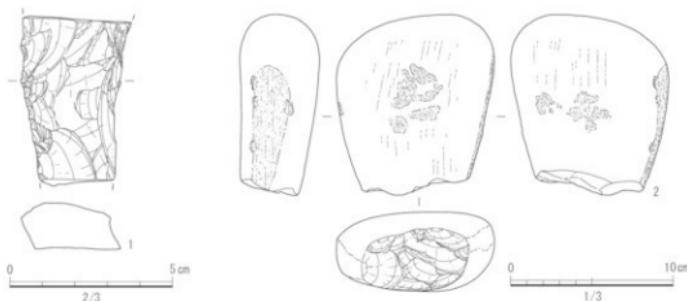
2号住居址に属する石器は計15点が確認された。器種別の内訳は、削器1点、磨石+台石1点、剥片類13点である。

#### 削 器 (1)

1は2号住居址の南西側より出土した。下呂石のやや大形の縱長剥片を素材としたもので、器体の上下を欠損する。左側面に自然面を残すもので、その自然面からの面的な加工が顕著に認められる。刃部は右側縁に認められ、裏面からの粗い急角度の二次加工により作出されている。

#### 磨石+台石 (2)

本石器は2号住居址の北側壁付近から出土した。砂岩の扁平礫を素材とした石器であり、器体の両側面に粗い研磨による面取り状の磨面が観察され、平坦面にも研磨痕が認められたことから磨石としたが、器体の表裏の平坦面には顕著な敲打痕が認められることから、台石としての機能も合わせもつ石器と考えられる。また、器体の下端部には表面を中心とした多方向からの剥片剝離痕も認められている。本石器の素材は粒子の粗い砂岩であり、剝離痕も不定形な小剝離であることから石器の目的的剥片を作出する剥片剝離作業とは考えにくいことから考えると、剥片剝離痕は礫の形状を整形するために礫の端部を裁ち切るための加工である可能性が考えられる。



第29図 第2次調査2号住居址出土石器

### 包含層出土石器 (第30図1～12、図版27)

第2次調査では、包含層から計126点の石器が出土した。器種別の内訳は、石鏃2点、クサビ形石器7点、削器11点、敲石1点、剥片類105点である。

### 石 錄 (1・2)

図示した2点が出土した。いずれも下呂石を素材とした四基無茎錄であり、平面の形状は1が右脚部の短い二等辺三角形、2は正三角形状を呈する。調整加工は器体の表裏に丁寧な加工が施されており、基部の抉りも顕著である。

### クサビ形石器 (3~9)

図示した7点が出土した。形状的にはすばりの剥片を素材とした3~5・7・8と縦長の剥片を素材とした6に分かれる。いずれも器体の上下に両極打法による二次加工が施されたものであり、3・7には側縁からの二次加工も観察される。また、6の両側面には両極打法による裁断面状の剝離面が観察される。石材となった石材は3・7がチャート、4~6・8は下呂石である。

9は、所謂「曾根型石核」状を呈するもので、器体の表裏に両極打法による剥片剝離状の加工が施されるものである。石材は下呂石である。

### 削 器 (10・11)

包含層からは11点が出土した。10はチャートの縦長剥片を素材とし、その裏面の端部にやや細かな二次加工が連続して施されているものである。

11は大形の削器である。砂岩の楕円窪を素材としたものであり、その分割面に裏面からの粗く連続した二次加工を施して刃部を作出したものである。

### 敲 石 (12)

F-3区より1点が出土した。砂岩の楕円窪を素材としたものであり、器体の端部に敲打痕とそれに伴う小剝離痕が観察される。



第30図 第2次調査出土石器

## (3) 第1次・第2次調査出土石器観察表

第5表 第1次・第2次調査出土石器組成表

遺跡名 出土位置	石斧	石刀	タサヒ 形石器	石鋸	大形 削器	小形 削器	磨製 石斧	打製 石斧	磨石	円石	敲石	錐器	砾石	大形 剥片	小形 剥片	タサヒ 剥片	黒曜 石	石核	原石	計
1住(木庭)	4				1				2	2				1	30	3	1		44	
A I	4				1										7	1			13	
A II	1													1	6	1			9	
A III	1														4	1			6	
A IV					1				2	1				1	7				12	
A V										1		1				5			7	
A VI		1												2	6	2	1		12	
A VII					1										2	1			4	
A VIII						1									1				2	
A IX																			0	
A X															8	3			11	
B I	3		3											1	4	22	1		34	
B II																2			2	
C I					1											7			8	
D0 抜																			0	
D0	2		4	1										2	6	10	6		31	
D1	1	10		3	1			2						3	7	28	7		62	
D1 抜		6						1						1	1	3	16	2	1	32
D2	1	5	1	2										3	4	13			29	
D3	1									1						1	2		5	
D4		2												1	2	1			6	
D5															1	1			2	
E1	1	1						1	1					1		2	10		17	
E1 抜														1		10			11	
E2		1													1				2	
E3																			0	
表探・他	1	6		2	1	2			2		1		1	5	42	4	3		70	
小計	1	4	42	2	11	10	3	1	8	2	2	3	15	36	210	31	3	2	1	387
計	1	4	46	2	11	11	3	1	10	4	2	3	16	36	240	34	3	3	1	431
2住(木庭)					1											13			15	
G1-SK2																2			2	
小計					1				1						15				17	
F0																			0	
F1																			0	
F2																			0	
F3											1								1	
F4														1	1				2	
F5														1					1	
F6		1												2					3	
F7		1												3					4	
F8																			0	
F9														2					2	
F10		1			2										3				6	
F11		1													5				6	
G1		1			2									12					15	
G2						1								8					9	
G3														2					2	
G4		1			1									4	1				7	
G5						1	1							3					5	
G6		1			1									2					4	
G7														1					1	
G8														2					2	
H1																			0	
H2																			0	
H3																			0	
表探・他	1	1			2										47	5			56	
小計	2	7		1	10									1	98	7			126	
計	2	7		1	11				1		1			113	7				143	
総計	1	6	53	2	12	22	3	1	11	4	3	3	16	36	353	41	3	3	1	574

第6表 第1次調査1号住居址出土石器観察表

遺物番号	器種	出土位置・層位	石材	備考
1	クサビ形石器	D I区床面	下昌石	
2	クサビ形石器	床面	下昌石	
3	クサビ形石器	D I区床面	チャート	
4	クサビ形石器	D O区床面	チャート	
5	削器	D I区床面	下昌石	予報第5図8
6	磨石	床面	石英斑岩	特殊磨石
7	磨石	D I区床面	砂岩	部分破片 特殊磨石 面あり
8	円石	床面	石英斑岩	敲打と面取り状の経磨面あり
9	円石	床面	安山岩	敲打と面取り状の経磨面あり
10	砥石	床面	砂岩	部分破片

第7表 第1次調査包含層出土石器観察表

遺物番号	器種	出土位置・層位	石材	備考
1	石槍	D I区2層上部	下昌石	先端部欠損 予報第5図4
2	石鏃	E I区2層	下昌石	予報第5図1
3	石鏃		下昌石	予報第5図2
4	石鏃	D 2区1~2層	下昌石	左側縁部欠損 予報第5図3
5	石鏃	A III区1層	下昌石	脚部部欠損
6	石鏃	E 2区1層	下昌石	つまみ部欠損 予報第5図7
7	石鏃	D 2区1~2層	下昌石	つまみ部欠損
8	クサビ形石器	A II区1層	下昌石	予報第5図13
9	クサビ形石器		下昌石	予報第5図10
10	クサビ形石器		下昌石	
11	クサビ形石器	A VII区1層	チャート	
12	クサビ形石器	D I区2層上部	下昌石	
13	クサビ形石器	D I区2層	チャート	予報第5図11
15	クサビ形石器	D 2区1~2層	下昌石	
16	クサビ形石器	D I拡張区2層	チャート	
17	クサビ形石器		チャート	
18	クサビ形石器	D O区2層	下昌石	
19	クサビ形石器	D I拡張区2層	チャート	
20	クサビ形石器	D 2区1~2層	下昌石	
21	クサビ形石器		下昌石	
22	クサビ形石器	D 4区2層	チャート	
23	クサビ形石器	A I区1層	チャート	
24	クサビ形石器	D O区2層	下昌石	
25	クサビ形石器	D I区2層上部	下昌石	
26	クサビ形石器	D I区2層	チャート	
27	クサビ形石器	E I区2層	頁岩	
28	クサビ形石器	D 2区1~2層	チャート	
29	クサビ形石器	D 2区1層	チャート	
30	クサビ形石器	D I区2層上部	下昌石	
31	クサビ形石器	D I拡張区2層	チャート	予報第5図12
32	クサビ形石器	D I区2層上部	チャート	
33	クサビ形石器	D I拡張区2層	チャート	
34	クサビ形石器		下昌石	
35	クサビ形石器	A I区3層	下昌石	
36	クサビ形石器	B I区3層	チャート	
37	クサビ形石器	D I区2層上部	下昌石	
38	削器	B I区3層	下昌石	部分欠損 予報第5図9

39	削器	B I区2層	下昌石	下部欠損 予報第5図6
40	削器			チャート
41	削器	A IV区3層	下昌石	予報第5図5
42	削器	D O区2層	砂岩	
43	削器	D O区2層	砂岩	
44	削器	D I区2層	凝灰岩	
45	削器	D 2区1~2層	砂岩	右半分欠損
46	削器	D O区2層	砂岩	
47	磨製石斧		蛇紋岩	頭部破片
48	磨製石斧		蛇紋岩	刃部破片
49	磨製石斧	A IV区3層	蛇紋岩	刃部破片
50	打製石斧	E I区1層	凝灰岩	刃部欠損 再生品?
51	磨石	E I区2層	安山岩	特殊磨石
52	磨石		石英斑岩	一部欠損 特殊磨石
53	磨石	D I区2層上部	安山岩	一部欠損
54	磨石	D I区2層上部	石英斑岩	下部欠損 特殊磨石
55	円石	A IV区2層	石英斑岩	
56	円石	A V区3層	安山岩	面取り状の研磨面あり
57	敲石	D 2区2層	閃綠岩	
58	敲石		砂岩	
59	礫器	E I区1層	安山岩	一部欠損
60	礫器	D I拡張区2層	砂岩	一部欠損
61	石核	D I拡張区2層	砂岩	
62	砥石	D I区2層	砂岩	部分破片 有溝砥石
63	砥石	D I区2層上部	砂岩	下部欠損 横縫に敲打痕あり
64	砥石	D I区2層上部	砂岩	部分破片
65	砥石	D 2区3層	砂岩	部分破片
66	砥石	A IV区3層	砂岩	部分破片
67	砥石	D 4区2層	砂岩	部分破片
68	砥石	D 2区1~2層	砂岩	部分破片
69	砥石	D I拡張区2層	砂岩	部分破片
70	砥石	A IV区3層	砂岩	一部欠損
71	砥石	B I区1層	砂岩	下部欠損
72	砥石	D 2区赤土直上	砂岩	抉り入り砥石

第8表 第2次調査2号住居址出土石器観察表

遺物番号	器種	出土位置・層位	石材	備考
1	削器	床面	下昌石	上端部欠損
2	台石・磨石	床面	砂岩	下面に剝離痕あり

第9表 第2次調査包含層出土石器観察表

遺物番号	器種	出土位置・層位	石材	備考
1	石槍	F 6区	下昌石	
2	石槍		下昌石	
3	クサビ形石器	F 11区	チャート	
4	クサビ形石器	G 4区	下昌石	
5	クサビ形石器	G 1区	下昌石	
6	クサビ形石器		下昌石	
7	クサビ形石器	G 1区	チャート	
8	クサビ形石器	F 10区	下昌石	
9	クサビ形石器	F 7区	下昌石	
10	削器	G 6区	チャート	
11	削器	G 5区	砂岩	
12	敲石	F 3区	砂岩	

## 第5章 考 察

### 第1節 発掘調査のまとめと考察

#### (1) 佐藤型式学のまなざしとその分析法

1964(昭和39)年、大野政雄は縄紋早期押型紋期の沢遺跡の調査を実施した(予備調査)。

出土した押型紋土器の情報は、直ぐさま山内清男・佐藤達夫の元にもたらされ、佐藤による分析と整理がはじめられた。沢遺跡の押型紋土器は当時それまで知られていた押型紋とは異なり、ほぼ純粋な型式的まとまりをもつ新型式の押型紋土器であった。その重要性を瞬時に認識した佐藤は、その解明のために沢遺跡の発掘調査に深く係わることになる。大野の要請に従い本格的な発掘調査が行われたのは1967(昭和42)年4月のことであった(第1回調査)。

発掘調査後、直ちに出土資料は阿佐ヶ谷の佐藤宅に送られ、整理、分類・分析作業が行われることになる。そして、その年の9月には大野・佐藤の連名による「岐阜県沢遺跡調査予報」と題した調査速報が考古学雑誌に掲載される(大野・佐藤 1967)。この「予報」は佐藤の手によるものである。

今日的視点で改めて沢遺跡を総括する時、「予報」で提示された佐藤の透徹した型式学的分析と沢式の編年の考察を改めて検証する必要があろう。そこには佐藤による土器・石器の観察・分析の型式学的指針が明確に提示されている。まずは提唱された「沢式」押型紋土器に関する解題から始めよう。佐藤の型式学的まなざし

「予報」と冠しているものの、その報告の内容は基礎的な分類・分析に基づく精緻な記述となっている。その基礎となる整理時の佐藤メモが残されている(第11表-1~4、64ページ参照)。「予報」の冒頭には数少ない押型紋期の堅穴住居址を検出すとともに、「沢式」と呼ぶべき新型式の押型紋土器を提示する。山形押型紋を主体とし、格子目押型紋や結節縄紋の施紋が帯状に構成されること、胎土に黒鉛を混入すること、梢円押型紋が一片もないことなどをあげ、「沢式」の型式内容を端的に述べる。

**種類と比率** 出土した土器は押型紋・結節回転紋・条痕紋・無紋の4種である(第1表)。種別の出土比率は山形紋が主体で、無紋はその1/3。結節回転紋・条痕紋は数個体である。押型紋は殆どが山形紋で、格子目紋が2個体にすぎない。山形紋は山形が並行するものと対向するものがある。並行するものには螺旋状(右巻・左巻)がある。山形の形状は波状のものとジグザグ状のものがある。

**器形と器壁** 器形は口縁部が外反する尖底深鉢形。胴部は軽度のふくらみがあり、尖底は乳房状を呈する。口縁部の大部分は外反する平縁であるが、山形口縁のものが若干あり、注目される。器壁は薄く大部分が4~5mm(第11表-3)。

**条数と単位** 原体の条数は2条~5条で、3条のものが多く、4条のものがこれに次ぐ。両者の割合はほぼ二対一。原体一周の単位は2単位が殆どで、1単位のものも僅かに確認できる。原体の端末はV字形の切り込みが加えられる(第11表-1)。

**長さと直径** 原体の長さは9~17mm。大体11~15mmで指一本の幅に相当する。直径は3.5~5.5mm程度。4mm台のものが最も多く、その比率は大体4mm台8:3mm台2:5mm台1である。4mm前後と4.5mm前後に集中する(第11表-2)。

**施紋の原則** 施紋は同一個体・同一原体が原則で、異なる原体（異種原体）で施紋する例はない。必ず口唇部には施紋する。口縁内面に施紋するものとしないものがあり、紋様のないものがやや多い。押型紋・結節繩紋を問わず、回転施紋は帯状施紋が原則である。主体は横一帯型（1帯型）と横二帯型（2帯型）であるが、僅かに縦帶のみ縦帶型（0帯型）がある。横一帯型には口縁部直下に横帯を廻らすもの（a種）と幅広の無紋帶を設け口縁部と胴部の境に横帯を廻らすもの（a'種）がある。横二帯型は上位の第1横帯から縦帶がはじまるもの（b種）と下位の第2横帯からはじまるもの（a種）がある。前者は縦帶は第2横帯と直交することになる。なお三帯以上のものは確認されていない。横帯と縦帶の施紋の前後関係は縦帶を先、横帯を先に施す両者がある（第11表-4）。

**黒鉛の有無** 脱土に黒鉛を含む灰褐色・黒褐色を呈するものと含まない明褐色を呈するものがある。含まないものは少ない。黒鉛の混入は沢式の特徴で、その時期は限定的である。雲母の混入と同様、黒鉛も除粘材としての用途、外観上（色合）の効果、黒鉛の耐火性などの黒鉛混入の効用を検討。黒鉛鉱床の飛騨変成岩地帯に分布し、沢遺跡に近い果山産黒鉛の可能性を指摘。原産地の特質をもつ黒鉛混入土器が交易圏の指標になる点、ヨーロッパの類例を紹介。

発掘調査から僅か数ヶ月間に、破片総数による個体別分析を除いて、ほぼ観察すべき沢式押型紋の特徴を抽出している。当然のことといってしまえばそれまでであるが、新型式としての「沢式」の要件を的確に明示している。今回、再整理をはじめてみると、改めて佐藤型式学がこうした精緻な実証的研究に裏付けられていることを強く感じる所以である。

## (2) 押型紋土器に関する佐藤編年

沢式押型紋の設定を踏まえて、最後に編年的位置づけを考察する。当時1960年代に知られていた押型紋の標式遺跡は、飛騨のひじ山遺跡、信州の樋沢遺跡・細久保遺跡・立野遺跡・東組遺跡、越後の卯ノ木遺跡、上野の普門寺遺跡、西の大川遺跡・神宮寺遺跡・黄島遺跡・小鳶島遺跡など、全国的にも限られていた。佐藤の型式学的みなぎしは、これらの遺跡の押型紋土器と比較を通して、沢式の編年位置づけを論証していくのである。

**沢式とひじ山式** まずは同じ飛騨の押型紋遺跡として古くから知られたひじ山の押型紋と沢式の比較から始める。そして「帯状施紋を特徴とし、楕円押型紋を欠く沢遺跡の土器が、ひじ山に先行することは明らかである」と結論づける。帯状施紋→全面施紋へ施紋法の型式学的変化、楕円押型紋の有無を基準としたものである。江馬 修がひじ山の一部の土器について押型紋における摩消手法として注意していた（赤木 1937）ことを受け、ひじ山の摩消手法は沢式の帯状施紋の伝統に従うものであろうと推測している。押型紋土器の施紋法には帯状施紋を特徴とするものと、全面施紋を基本とするに大別される。型式学的には前者を押型紋の前半、後者を後半とすることができ、ひじ山は前半期の施紋法の残存から、その中間的時期に位置づけたのである。

今日的にみれば、ひじ山の押型紋は横方向無紋帶をもつ細久保1式、異形押型紋を含む細久保2式の二時期のものがある。

**沢式と樋沢下層式** 佐藤は樋沢式を「樋沢下層式」と呼んでいる。当時、沢式に最も類似した押型紋は樋沢下層式であるが、両者の違いを次のように指摘している。

1. 樋沢下層は楕円押型紋を有していること。
2. 全面に施紋するものがあること。

3. 横沢下層は口縁部内面に施紋するものが少ないとこと。
4. 沢式は殆ど口唇部に施紋するの対し、横沢下層は約半数は口唇部に施紋しない。
5. 原体は沢式に比べ山形の条数が多く、従て長さも大である。

これらの5点の相違をあげ、「横沢下層式」は「沢式」以降の所産であり、横沢下層の時期は「下降の応ずる変化」と見なしたのである。信州の押型紋土器について、横沢下層→細久保→横沢上層・東組と三段階の変遷を示した。その根拠は横沢遺跡の層位の関係、楕円紋の有無、帶状施紋→全面施紋の型式学的に基づいている。

**沢式と普門寺式** さらに中部の押型紋から関東の押型紋のうち最古とされる普門寺式に目を向ける。普門寺式は全面施紋の傾向が強く、関東ではむしろ平坂Ⅱ式に伴う押型紋土器が最も古く、また最も沢式に近いものとして、その変遷を平坂→普門寺と位置づけた。戦後、稲荷台式に伴うとされた押型紋の共伴関係は清算され、撚糸紋終末とされる平坂Ⅱ式に伴う押型紋が編年上の定点となっていた(芹沢 1954)。その押型紋が沢式に併行するという佐藤の指摘は、その後の押型紋の編年研究に大きく影響をもつことになる。しかし沢式との違いを「平坂には格子目紋が多く、また原体に相違するところがある。地域差かもしれない。」と指摘している。

かくして中部・関東地方における押型紋は、帶状施紋の山形押型紋に発する伝統があり、4段階の時期的変遷を推測する。つまり現在のところ沢・平坂が最も古く、横沢下層・普門寺がこれに続き、ひじ山をその後に位置づけたのである。長野県では菅平東組・横沢上層等がひじ山に並行。細久保・卯ノ木等の水平帶状施紋を特徴とするものが、横沢下層と東組間に位置づける。

**沢式と神宮寺・大川式** 沢式を最古とする東日本の編年的位置と西日本の押型紋土器最古の段階(横沢下層式・普門寺式以前)と考えられる神宮寺式・大川式と沢との前後関係を検証していく。まずは両者に共通する山形紋の比較から行う。神宮寺・大川両式はともに少量の山形押型紋を伴う。大川式の山形押型紋には、山形の条数が少なく、比較的短い原体によるものと、然らざるものがある。前者は帶状施紋の傾向を有し、後者は全面に施紋される。神宮寺式の山形紋は前者に限られ、沢式に類似する。神宮寺式が大川式に先行し、両式間に連続性がある。神宮寺式の山形紋原体は2または3条であって、この点は沢式より古かるべき特徴をもっている。しかし原体の長さをみると2cm前後で、沢式より長いが、その他の押型紋(ネガ紋)原体に比べて著しく短く、神宮寺式の押型紋中特異な存在をなしている。山形紋がネガティヴ押型紋のなかにあって「異質な原体」であるという佐藤の指摘は重要であろう。

**二系統論の提示** 以上のような点から、東の沢式の西の神宮寺式の発展形態とみるには、大川式に比べて他の神宮寺式的要素の欠如が問題になろう。その逆とみることにも困難が伴う。両者は時期的には極めて近く、山形押型紋そのものにはおそらく共通の祖源があろう。沢式では山形紋原体が細かい変化を生じたが、一方神宮寺式では数も少ないが、変化も少ない。おそらく両者はもともと土器施紋の型あるいは傾向を異にしていたのであろう。大川式における山形紋の変化は、全面施紋を特徴とする長い原体を用いる神宮寺式以来の伝統に基づくものであろうと指摘した。

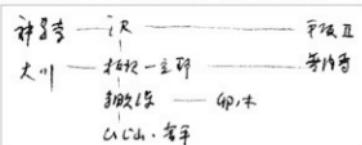
神宮寺・大川両式に類似する土器は、近畿から東海にかけて分布し、南信に及ぶ。九合洞穴・北替地・立野等が著名である。立野式は大川式に極めて近い。九合・北替地はこれと異なり、むしろ神宮寺式に接近しよう。立野式は楕円押型紋を伴い、沢以後、おそらく横沢下層式に近いのであろう。傍証として御座岩岩陰では大川式近似の破片が横沢下層式とともに出土している。一方、九合には横

沢下層式よりもむしろ沢式に類似する山形押型紋がある。これと神宮寺類似土器との前後関係は困難な問題であろうが、共伴の可能性があろうと結論づける。

神宮寺・大川両式は沢・樋沢下層式のごとき帶状施紋を特徴とする山形押型紋とは元来別の系統に属し、ほぼ同時期の地域を異にして分布する二系統論を展開したのである。相異なる沢式と神宮寺両式の成立には先行型式の差異が与っていること。樋沢下層・御座岩等にみられるごとく、この時期に生じる全面施紋への変化はおそらく大川式の影響と推測した。樋沢下層式以後、なおしばらく帶状施紋の伝統は中部山岳地域に存続し、これに並行してその南側では大川式系統の土器が、九合におけるやや複雑な押型紋のごとき地方的型式に変遷し、信州においても細久保・東組等の押型紋にその影響を窺うことができる。

沢出土の土器はその紋様、胎土等において、他の押型紋土器から分離しうる明確な型式学的特徴を備え、沢式の編年位置は押型紋最古の段階であること。東の沢式を西の神宮寺・大川式の発展形態とする一系統論は、型式学的には成立しないと結論づけたのである。神宮寺式と大川式が逆転した今日においても、佐藤型式学のまなざしは有効と考えられる。最後に、佐藤が提示した押型紋土器の編年を図示しておこう。なお右図に示した「予報」の考察時の佐藤編年メモが残されている。

佐藤原資料-2 押型紋土器に関する佐藤編年メモ



第10表 押型紋土器の佐藤編年

	関 東	信 州	越 後	飛 駆	東 海	畿 内
I 期	平坂			沢	九合・北替地	神宮寺
II 期	普門寺	樋沢下層・立野				大川
III 期		細久保	卯ノ木			
IV 期		樋沢上層・東組		ひじ山		

### (3) 再整理の分析

発掘調査の概要において述べたように1964(昭和39)年調査と1967(昭和42)年の調査出土遺物は小さな紙箱等に保管されており、佐藤が接合、個体分類、紋様の観察と計測を行ったもので、小箱には出土区と層位ごとに土器片がまとめられていた。これらの破片に対して今回改めて個体分類と接合関係の再整理を試み、「予報」の記述を正確に出土資料にあてて観察し、分類を行うことを基本姿勢とした。

今回の再整理の結果、数量的なところは別として予報における施紋手法等に関わる観察記述に訂正を必要とするところはほとんど無かったといえる。むしろ施紋原体長、刻み条数、回転長、紋様の先后関係、縄紋原体等は観察可能な破片全てについて観察が行われており、再整理を行った我々がその短い行間から学ぶところは大であった。一つの例として予報に示された土器およびその他の破片について、新たな接合部が見つかったものは僅か数点であり、佐藤がいかに良く土器をみていたかがわかるのである。

なお佐藤の整理の際に手書きしたメモ、あるいは表として集計した佐藤メモが残っている(佐藤原

① '64年1月

四

	正T	60T	高加一
?	正T <small>(145K 60K)</small>	T	正T
2	-	-	-
3	T	T	-
4	F	F	-
5	7	6	1
※	-	-	-
T	-	-	T
△	-	9	-
	28	9	11

10. 2月 (日曜日)  
~~~ 1月 (日曜日)  
XXXXX 1月 (日曜日)

~~100~~ 100

4-69.] 22

$$\text{计 } 50 + 32 = \underline{\underline{82}}$$

山林詩集卷一 869

杨子-29枝皮 1 + 1 =

$$\theta + \phi = 1$$

$$\sim \sim \sim$$

$$12 + 9 = 21$$

$$50 + 32 = 8$$

卷之三

⑤ 二元一次方程

|             | 前回 | ?   | 次回 | 14  |
|-------------|----|-----|----|-----|
| 20<br>8.23日 | 6  | 11  | 11 |     |
| 80<br>8.25日 | 52 | 2   | 2  | 55  |
| (W)         | 15 |     |    |     |
| A I         | 1  | 58  | 1  | 64  |
|             | 1  | 59  |    |     |
|             | 1  | 60  |    |     |
| A II        | 1  | 39  |    | 32  |
|             | 1  | 41  |    | 32  |
| A III       | 1  | 37  |    | 37  |
|             | 1  | 38  |    | 37  |
| A IV        | 1  | 4   |    |     |
|             | 1  | 5   |    | 29  |
| A V         | 3  | 32  |    | 29  |
|             | 1  | 34  |    | 30  |
| A VI        | 3  | 32  |    | 33  |
|             | 1  | 33  |    | 34  |
| A VII       | 3  | 28  |    | 28  |
|             | 1  | 29  |    | 28  |
| A VIII      | 3  | 26  |    | 26  |
|             | 1  | 27  |    | 27  |
| A IX        | 3  | 26  |    | 26  |
|             | 1  | 27  |    | 27  |
| A X         | 3  | 26  |    | 26  |
|             | 1  | 27  |    | 27  |
| B I         | 3  | 27  |    | 19  |
|             | 1  | 28  |    | 19  |
| B II        | 3  | 16  |    | 9   |
|             | 1  | 16  |    | 9   |
| B III       | 3  | 16  |    | 9   |
|             | 1  | 17  |    | 9   |
| C I         | 3  | 12  |    | 12  |
|             | 1  | 13  |    | 12  |
|             | 1  | 14  |    | 13  |
|             | 1  | 15  |    | 14  |
|             | 1  | 16  |    | 15  |
|             | 1  | 17  |    | 16  |
|             | 1  | 18  |    | 17  |
|             | 1  | 19  |    | 18  |
|             | 1  | 20  |    | 19  |
|             | 1  | 21  |    | 20  |
|             | 1  | 22  |    | 21  |
|             | 1  | 23  |    | 22  |
|             | 1  | 24  |    | 23  |
|             | 1  | 25  |    | 24  |
|             | 1  | 26  |    | 25  |
|             | 1  | 27  |    | 26  |
|             | 1  | 28  |    | 27  |
|             | 1  | 29  |    | 28  |
|             | 1  | 30  |    | 29  |
|             | 1  | 31  |    | 30  |
|             | 1  | 32  |    | 31  |
|             | 1  | 33  |    | 32  |
|             | 1  | 34  |    | 33  |
|             | 1  | 35  |    | 34  |
|             | 1  | 36  |    | 35  |
|             | 1  | 37  |    | 36  |
|             | 1  | 38  |    | 37  |
|             | 1  | 39  |    | 38  |
|             | 1  | 40  |    | 39  |
|             | 1  | 41  |    | 40  |
|             | 1  | 42  |    | 41  |
|             | 1  | 43  |    | 42  |
|             | 1  | 44  |    | 43  |
|             | 1  | 45  |    | 44  |
|             | 1  | 46  |    | 45  |
|             | 1  | 47  |    | 46  |
|             | 1  | 48  |    | 47  |
|             | 1  | 49  |    | 48  |
|             | 1  | 50  |    | 49  |
|             | 1  | 51  |    | 50  |
|             | 1  | 52  |    | 51  |
|             | 1  | 53  |    | 52  |
|             | 1  | 54  |    | 53  |
|             | 1  | 55  |    | 54  |
|             | 1  | 56  |    | 55  |
|             | 1  | 57  |    | 56  |
|             | 1  | 58  |    | 57  |
|             | 1  | 59  |    | 58  |
|             | 1  | 60  |    | 59  |
|             | 1  | 61  |    | 60  |
|             | 1  | 62  |    | 61  |
|             | 1  | 63  |    | 62  |
|             | 1  | 64  |    | 63  |
|             | 1  | 65  |    | 64  |
|             | 1  | 66  |    | 65  |
|             | 1  | 67  |    | 66  |
|             | 1  | 68  |    | 67  |
|             | 1  | 69  |    | 68  |
|             | 1  | 70  |    | 69  |
|             | 1  | 71  |    | 70  |
|             | 1  | 72  |    | 71  |
|             | 1  | 73  |    | 72  |
|             | 1  | 74  |    | 73  |
|             | 1  | 75  |    | 74  |
|             | 1  | 76  |    | 75  |
|             | 1  | 77  |    | 76  |
|             | 1  | 78  |    | 77  |
|             | 1  | 79  |    | 78  |
|             | 1  | 80  |    | 79  |
|             | 1  | 81  |    | 80  |
|             | 1  | 82  |    | 81  |
|             | 1  | 83  |    | 82  |
|             | 1  | 84  |    | 83  |
|             | 1  | 85  |    | 84  |
|             | 1  | 86  |    | 85  |
|             | 1  | 87  |    | 86  |
|             | 1  | 88  |    | 87  |
|             | 1  | 89  |    | 88  |
|             | 1  | 90  |    | 89  |
|             | 1  | 91  |    | 90  |
|             | 1  | 92  |    | 91  |
|             | 1  | 93  |    | 92  |
|             | 1  | 94  |    | 93  |
|             | 1  | 95  |    | 94  |
|             | 1  | 96  |    | 95  |
|             | 1  | 97  |    | 96  |
|             | 1  | 98  |    | 97  |
|             | 1  | 99  |    | 98  |
|             | 1  | 100 |    | 99  |
|             | 1  | 101 |    | 100 |
|             | 1  | 102 |    | 101 |
|             | 1  | 103 |    | 102 |
|             | 1  | 104 |    | 103 |
|             | 1  | 105 |    | 104 |
|             | 1  | 106 |    | 105 |
|             | 1  | 107 |    | 106 |
|             | 1  | 108 |    | 107 |
|             | 1  | 109 |    | 108 |
|             | 1  | 110 |    | 109 |
|             | 1  | 111 |    | 110 |
|             | 1  | 112 |    | 111 |
|             | 1  | 113 |    | 112 |
|             | 1  | 114 |    | 113 |
|             | 1  | 115 |    | 114 |
|             | 1  | 116 |    | 115 |
|             | 1  | 117 |    | 116 |
|             | 1  | 118 |    | 117 |
|             | 1  | 119 |    | 118 |
|             | 1  | 120 |    | 119 |
|             | 1  | 121 |    | 120 |
|             | 1  | 122 |    | 121 |
|             | 1  | 123 |    | 122 |
|             | 1  | 124 |    | 123 |
|             | 1  | 125 |    | 124 |
|             | 1  | 126 |    | 125 |
|             | 1  | 127 |    | 126 |
|             | 1  | 128 |    | 127 |
|             | 1  | 129 |    | 128 |
|             | 1  | 130 |    | 129 |
|             | 1  | 131 |    | 130 |
|             | 1  | 132 |    | 131 |
|             | 1  | 133 |    | 132 |
|             | 1  | 134 |    | 133 |
|             | 1  | 135 |    | 134 |
|             | 1  | 136 |    | 135 |
|             | 1  | 137 |    | 136 |
|             | 1  | 138 |    | 137 |
|             | 1  | 139 |    | 138 |
|             | 1  | 140 |    | 139 |
|             | 1  | 141 |    | 140 |
|             | 1  | 142 |    | 141 |
|             | 1  | 143 |    | 142 |
|             | 1  | 144 |    | 143 |
|             | 1  | 145 |    | 144 |
|             | 1  | 146 |    | 145 |
|             | 1  | 147 |    | 146 |
|             | 1  | 148 |    | 147 |
|             | 1  | 149 |    | 148 |
|             | 1  | 150 |    | 149 |
|             | 1  | 151 |    | 150 |
|             | 1  | 152 |    | 151 |
|             | 1  | 153 |    | 152 |
|             | 1  | 154 |    | 153 |
|             | 1  | 155 |    | 154 |
|             | 1  | 156 |    | 155 |
|             | 1  | 157 |    | 156 |
|             | 1  | 158 |    | 157 |
|             | 1  | 159 |    | 158 |
|             | 1  | 160 |    | 159 |
|             | 1  | 161 |    | 160 |
|             | 1  | 162 |    | 161 |
|             | 1  | 163 |    | 162 |
|             | 1  | 164 |    | 163 |
|             | 1  | 165 |    | 164 |
|             | 1  | 166 |    | 165 |
|             | 1  | 167 |    | 166 |
|             | 1  | 168 |    | 167 |
|             | 1  | 169 |    | 168 |
|             | 1  | 170 |    | 169 |
|             | 1  | 171 |    | 170 |
|             | 1  | 172 |    | 171 |
|             | 1  | 173 |    | 172 |
|             | 1  | 174 |    | 173 |
|             | 1  | 175 |    | 174 |
|             | 1  | 176 |    | 175 |
|             | 1  | 177 |    | 176 |
|             | 1  | 178 |    | 177 |
|             | 1  | 179 |    | 178 |
|             | 1  | 180 |    | 179 |
|             | 1  | 181 |    | 180 |
|             | 1  | 182 |    | 181 |
|             | 1  | 183 |    | 182 |
|             | 1  | 184 |    | 183 |
|             | 1  | 185 |    | 184 |
|             | 1  | 186 |    | 185 |
|             | 1  | 187 |    | 186 |
|             | 1  | 188 |    | 187 |
|             | 1  | 189 |    | 188 |
|             | 1  | 190 |    | 189 |
|             | 1  | 191 |    | 190 |
|             | 1  | 192 |    | 191 |
|             | 1  | 193 |    | 192 |
|             | 1  | 194 |    | 193 |
|             | 1  | 195 |    | 194 |
|             | 1  | 196 |    | 195 |
|             | 1  | 197 |    | 196 |
|             | 1  | 198 |    | 197 |
|             | 1  | 199 |    | 198 |
|             | 1  | 200 |    | 199 |
|             | 1  | 201 |    | 200 |
|             | 1  | 202 |    | 201 |
|             | 1  | 203 |    | 202 |
|             | 1  | 204 |    | 203 |
|             | 1  | 205 |    | 204 |
|             | 1  | 206 |    | 205 |
|             | 1  | 207 |    | 206 |
|             | 1  | 208 |    | 207 |
|             | 1  | 209 |    | 208 |
|             | 1  | 210 |    | 209 |
|             | 1  | 211 |    | 210 |
|             | 1  | 212 |    | 211 |
|             | 1  | 213 |    | 212 |
|             | 1  | 214 |    | 213 |
|             | 1  | 215 |    | 214 |
|             | 1  | 216 |    | 215 |
|             | 1  | 217 |    | 216 |
|             | 1  | 218 |    | 217 |
|             | 1  | 219 |    | 218 |
|             | 1  | 220 |    | 219 |
|             | 1  | 221 |    | 220 |
|             | 1  | 222 |    | 221 |
|             | 1  | 223 |    | 222 |
|             | 1  | 224 |    | 223 |
|             | 1  | 225 |    | 224 |
|             | 1  | 226 |    | 225 |
|             | 1  | 227 |    | 226 |
|             | 1  | 228 |    | 227 |
|             | 1  | 229 |    | 228 |
|             | 1  | 230 |    | 229 |
|             | 1  | 231 |    | 230 |
|             | 1  | 232 |    | 231 |
|             | 1  | 233 |    | 232 |
|             | 1  | 234 |    | 233 |
|             | 1  | 235 |    | 234 |
|             | 1  | 236 |    | 235 |
|             | 1  | 237 |    | 236 |
|             | 1  | 238 |    | 237 |
|             | 1  | 239 |    | 238 |
|             | 1  | 240 |    | 239 |
|             | 1  | 241 |    | 240 |
|             | 1  | 242 |    | 241 |
|             | 1  | 243 |    | 242 |
|             | 1  | 244 |    | 243 |
|             | 1  | 245 |    | 244 |
|             | 1  | 246 |    | 245 |
|             | 1  | 247 |    | 246 |
|             | 1  | 248 |    | 247 |
|             | 1  | 249 |    | 248 |
|             | 1  | 250 |    | 249 |
|             | 1  | 251 |    | 250 |
|             | 1  | 252 |    | 251 |
|             | 1  | 253 |    | 252 |
|             | 1  | 254 |    | 253 |
|             | 1  | 255 |    | 254 |
|             | 1  | 256 |    | 255 |
|             | 1  | 257 |    | 256 |
|             | 1  | 258 |    | 257 |
|             | 1  | 259 |    | 258 |
|             | 1  | 260 |    | 259 |
|             | 1  | 261 |    | 260 |
|             | 1  | 262 |    | 261 |
|             | 1  | 263 |    | 262 |
|             | 1  | 264 |    | 263 |
|             | 1  | 265 |    | 264 |
|             | 1  | 266 |    | 265 |
|             | 1  | 267 |    | 266 |
|             | 1  | 268 |    | 267 |
|             | 1  | 269 |    | 268 |
|             | 1  | 270 |    | 269 |
|             | 1  | 271 |    | 270 |
|             | 1  | 272 |    | 271 |
|             | 1  | 273 |    | 272 |
|             | 1  | 274 |    | 273 |
|             | 1  | 275 |    | 274 |
|             | 1  | 276 |    | 275 |
|             | 1  | 277 |    | 276 |
|             | 1  | 278 |    | 277 |
|             | 1  | 279 |    | 278 |
|             | 1  | 280 |    | 279 |
|             | 1  | 281 |    | 280 |
|             | 1  | 282 |    | 281 |
|             | 1  | 283 |    | 282 |
|             | 1  | 284 |    | 283 |
|             | 1  | 285 |    | 284 |
|             | 1  | 286 |    | 285 |
|             | 1  | 287 |    | 286 |
|             | 1  | 288 |    | 287 |
|             | 1  | 289 |    | 288 |
|             | 1  | 290 |    | 289 |
|             | 1  | 291 |    | 290 |
|             | 1  | 292 |    | 291 |
|             | 1  | 293 |    | 292 |
|             | 1  | 294 |    | 293 |
|             | 1  | 295 |    | 294 |
|             | 1  | 296 |    | 295 |
|             | 1  | 297 |    | 296 |
|             | 1  | 298 |    | 297 |
|             | 1  | 299 |    | 298 |
|             | 1  | 300 |    | 299 |
|             | 1  | 301 |    | 300 |
|             | 1  | 302 |    | 301 |
|             | 1  | 303 |    | 302 |
|             | 1  | 304 |    | 303 |
|             | 1  | 305 |    | 304 |
|             | 1  | 306 |    | 305 |
|             | 1  | 307 |    | 306 |
|             | 1  | 308 |    | 307 |
|             | 1  | 309 |    | 308 |
|             | 1  | 310 |    | 309 |
|             | 1  | 311 |    | 310 |
|             | 1  | 312 |    | 311 |
|             | 1  | 313 |    | 312 |
|             | 1  | 314 |    | 313 |
|             | 1  | 315 |    | 314 |
|             | 1  | 316 |    | 315 |
|             | 1  | 317 |    | 316 |
|             | 1  | 318 |    | 317 |
|             | 1  | 319 |    | 318 |
|             | 1  | 320 |    | 319 |
|             | 1  | 321 |    | 320 |
|             | 1  | 322 |    | 321 |
|             | 1  | 323 |    | 322 |
|             | 1  | 324 |    | 323 |
|             | 1  | 325 |    | 324 |
|             | 1  | 326 |    | 325 |
|             | 1  | 327 |    | 326 |
|             | 1  | 328 |    | 327 |
|             | 1  | 329 |    | 328 |
|             | 1  | 330 |    | 329 |
|             | 1  | 331 |    | 330 |
|             | 1  | 332 |    | 331 |
|             | 1  | 333 |    | 332 |
|             | 1  | 334 |    | 333 |
|             | 1  | 335 |    | 334 |
|             | 1  | 336 |    | 335 |
|             | 1  | 337 |    | 336 |
|             | 1  | 338 |    | 337 |
|             | 1  | 339 |    | 338 |
|             | 1  | 340 |    | 339 |
|             | 1  | 341 |    | 340 |
|             | 1  | 342 |    | 341 |
|             | 1  | 343 |    |     |

② '67年秋

卷之三

① [About](#) | [Jobs](#) | [Contact](#) | [Feedback](#)

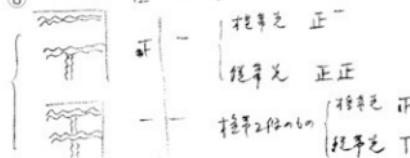
|                               |
|-------------------------------|
| ④ 估价28200元，内17000元为本班。        |
| 核算表：「核算表」<br>「核算表」<br>「核算表」   |
| 下<br>丁 (11月17日)<br>核算表<br>核算表 |
| 9                             |
| 宁海段 3.00.                     |
| 拱北段 2.00.                     |
| ~~~ 1.00.                     |

⑥ 2015-9 西雅圖

## ⑦ 声の音

|     |    |                    |
|-----|----|--------------------|
| 3   | 4m | 7                  |
| 3.5 | 3  |                    |
| 4   | 23 | 100% 2.5m 2.5m     |
| 4.5 | 7  | 14mm 2.5m 2.5m     |
| 5   | 26 | 5mm 2.5m 2.5m 2.5m |
| 5.5 | 6  | 10mm 2.5m 2.5m     |

⑧



資料3～5参照)。ここではそれらのうちから4点を第11表-1～4として示すが、まずは第11表の説明を行い続けて「予報」と再整理の結果による第12表-1～5とを比較検討したい。

第11表-1は調査年次を分けて作られていたものを表としたものであり、55点の山形押型紋口縁部破片をもととして山形紋の条数、口縁部表裏施紋数その他の示されている。

第11表-2は押型紋施紋原体の一周長(回転長)と直径の計測表であり、105点を観察する。

第11表-3は土器の厚さ(器厚)の計測表であり、73点を観察する。

第11表-4は押型紋縦横施紋の先後関係メモである。なおこの他に1964年調査区出土遺物表(昭和42年の出土遺物表は作られていない)等があるが、完成表とはなっていないため掲載はしなかった。

このように第11表-1～4で取り扱われた山形紋施紋破片等の数量から考えて、第1次調査出土土器のほぼ全ての破片を観察された結果に立脚しているといえる。

このメモ類をもとに佐藤が「予報」の土器解説を書いたことは明らかであるが、予報に掲載された個体を除いて観察に用いられた個体の同定は定かではない。ただし口縁部破片は紋様を観察しえる個体が限られており、メモの基準を踏襲しながら再整理を進めることができた。

第11表 1964年・1967年 出土土器佐藤メモ

第11表-1 口縁部破片数と紋様別観察表(佐藤メモ)

| 紋様          |     | 点数 | 裏面あり | 表面のみ | 備考     |
|-------------|-----|----|------|------|--------|
| 条数不明        | '64 | 12 | 2    | 7    | 内面不明3  |
|             | '67 | 8  | 3    | 3    | 内面不明2  |
|             | 計   | 20 | 5    | 10   |        |
| 2条          | '64 | 1  | 1    | 0    |        |
|             | '67 | 4  | 2    | 2    |        |
|             | 計   | 5  | 3    | 2    |        |
| 3条          | '64 | 2  | 2    |      |        |
|             | '67 | 13 | 7    | 6    |        |
|             | 計   | 15 | 9    | 6    |        |
| 4条          | '64 | 4  | 3    | 1    |        |
|             | '67 | 9  | 2    | 7    |        |
|             | 計   | 13 | 5    | 8    |        |
| 5条          | '64 | 0  | 0    | 0    |        |
|             | '67 | 2  | 0    | 2    |        |
|             | 計   | 2  |      | 2    |        |
| 山形紋の合計      |     | 55 | 22   | 28   | 5      |
| 格子目紋        | '64 | 1  | 1    | 0    |        |
|             | '67 | 1  | 0    | 1    | 口縁ナシ2例 |
| 格子目紋合計      |     | 2  | 1    | 1    |        |
| 螺旋状山形紋      | '64 | 2  | 0    | 2    | 口縁ナシ1例 |
|             | '67 | 1  | 0    | 1    | 口縁ナシ3例 |
| 螺旋状山形紋合計    |     | 3  | 0    | 3    |        |
| 特殊山形紋       | '64 | 1  | 0    | 1    | 口縁ナシ1例 |
|             | '67 | 0  | 0    | 0    |        |
| 特殊山形紋合計     |     | 1  | 0    | 1    |        |
| 無紋          | '64 | 9  |      |      |        |
|             | '67 | 12 |      |      |        |
| 無紋合計        |     | 21 |      |      |        |
| 条痕紋<br>(胴部) | '64 | 2  |      |      |        |
|             | '67 | 1  |      |      |        |
| 条痕紋合計       |     | 3  |      |      |        |

第11表-2 押型紋原体(佐藤メモ)

| 一周長    | 直径     |     |
|--------|--------|-----|
| L (cm) | D (mm) | 数量  |
| 1.10   | 35     | 3   |
| 1.15   | 36     | 7   |
| 1.20   | 38     | 13  |
| 1.25   | 40     | 17  |
| 1.30   | 41     | 10  |
| 1.35   | 43     |     |
| 1.40   | 44     | 20  |
| 1.45   | 46     | 13  |
| 1.50   | 48     | 11  |
| 1.55   | 50     | 2   |
| 1.60   | 51     | 5   |
| 1.65   | 52     |     |
| 1.70   | 54     | 3   |
| 1.75   | 55     | 1   |
|        |        | 11  |
|        |        | 105 |

第11表-3 土器の厚さ(佐藤メモ)

| 厚さ(mm) | 数量 |    |
|--------|----|----|
| 3.0    | 1  | 73 |
| 3.5    | 3  |    |
| 4.0    | 23 |    |
| 4.5    | 7  |    |
| 5.0    | 26 |    |
| 5.5    | 6  |    |
| 6.0    | 7  |    |

第11表-4 縦帶・横帶施紋順(佐藤メモ)

|    | 縦帯先 | 横帯先 |    |
|----|-----|-----|----|
| 1帯 | 8   | 2   | 16 |
| 2帯 | 2   | 4   |    |
| 計  | 10  | 6   |    |

## 山形紋の刻み条数（第12表-1）

佐藤メモ（第11表-1）に基づく「予報」では山形紋の刻み条数が確認された口縁部35点をもとに、条数2条5点、3条15点、4条13点、5条2点と報告され、「全体として3条が最も多く、4条がこれに次ぐ」とまとめられている。

今回の第1次、第2次を合計した観察では、第12表-1にみるように口縁部42点をもとに刻み条数2条9点、3条15点、4条15点、5条3点を判別した。佐藤メモと比べ2条の点数にやや差が生じているが同一個体の同定数に関わる差が生じたものと思われ、第2次調査分も加えたことによる差も生じている。刻み条数の最も多い3条と4条は再整理による数値、予報の数値とともに近く、ここにピーグがあるとする「予報」の記述を追認する結果となるものである。

## 山形紋の一一周長と直径（第12表-2）

山形紋原体の刻む山形の形態はジグザグの強いもの、弱いもの、波状に近いもの、そして螺旋状となるものの変化をもつが、予報では「殆どすべて山形の突起は原体の一一周にはば等間隔に2箇」と指摘されている。今回の整理においても「予報」の観察所見を基準に一周長を求め、さらにその数値か

第12表 第1次・第2次調査出土土器観察表

第12表-1 口縁部破片数と紋様別観察表

| 条数              |     | 点数 | I型 | II型 | 備考  |
|-----------------|-----|----|----|-----|-----|
| 条数不明            | 第1次 | 10 | 7  | 3   |     |
|                 | 第2次 | 2  | 1  | 1   |     |
| 2条              | 計   | 12 | 8  | 4   |     |
|                 | 第1次 | 8  | 4  | 4   |     |
| 3条              | 第2次 | 1  | 0  | 1   |     |
|                 | 計   | 9  | 4  | 5   |     |
| 3条              | 第1次 | 12 | 6  | 6   |     |
|                 | 第2次 | 3  | 1  | 2   |     |
| 4条              | 計   | 15 | 7  | 8   |     |
|                 | 第1次 | 12 | 8  | 4   |     |
| 4条              | 第2次 | 3  | 0  | 3   |     |
|                 | 計   | 15 | 8  | 7   |     |
| 5条              | 第1次 | 2  | 2  | 0   |     |
|                 | 第2次 | 1  | 1  | 0   |     |
| 山形紋合計           |     | 3  | 3  | 0   |     |
| 格子目紋            |     | 54 | 30 | 24  |     |
| 格子目紋            | 第1次 | 2  | 1  | 1   | 胸部2 |
|                 | 第2次 | 0  | 0  | 0   | 胸部1 |
| 格子目紋合計          |     | 2  | 1  | 1   |     |
| 第1次・第2次押型紋口縁部合計 |     | 56 | 31 | 25  |     |
| 結節回転紋           | 第1次 | 2  | 2  | 0   | 胸部6 |
|                 | 第2次 | 2  | 1  | 1   | 胸部4 |
| 結節回転紋合計         |     | 4  | 3  | 1   |     |
| 無紋              | 第1次 | 14 |    |     |     |
|                 | 第2次 | 10 |    |     |     |
| 無紋合計            |     | 24 |    |     |     |
| 条痕紋(胸部)         | 第1次 | 1  |    |     |     |
|                 | 第2次 | 0  |    |     |     |
| 条痕紋合計           |     | 1  |    |     |     |

第12表-2 山形紋原体の直径表  
(第1次91+第2次17)

| 一一周長(mm) | 直径(mm) | 数量  |    |
|----------|--------|-----|----|
| 11.0     | 3.5    | 11  |    |
| 11.5     | 3.6    | 5   |    |
| 12.0     | 3.8    | 16  | 32 |
| 12.5     | 4.0    | 0   |    |
| 13.0     | 4.1    | 29  |    |
| 13.5     | 4.3    | 2   |    |
| 14.0     | 4.4    | 18  |    |
| 14.5     | 4.6    | 3   |    |
| 15.0     | 4.8    | 11  | 63 |
| 15.5     | 5.0    | 0   |    |
| 16.0     | 5.1    | 9   |    |
| 16.5     | 5.2    | 1   |    |
| 17.0     | 5.4    | 2   |    |
| 17.5     | 5.5    | 1   | 13 |
|          |        | 108 |    |

第12表-3 山形紋の原体長  
(第1次82+第2次18)

| 原体長(mm) | 数量 |     |
|---------|----|-----|
| 9.0     | 1  |     |
| 10.0    | 3  |     |
| 11.0    | 12 |     |
| 12.0    | 12 |     |
| 13.0    | 20 |     |
| 13.5    | 2  |     |
| 14.0    | 16 |     |
| 15.0    | 15 |     |
| 15.5    | 1  |     |
| 16.0    | 12 |     |
| 17.0    | 2  |     |
| 18.0    | 4  | 100 |

ら直径を求めた。

押型紋原体の直径について予報では「直径は3.5ないし5.5mm程度。4mm台のものが最も多く」と報告されており、佐藤メモの第11表-2に予報で述べられた数値をみることができる。105点をもとに原体直径4mm台が71点と最も多く、3.5mm~3.8mmがそれに続く23点となっている。

今回の整理では第12表-2にみると、山形紋108点をもとに計測した結果、原体直径の範囲は「予報」と同じく3.5mm~5.5mmの中に求められ、最多は4mm台の63点、次いで3.5mm~3.8mmの32点となり第11表-2と傾向は一致するものの数値に差が生じている。この差はおそらく一周長のデバイダーによる測定の微妙な差によるものと考えられるが、4mm台を最多とし、3.5mm~3.8mm台がこれに続くという数値は沢遺跡押型紋土器原体の直径値として再確認された。

#### 山形紋の原体長（第12表-3）

山形紋の原体長について予報では「原体の長さは9ないし17mm。10mm以下と16mm以上は少ない。大体11ないし15mmで指一本の幅に適当している」と報告されており、指一本で回転施紋を行った状況を想定されたのであった。この予報で示された数値を記すメモは残されていないが一周長、直径を計測した破片類から導き出されたものと考えて間違いないであろう。

今回の整理では第12表-3において100点の破片から数値を求めた。その結果、原体長は9mm~18mmにわたり「予報」の記述とほぼ一致し、特に11mm~15mmの範囲に集中することが明らかである。中でも13mm~15mmに主体があり、「予報」でいうところの指一本の幅を支持するものといえよう。

#### 土器の厚さ（第12表-4）

佐藤メモ第11表-3では73点を計測しており、4mm~5mmまでで56点、全体の76.7%を占める。これをもとに予報では「器壁は薄く、3ないし6mm。4mmに達しないものは少なく、5mmを越えるものも多くはない。」と報告されている。

今回の整理では第12表-4にみると、148点を計測し、4mm~5mmまでが110点を数え全体の74.3%を占め、第11表-3にみる数値と比率はほぼ一致することが明らかである。なお5mm厚が最多になることは佐藤メモと今回の計測とで一致するが、点数（比率）に差が生じている。計測方法の微妙な差が出たものと思われる。結論として沢遺跡の押型紋土器の厚さは4mm~5mmに主体があり、器壁の薄い土器群であることが再確認された。

第12表-4 山形紋土器の厚さ  
(第1次120 + 第2次28)

| 厚さ (mm) | 数量 |     |
|---------|----|-----|
| 3.0     | 2  |     |
| 3.5     | 1  |     |
| 4.0     | 19 |     |
| 4.5     | 29 |     |
| 5.0     | 62 |     |
| 5.5     | 19 |     |
| 6.0     | 16 | 148 |

#### 縦位・横位施紋の関係について（第11表-4、第12表-5、第13表-1）

「予報」で指摘された横帯と縦帯との関係、そして施紋の先後関係について検討したいが、まず山形押型紋の横位1~2带施紋と縦位施紋のあり方について第13表-1をもとにまとめておく。

I・II型あわせて第1横帯から縦位施紋が確実あるいは確実と考えられる拓本破片（1帶a・a'・2帶b種）は、第1次調査分で13点、第2次分で2点の合計15点があり、同様に第2横帯から縦位施紋が起こると考えられる拓本破片（2帶a種）は第1次分9点がある。ただしこれらの数量には紋接点の残存状態によって縦位・横位施紋の先後関係が不明なものも含まれている。

また口縁部第1横帯の施紋は認められるが、縦帯施紋が確認できず、当然第2横帯の有無も不明な拓本破片は第1次25点、第2次7点の合計32点あり、さらに横帯施紋部分のみ残存する破片は第1次6

点、第2次2点の合計8点あるが、口縁下か頸胴部かの判定が難しく、第1横帯か第2横帯かの確認はできなかった。このように横帯施紋部が残存するものの縦帯施紋との関係が不明となる拓本破片は合計40点もの多くを数える。

以上、第I・第II横帯施紋と縦帯施紋の関係を整理をしたうえで、I・II型を含め口縁部第1横帯に直交する縦帯施紋（1帯a・a'・b種）例は14点あり、第2横帯から起る縦帯施紋口縁部（2帯a種）は10点であり、横位1帯施紋がやや多いことを示している。

次ぎに横帯とそれに直交する縦帯の施紋順、即ち施紋の先後関係についてまとめておきたい。

第11表-4の佐藤メモに見るように「予報」では縦帯が先に施紋されるもの（縦帯先）が10点、横帯が先に施紋されるもの（横帯先）が6点あると報告された。

第12表-5 縦帯・横帯施紋順

|         | 縦帯先 |     | 横帯先 |     | 18 |
|---------|-----|-----|-----|-----|----|
|         | 第1次 | 第2次 | 第1次 | 第2次 |    |
| 1帯      | 3   |     | 3   | 1   |    |
| 2帯      | 2   | 1   | 3   |     |    |
| 1 or 2帯 | 2   |     | 2   | 1   |    |
| 計       | 7   | 1   | 8   | 2   |    |

再整理の結果では第12表-5にみるように第1次分の縦帯先が7点、横帯先が8点と判別され、予報の数値と異なった結果となった。「予報」の観察点数は16点、再整理の第1次分では15点と数値は近く、ほぼ同一の資料をもって観察されたものと考えられるが、直交部の重複状態から切り合

い関係を観察する微妙な判別の差と、個体分類作業による判別点数の差異などに起因していると考え

ることができよう。

上記の検討を経て、第2次調査分を加えた再整理結果の第12表-5をもってまとめとすれば、縦帯先を示す例は合計8点、横帯先を示す例は10点となる。僅かに横帯が先に施紋されるものが多い結果となるが、前述の交点の不明な横帯例36点の存在を考慮すると縦帯・横帯施紋の先後関係はほぼ等量と考えることができ、一方に偏るという施紋上の微候は認められないと結論できるであろう。

#### (4) 出土土器・土製品のまとめ

##### 「沢式土器」の組成

出土遺物報告の冒頭19ページにおいて示した第1表では、第1次・第2次調査出土土器群の総数を示し、土器分類を理解するための全体量を提示したものである。本考察編においても再整理の結果をふまえて、A群（山形紋）、B群（格子目紋）、C群（結節回転紋）、条痕紋、無紋より成る「沢式」土器の組成と全体数量に関して改めてまとめておくために第1表を以下に再掲示し記述を進めることと

沢遺跡出土土器一覧表（第1表を再掲）

|          | 拓本分       |          | 未掲載分      |          | 合計        |
|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|
|          | 第1次       | 第2次      | 第1次       | 第2次      |           |
| 山形紋      | 132（口縁49） | 27（口縁9）  | 178（口縁12） | 73（口縁14） | 411（口縁85） |
| 格子目紋     | 4（口縁2）    | 1        | 1         | 0        | 6（口縁2）    |
| 山形紋+格子目紋 |           | 1（口縁1）   |           |          |           |
| 結節回転紋    | 9（口縁3）    | 6（口縁2）   | 9         | 7        | 31（口縁5）   |
| 条痕紋      | 3         |          |           |          | 3         |
| 無紋土器     | 26（口縁14）  | 20（口縁10） | 3（口縁3）    | 8（口縁8）   | 57（口縁35）  |
| 底部先端     | 3         |          |           |          | 3         |
| 無紋胴部     |           |          | 1019      | 222      | 1241      |
|          | 177       | 55       | 1210      | 310      | 1752      |

したい。

第1表にみるようすに第1次調査出土土器破片の総数は1,387点であり、このうち無紋胴部が1,019点ある。無紋胴部以下の破片は押型紋土器および無紋土器そして僅かではあるが結節回転紋土器の無紋部分破片が混在しているものあり、さらに同一個体破片も相当数含まれている結果の数量と考えられるが、胎土・色調・器厚が類似しているものが多く、個体分類を行うことは困難であった。

また数は少ないが無紋部幅が4cm以上聞く破片は無紋土器胴部として分別したが、多くの中へ小無紋破片はA～C群あるいは無紋土器の胴部として分別することはできなかった。

第2次調査出土土器破片の総数は365点であり、第1次調査出土量の約1/3となる。このうち無紋の胴部以下の破片は222点であるが、上述のように群別および個体分類は行えなかつた。

口縁部破片を手がかりとしてみると、帯状施紋の「沢式」山形押型紋が第1次61点、第2次24点を数え、合計85点という最大数量を占める。なお山形紋口縁部の数からも、第2次の24点という出土量は第1次の約1/3であることがわかる。

格子目押型紋土器の出土量は極めて少なく、第1次・第2次調査合計で4あるいは5個体であり、山形紋との併用1点を加えても5あるいは6個体(口縁部3個体)である。なお山形紋と格子目紋という異種原体併用例かつ異個体間に用いた格子目紋同一原体例の出土からも、「沢式」土器における山形紋と格子目紋の同時性が再認識されるのである。

結節回転紋土器は同一個体の可能性があるものを含めて総破片数31点、口縁部では5個体を数える。第2次調査では大破片も出土しており、「沢式」土器の組成としては山形押型紋に次ぐ出土量となる。この結節回転紋土器は第1次調査において表面のみ施紋するI型の0帶a種と1帶a種が出上していたが、第2次調査において口縁裏に施紋するII型の存在が明らかとなった。その結果、結節回転紋土器は沢式山形紋土器と紋様構成がほぼ一致し、「沢式」土器における繩紋使用の特徴的な組成を示す一群となることがさらに明確となった。

また燃紐結節部の回転によるS字状、Z字状の圧痕紋は、山形押型紋の山形・シグザグ状の紋様と同様の効果を模倣した可能性を考えられよう。

無紋土器について「予報」では「沢式」土器の4種に分けられる土器群の一つとして位置づけたうえで、押型紋土器の約1/3の量を占めると推定された。

再整理結果の第1表にみるようすに、第1次調査分の拓本に用いることのできた(微小破片を除いた)口縁部個体を基準としてみた場合、押型紋口縁部51個体(49+2)に対して無紋土器口縁部14個体は27%の比率となる。第2次調査の拓本分を合計すると押型紋口縁部61個体(49+10+2)に対して無紋土器口縁部24個体は39%の比率となる。胴部を含めた個体分類の結果ではないので確定は難しいが、押型紋土器の1/3前後の比率をもって無紋土器が存在することが再確認できたといえるであろう。

この無紋土器群について「予報」では特徴その他について省略されているが、今回出土土器の観察において述べたように、無紋土器の器形、器厚、胎土、色調、そして器面の整形等は、「沢式」押型紋土器の器体の特徴と同一のあり方を示すことが特徴といえ、押型紋が施紋されない無紋地の土器と形容することができる。

なお口端上を平坦に作出するものと丸頭状の2種があるが、口端上に施紋を行っていない状態の2種の作りとなるもので、前者は「沢式」押型紋土器の口端上面が平坦に作出されているものと同一であり、丸頭状のものは口端上に押型紋を施紋することにより、口端前面に粘土がはみ出た状態を示す

押型紋口縁のあり方の素形とも見ることができる。この口端上に施紋をしない特徴が無紋土器口縁部を分類するうえでの目安ともなった。

さらに無紋土器の口縁部にも山形の小突起を作出する例が認められる。押型紋土器口縁部に3例あることがすでに「予報」で指摘されていることともあいまって、「沢式」土器における無紋土器と押型紋土器の共時性を示す証左となるものといえる。

#### I型・II型土器のあり方（第13表-1・2）

I型（表面施紋）・II型（裏面施紋）の数量をもとにあり方（傾向性）についてまとめておきたい。

第13表-1にみるように山形押型紋I型口縁部は、第1次調査27点、第2次調査3点の計30点を数え、II型口縁部は第1次調査22点、第2次調査7点の計29点を数え、I・II型はほぼ同数となる。

これに第13表-2の未掲載分のうちI・II型判定不明口縁部小破片10点を除いたI型13点、II型3点を加えると、I型合計43点、II型合計32点となり、I型が57%、II型が43%という比率となり、僅かにI型が過半を占めるが両者拮抗しているともいえるであろう。

沢式土器出土遺跡においてI型とII型の比率が偏る例がみられることをもとに、I型とII型のあり方に時間差を想定する考えもあるが、沢遺跡での確実な個体分類にもとづいた点数の比較からは両者の数量はほぼ拮抗し、大きな偏りは認められないことが明らかとなった。また帶状紋様の構成をみた場合、数量的に最も多い0帯～2帯a種の主要紋様はI・II型両者にはほぼ同数存在していることを重視する必要があろう。さらに数少ない格子目紋、結節回転紋をみると、格子目紋I帶a種はI・II型両者に存在し、結節回転紋0帶a種もI・II型に存在するというあり方を示し、I型・II型の同時性のみならず沢遺跡土器群の同時一括性を考える根拠となりえるものといえる。

なお結節回転紋については、第1次調査において内面施紋の出土がみられないことが指摘されてい

第13表-1 第1次・第2次調査 山形押型紋分類表（拓本分）

| I型口縁部<br>(1片のみ頸部)   | 個体数   |       | II型口縁部      | 個体数 |     |     |
|---------------------|-------|-------|-------------|-----|-----|-----|
|                     | 第1次   | 第2次   |             | 第1次 | 第2次 |     |
| I型0帶a種              | 1     | 1     | II型0帶a種     | 2   |     |     |
| I型1帶a種              | 2     | 1     | II型1帶a種     | 3   | 1   |     |
| I型1帶a種              | 6     |       |             |     |     |     |
| I型2帶a種              | 3     |       | II型2帶a種     | 6   |     |     |
| I型2帶b種<br>(口縁1+頸部1) | 1(+1) |       |             |     |     |     |
| I型1・2帶a・b種          | 14    | 1     | II型1・2帶a・b種 | 11  | 6   |     |
| 口縁部計                | 27    | 3     |             | 22  | 7   | 59  |
| 胴部～底部（拓本分）          | 第1次83 | 第2次18 |             |     |     | 101 |
|                     |       |       | 山形押型紋（拓本分）  | 総計  | 160 |     |

第13表-2 第1次・第2次調査 山形押型紋分類表（未掲載分）

| I・II型（口縁部） | 個体数 |     |     |
|------------|-----|-----|-----|
|            | 第1次 | 第2次 |     |
| I型0帶a種     | 1   |     |     |
| I型         | 4   | 8   |     |
| II型        | 1   | 2   |     |
| I・II型不明口縁部 | 7   | 3   |     |
| 口縁部計       | 12  | 14  | 26  |
| 胴部破片       | 166 | 59  | 225 |

るが、第2次調査において内面施紋例が出土したことによりⅠ・Ⅱ型共通の紋様であることが明らかとなった。

#### 同一原体施紋・異原体施紋土器

「予報」によれば山形押型紋土器で同一原体をもって別個体に施紋した例は4種(例)見つかっており、いずれも2個体間に認められ3個体にわたるものはないと説明されている。

再整理の結果、この別個体間同一原体例は山形紋で3例、格子目紋で2例の合計5例であった。山形紋では「予報」の4例と比べ1例少ない結果となったが、同一原体の認定は極めて繊細な観察と比較が必要であり、同一原体の可能性が見られるものの確定できなかったものは除外した。

異原体施紋例は第1次調査資料では認ることはできず、第2次調査において2例が出土した。第20図2は表裏面(Ⅱ型)に山形紋を施し、口唇上には格子目紋を施すものである。前述したように山形紋施紋と格子目紋施紋の同時性を示すものとしても重要な破片である(図版23-2参照)。

第21図24の胸部破片には縱位の山形押型紋が施紋され、その縱位施文帶を起点として斜め方向へ2条の平行する細沈線紋が施される(図版23-24参照)。細沈線は調整痕等の偶発的な痕跡ではなく平行沈線紋を意図して施紋したものと考えられ、今後その出自系統が検討されなければならない。なお結節回転紋土器、条痕紋土器についても同様に今後その出自系統が検討課題となる。

#### 土製環飾

この遺物について「予報」では「断面形は中国新石器時代の環飾に類似するものがある」と指摘された。佐藤は沢遺跡調査と同時期の昭和39年に、北海道女満別豊里遺跡出土の石刃鏃と環飾(石製)について論考をまとめており(佐藤1964)、中国の環飾を調べていた時期にこの沢遺跡出土の小さな類品を見い出し、土製環飾と分類されたものと考えられよう。

今回改めて本遺物の観察を行った結果、非常に小さい破片ではあるが、形態を復元すれば確かに中国新石器時代の陶环、石环の中に形態が類似するものを認めることができ、環飾とみる「予報」の見解を受け止めておきたい。

ただしその後の調査、研究において、押型紋土器期における類例(特に土製)の存在は知られていないため、本遺物に関わる研究の進展もみられない状況となっている。土器の口縁部等に貼付された突起等も考慮に入れる必要があるかもしれないが、本報告では改めてこの種の遺物の存在について再度注意を喚起しておきたい。

#### (5) 1号住居址の構造

1号住居址については第3章第3節において規模・形態・構造等を予報にもとづいて記述したが、本項において再度詳しく述べてみたい。

1967年当時としては縄紋早期の貴重な調査例となる1号住居址は、残存度も良かったことも幸いして佐藤は、柱穴等の配置から家屋の形態にまでおよぶ考察を加えている。

今回の整理に際して飛驒市教育委員会保管資料の中にこの住居址の上屋構造に関する佐藤の手書きスケッチが存在することを知られ、予報の記述をほぼ正確に解釈することが可能となった。以下「予報」における佐藤の見解を再構成したいと思う。

佐藤原資料-4は飛驒市に残されていた1号住居址平面実測図の欄外の余白に鉛筆で書かれたスケッチ画であり、平面全測図をしながら考えるところを小さくメモした観がある。誰かに(例えば大野

に)自説を説明しながら描いた可能性もある。

注目されるのは中央の平面図で、主柱をつなぐ棟と中間柱をつなぐ隅棟の線が描かれ、入口付近の中間柱内側をつなぐ線、上方には窓の二穴が見られ、「予報」の記述の下書きのようなものとみることができ。また垂木は方錐形にかけられており、左下側には屋根の形が描かれた方形プランが見える。右下には主柱と中間柱と隅棟の立体図があり、入口施設の柱が描かれるが平面図の中間柱の配列とは多少異っており、部分的なイメージの図かもしれない。

第31図は佐藤のスケッチ図と「予報」の記述をもとに、1号住居址平面図に棟柱、隅棟柱ほかの推定線を記入し理解の参考とするものである。

主柱穴はP17・P18の2本。径は8cmおよび9cmで他の柱穴と大差はないが深さは側柱より深い。このように柱はすべて細木を用いたとみられる。主柱上には棟柱を渡す。

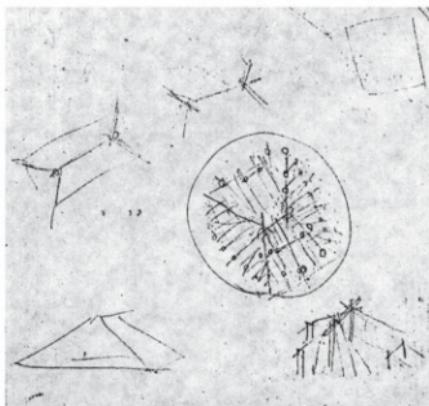
側柱穴は壁に沿って内側に並ぶ。北半分では規則的にみられ、東北側では直線的列となる。この東北側の側柱穴列と、西北側の壁が直線的であることから佐藤は花輪台貝塚の住居例を取りあげ(甲野・吉田1949)、方形家屋の伝統に従う部分があることを指摘する。

さて主柱穴と側柱穴列の間には中間柱穴を認め、西北部のP16、東北部では一对となるP22とP23、東南部でも一对となるP

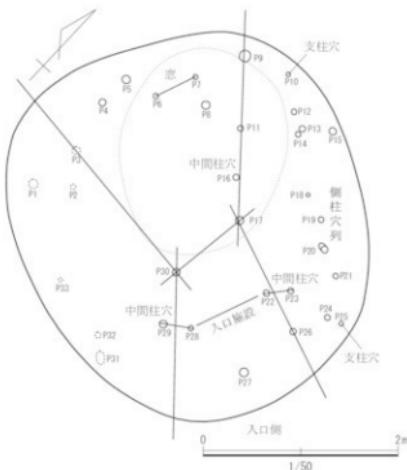
28とP29の3ヶ所を考えられた。西南部では中間柱穴、側柱穴ともに明瞭ではないが、南側は基盤に角礫を多く含むため穴を穿たない柱が多かったことを想定されている。

以上の柱穴配置から佐藤はほぼ家屋の構造を示しているものとし、「主柱上に棟を渡し、主柱から中間の柱を支えとして四方の隅棟を下ろし、垂木をかけ、これを側柱と側柱を連ねる横木で受ける」という骨組」を推定されたのである。なお垂木の先は堅穴外に伸びていたことも推定している。

屋根は「円錐形よりもむしろ方錐形ないし四柱造に近かった」ことを想定し、入口は東南にあり一



佐藤原資料-4 1号住居址佐藤スケッチ図



第31図 1号住居址上屋想定図

種の平入りとする。そして入口部の両側には中間柱が一対ずつ（P22・23、P28・29）あり、各対の内側の柱（P22とP28）は入口との関係も考える。

そしてこの入口の反対側にあたる北西側の柱穴（P6とP7）は窓との関係を考えられたのである。縄文時代の竪穴住居址の復元研究の中で、住居の窓に言及されたのは後にも先にもこの佐藤の指摘のみではないかと思われるが、佐藤の北方文化研究の中で得た何等かの根拠があったものと考えられる。

炉は住居址内には認められないが、火熱を受けた大形礫が各層中にみられることから、屋外炉の可能性を指摘している。

なお1号住居址の項でも述べたように、住居址セクション図にみられる住居中央部の凹みが、草創期末～早期の竪穴住居中央にみられる掘り込み（今村の灰床炉）との関連が注意されるところである（今村 1985）。図版4の1号住居址完掘状態の床面中央付近を良くみると、浅い凹みらしき箇所を認めることができるが、現在において特定することはできない。しかし同時に属す旧河合村（現飛騨市）下田遺跡8号住居址（大江 1987）には住居中央の掘り込みが検出されていることを考えると、沢遺跡1号住居址の場合にもその可能性を考える必要があろう。

予報では「この遺跡の範囲に住居址が一つだけ存在したとは考えにくい」といわれる。その予測のとおり昭和61年の第2次調査において、1号住居址から西へ僅か3mの間隔を置いて2号住居址が発掘されたのであった。

2号住居址は1号住居址よりもひとまわり大きな規模をもち、プランは円形基調で側柱穴も北～東壁に沿って円形の配列となる。1号住居址と比べプラン、側柱穴配置に差が認められ、特に主柱穴が1本のみ、中間柱穴が認められない点が大きな差となる。

その一方、2軒は谷に向かって並列する形で存在し規模も近い。そして山側に壁をもち南側に開くという占地と構築の共通性は重視すべき点であり、「予報」で示唆された地盤等の性質から住居南半部の柱は穴を穿たない柱であった可能性を考慮のうえ片屋根のような構造の可能性もふくめ、2軒がほぼ同時に存在していたことが推測されるのである。

#### (6) 出土石器について

沢遺跡の2次にわたる調査では、合計574点の石器が出土した。これらの石器を器種別に分類するにあたっては、「予報」における分類基準を基本的に踏襲したが、器種名については一部現在の名称にあてはめて記述することとした。器種別の内訳は、石槍1点、石鎌6点、クサビ形石器53点、石錐2点、削器34点、磨製石斧3点、打製石斧1点、磨石11点、凹石4点、敲石3点、礫器3点、砥石16点、剥片類433点、石核3点、原石1点であり、遺構およびグリッド別の石器組成表を第5表に示した。

この「予報」の石器の記述では、大きく「a粗製石器」と「b打製石器」に分類されている。粗製石器では、礫素材の石器として磨石・凹石・敲石が認められたが、点数的にはそれほど多くはない。しかしながら、磨石では器体の側面に粗い研磨による磨面が認められる所謂「特殊磨石」が確認されている。第1次調査では1号住居址から3点、包含層からは4点の出土が確認され、押型紋期に伴う特徴的な石器といえる。また、2号住居址から検出された台石としての機能を合わせもつ磨石（第29図2）の出土も注目される。なお、予報では「磨石が最も著しく、～この種の磨石は長野県の押型紋遺跡に出土することが知られているが、大丸遺跡の稲荷台式に伴うものに類似するから、草創期以来の

伝統とみられる。」とされ、凹みをもつ特殊磨石については「この凹みは使用時の指かけと考えられる。樅ノ湖、大川、ひじ山その他に類品がある。」との指摘がある。

砥石は、全体で16点の出土が認められたが、いずれも部分破片であった。小形板状の砥石と考えられるもの（第28図70～72）以外では、扁平石皿の破片も含まれている可能性がある。また、包含層から出土した有溝砥石（第28図62）は予報では「砂岩の平坦な磨面に幅三ないし五厘の溝のあるものが一例ある。砥石として用いられたものであろう。」と記述されている。溝は3条認められ有溝砥石と分類されるが、佐藤は砥石としている点が注意される。予報をまとめたこの時期、山内清男による「矢柄研磨器」の研究が進行中であり、当然佐藤も各地の有溝砥石の存在は熟知していたであろうが、山内の研究展開に配慮した可能性がある。

打製石器では、石鎚は点数的には少ないものの、押型紋土器に伴う可能性がある3例（第25図2～4）は形状が類似するものであり、裏面に素材面を残して周辺部を中心とした加工により凹基無茎鎚を呈する石鎚という特徴をもつ。第25図5については「予報」では平面形が長三角形の凹基であり、両側縁に小突起をもつことから時期が異なる可能性が指摘されている。

削器は素材や大きさによって大きく砂岩を中心とした大形の剥片を素材としたものと、下呂石やチャートを中心とした小形の剥片を素材としたものが認められた。特に大形削器としたものでは包含層から出土した部分的な研磨痕が観察される削器（第26図44）の出土が注目される。また、小形の削器について、予報では「比較的多く、二三の種類がある。これらは押型紋の施紋原体を工作するのに用いられたかと疑われる。有凹削器は剥片の縁に小さいノッチをもつしばしぶごく小型の剥片が利用される。ノッチの大きさは施紋具の直径に適合するように見える。押型紋の圧痕の溝底にみられる垂直の条痕は、これらの削器の擦痕によるものではあるまいか。」との非常に繊細な土器と石器観察からの記述がなされ、押型紋原体加工工具に関する所見として改めて注目すべきものといえる。

クサビ形石器は合計で53点が確認された。定形石器の少ない第2次調査でも計20点のうち7点が検出されており、削器とともに主要な石器となっている。本器種は、基本的には両極打法による二次加工をもつ石器を一括したが、「予報」では小形剥片を素材としたもの（第25図13）と石核を利用したもの（第26図31）があるとされ、「石核には盤状のものと、曾根形及びこれに類するものとの2種類があるが、後者が圧倒的に多い。剥片にも盤状石核からえられる石刃に近い細長なものとの両種があり、いずれも石器の製作に用いられること前記の通りである。曾根形石核は曾根、花ノ湖において爪形紋土器に伴い、また押型紋土器に伴うものとして櫛沢の例が知られているが、沢遺跡におけるごとく、この時期に多量に伴うことは注目すべき事であろう。」と指摘されている。

剥片類としては合計313点が出土したが、このうちの3点が黒曜石であった。それ以外の剥片類は「予報」でも指摘されているようにその大きさによって大きく二分される。主に砂岩を中心とした石材では大形の剥片が作出されており、そのまま刃器として使用されたり、削器のb類とした大形削器の素材として作出されたものと考えられる。一方で下呂石やチャートを中心とした剥片は、全体的に小形のものが多く認められており、削器のa類とした小形削器を含む剥片素材の定形石器の素材として作出されたものと考えられる。また、小形剥片の中には、打面が潰れたり対向する剥離痕をもつ剥片が含まれており、これらの剥片はクサビ形石器の両極打法によって作出されたものといえよう。

## 出土石器

|       | 形態<br>層位 | 種類 | 凹凸 | 縫合 | 鉄石 | 石核 | 刃文 | 磨耗 | 石鏽 | 有無? | Sierr<br>spur | Cone<br>Gouge<br>tongue | どん | reduc-<br>ed<br>blade | core | plate | blade | tip |
|-------|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|---------------|-------------------------|----|-----------------------|------|-------|-------|-----|
| 基盤    |          |    |    |    |    |    |    | 2  | 1  | /   | /             | /                       | 10 | 22                    | 15   | 5     | 3     |     |
| A2    | 3        |    |    |    |    |    |    |    |    | /   |               |                         | 2  | 6                     | 8    | 5     | 6     |     |
| AII   | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 3  | 4                     | 5    | 5     | 5     |     |
| AI    | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 1  | 2                     | 3    | 3     | 3     |     |
| AV    | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 5  | 2                     | 5    | 5     | 5     |     |
| AVI   | 3        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 2  | 3                     | 3    | 3     | 3     |     |
| AVII  | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 3  | 2                     | 3    | 3     | 3     |     |
| AVIII | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 2  | 3                     | 3    | 3     | 3     |     |
| AVIX  | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 1  | 1                     | 1    | 1     | 1     |     |
| AVII  | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 3  | 2                     | 3    | 3     | 3     |     |
| AVIII | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 1  | 1                     | 1    | 1     | 1     |     |
| AVIX  | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 2  | 3                     | 3    | 3     | 3     |     |
| AVX   | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 3  | 2                     | 3    | 3     | 3     |     |
| B2    | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 3  | 2                     | 3    | 3     | 3     |     |
| B2    | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 2  | 1                     | 4    | 1     | 1     |     |
| C1    | 2        |    |    |    |    |    |    |    |    |     |               |                         | 6  | 1                     | 5    | 5     | 5     |     |
| 計     | 2        | 2  | 1  | 1  | 1  | 2  | 1  | 1  | 3  | 2   | 1             | 4                       | 1  | 3                     | 5    | 26    | 98    | 24  |
| 計     | 2        | 2  | 1  | 1  | 1  | 2  | 1  | 1  | 3  | 2   | 1             | 4                       | 1  | 3                     | 5    | 26    | 98    | 24  |

| 正直T | 22 | 基盤 | 円錐形動 | 斜面形動 | U形動 | 複数動 | 動文形動 | 石器    | 円錐形石 | 斜面形石 | U形石 | 複数石 | 動文形石 |
|-----|----|----|------|------|-----|-----|------|-------|------|------|-----|-----|------|
| 1   | 正  | 6  |      |      |     |     |      | 1     |      |      |     |     |      |
| A-I | 2  |    |      |      |     |     |      | AVII  | 2    |      |     |     |      |
| 3   | T  | 2  |      |      |     |     |      | 3     | -    | 1    |     |     |      |
| 1   | 正  | 4  |      |      |     |     |      | 4     | -    | 1    |     |     |      |
| AII | 2  | -  | 1    |      |     |     |      | AVIII | 2    |      |     |     |      |
| 3   | -  | 1  |      |      |     |     |      | 3     |      |      |     |     |      |
| 6   | 正  | 5  |      |      |     |     |      | 4     |      |      |     |     |      |
| AII | 2  |    |      |      |     |     |      | AVIX  | 2    |      |     |     |      |
| 3   |    |    |      |      |     |     |      | 3     |      |      |     |     |      |
| 1   | T  | 2  |      |      |     |     |      | 1     | 正    | 5    |     |     |      |
| AV  | 2  | -  | 1    |      |     |     |      | 1     | 正    | 5    |     |     |      |
| 3   | 正  | 4  | 1    |      |     |     |      | 1     | 正    | 5    |     |     |      |
| 1   | T  | 3  |      |      |     |     |      | 1     | 正    | 5    |     |     |      |
| AV  | 2  |    |      |      |     |     |      | 1     | 正    | 5    |     |     |      |
| 3   | T  | 2  |      |      |     |     |      | 3     | T    | 2    |     |     |      |
| 1   | T  | 3  |      |      |     |     |      | 1     | 正    | 5    |     |     |      |
| AV  | 2  |    |      |      |     |     |      | 1     | 正    | 5    |     |     |      |
| 3   | -  | 1  |      |      |     |     |      | 3     | 正    | 5    |     |     |      |
| 1   | 正  | 6  |      |      |     |     |      | 1     | 正    | 6    |     |     |      |
| C.I | 2  |    |      |      |     |     |      | 3     |      |      |     |     |      |

## 第2節 沢式土器の型式学的検討

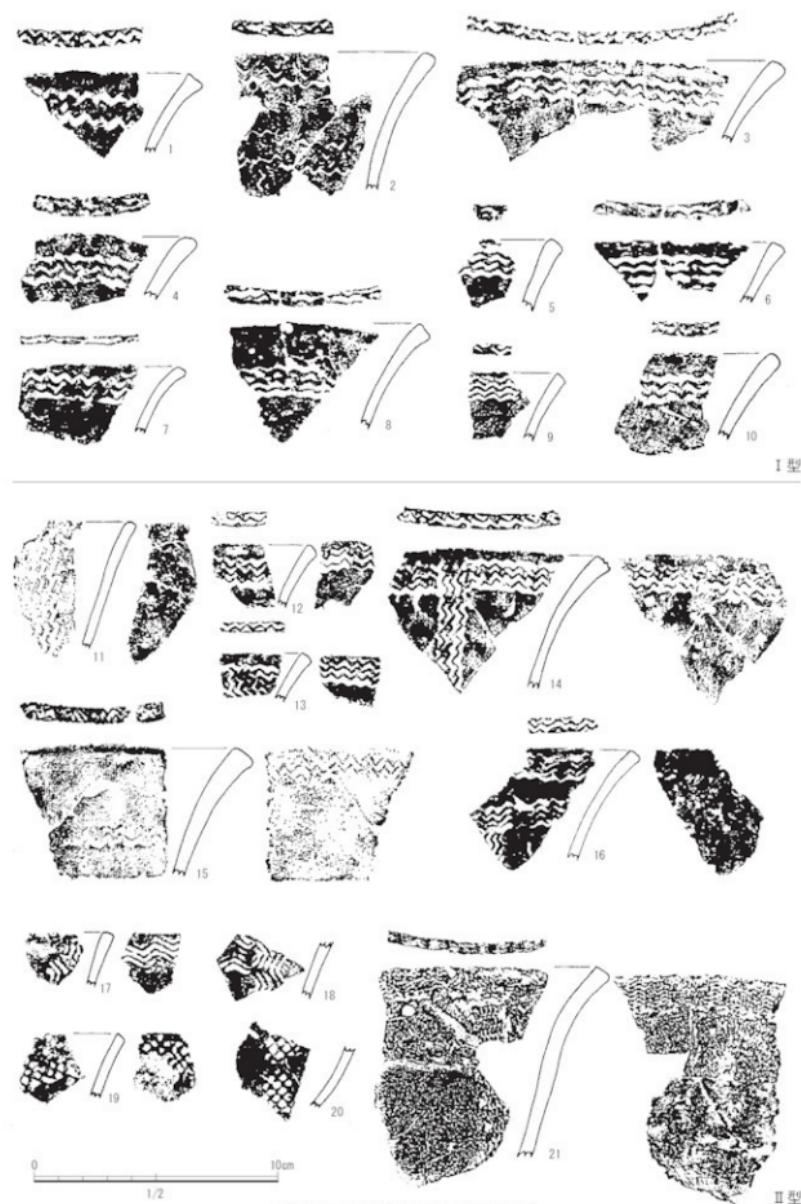
1967年の佐藤編年から半世紀を経た今日、当時の押型紋期の遺跡数から較べて、格段に増加している。澤式の関連資料も飛驒を中心に隣接する越中・信州に広がり、北関東の西鹿田中島遺跡(群馬県)、南関東の東田八幡遺跡(神奈川県)にまで分布している。西日本のネガティヴ押型紋においても、大川・神宮寺式のほか大鼻式や桐山和田式の新型式が明らかになった。こうした標式資料となるべき重要な押型紋期の遺跡も各地で発掘されるようになったが、東・西の押型紋をどのように組み立て、位置づけるかという課題は、1960年代からさして進捗したとはいえない。

資料は増加し、多様な押型紋の実体が明らかになってきたものの、更に押型紋土器の編年は混迷の度合いを深めている。佐藤が提示した二系統説と西のネガティヴ押型紋を起源とする一系統説との相異なる見解は、未だ大きな対立軸となっている。今では一系統説が通説化しつつあるようにみられるが、佐藤が精緻な型式学から検証した編年観と系統観を型式学的に論破するまでには至っていない。ここでは二系統論の立場から、今日的観点を踏まえ澤式の実体を検証していきたい。

**飛驒の澤式** 沢遺跡発掘調査時における飛驒の比較資料はひじ山遺跡の押型紋であった。現在、ひじ山遺跡の押型紋は異形押型紋を含む細久保式段階のものであり、沢→ひじ山とする佐藤の変遷觀は正しい。その後、黒鉛混入の帯状押型紋は沢遺跡はじめ、宮ノ前遺跡・下田遺跡・西田遺跡・牛垣内遺跡・はつや遺跡・中道遺跡など30数ヶ所以上の遺跡が知られるようになっている。まずは澤式の実体を検証するために、はつや遺跡の資料と比較することからはじめよう。はつや遺跡の押型紋は澤式段階のものと梢円紋を含む細久保式段階のものを若干含んでいる。そのため計測値など、沢遺跡の数値と若干異なっている(第32図、第14表)。

はつや遺跡の澤式は押型紋(山形紋・格子目紋)・魚骨紋・無紋の3種である。種別の出土比率は山形紋が主体である。無紋の比率は総数で60%を越えるが、帯状構成の無紋部も含んでおり、口縁部破片数や個体別でみると、沢遺跡と同様、三分の一程度であろう。沢遺跡でみられた結節回転紋・条痕紋はない。また螺旋状山形紋は見当たらない。替わりに魚骨回転紋がある。施紋は同一個体・同一原体が原則で、異なる原体(異種原体)で施紋する例はない。大半は口唇部には施紋する。口縁内面に施紋しないもの(I型)とするもの(II型)があり、前者のI型がやや多い。回転施紋(押型紋・魚骨紋)の帯状構成の主体は一帯型(I型1帶a・a'種、I型2帶a種)と二帯型(II型1帶a・a'・b種)、僅かに縦帯のみ縦帯型(II型0帶a種)がある。II型1帶b種の帯状構成は、僅かに中道遺跡の格子目押型紋に類例がある。沢遺跡には縦帯型のI型0帶a種と口縁内面に紋様をもつII型0帶a種の二者がある。また類例は極めて少ないが、はつや遺跡同様、II型0帶a種の帯状構成は宮ノ前遺跡にある。宮ノ前遺跡には平行押型紋・矢羽根状のような特殊な押型紋ある。同様に卯ノ木1式のような菱目紋もあり、宮ノ下遺跡・岡前遺跡から出土している。これらは澤式より降る時期のものであろう。

沢遺跡同様、山形口縁のものが僅かにある。器壁は薄く大部分が4~5mm。原体の条数は2条~7条で、3条のものが多く、2条のものがこれに次ぐ(第14表-4)。沢遺跡では3条に次ぐものは4条のものである。原体一周の単位は2単位が殆どで、1単位のものもある。原体の端末はV字形の切り込みが加えられる。黒鉛混入押型紋に限っていえば、原体の長さは10.0~16.4mm。直径は3.2~6.9mmで、3~4mm台のものが最も多い(第15表)。



第32図 はつや遺跡の帶状押型紋土器

第14表 はつや遺跡早期土器の出土区別・紋様別総数表

第14表-1

| 紋様   |      | 区  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|------|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|      |      | A1 | A2 | A3 | A7 | B0 | B1 | B2 | B3 | B4 | B5 | B6 | B7 | B8 | C1 | C2 | C3 | C4 | C5 | C6 | C7 |
| 山形紋  | 黒鉛入  | 8  | 13 | 3  | 3  | 6  | 34 | 31 | 24 | 9  | 18 | 18 | 13 |    |    | 7  | 7  | 12 | 11 | 8  |    |
|      | 非黒鉛入 | 2  | 8  |    | 4  |    | 1  | 12 | 8  |    | 12 | 10 |    | 2  |    |    | 6  | 4  | 1  | 3  |    |
| 格子目紋 |      |    |    |    |    |    | 1  |    | 3  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| 楕円紋  |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| 魚骨紋  |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    | 1  | 5  |    |    |    | 1  |    | 2  | 1  |    |    |
| 無紋   | 黒鉛入  | 20 | 57 |    | 1  | 36 | 47 | 97 | 29 | 6  | 53 | 60 | 32 | 4  | 3  | 7  | 9  | 3  | 4  | 21 | 17 |
|      | 非黒鉛入 | 1  | 1  |    |    | 2  |    | 15 | 4  | 1  | 9  | 1  | 1  |    | 4  | 1  | 4  | 1  | 2  |    |    |

| 紋様   |      | Z  | 表<br>土 | 計   | %     | 備 考   |
|------|------|----|--------|-----|-------|-------|
| 山形紋  | 黒鉛入  | 6  | 5      | 236 | 25.0  |       |
|      | 非黒鉛入 | 9  | 1      | 83  | 8.8   |       |
| 格子目紋 |      |    |        | 4   | 0.4   | 黒鉛入3  |
| 楕円紋  |      | 2  |        | 2   | 0.2   |       |
| 魚骨紋  |      |    | 1      | 11  | 1.2   | 黒鉛入11 |
| 無紋   | 黒鉛入  | 15 | 26     | 547 | 57.7  |       |
|      | 非黒鉛入 | 17 |        | 64  | 6.7   |       |
|      |      |    |        | 947 | 100.0 |       |

第14表-2

|        | 計   | %     |
|--------|-----|-------|
| 黒鉛入土器  | 797 | 84.1  |
| 非黒鉛入土器 | 150 | 15.9  |
|        | 947 | 100.0 |

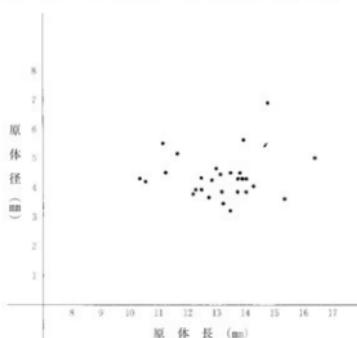
第14表-3

|        | 第1種 | 第2種 | 第3種 |
|--------|-----|-----|-----|
| 黒鉛入土器  | 29  | 2   | 4   |
| 非黒鉛入土器 | 18  | 1   | 4   |

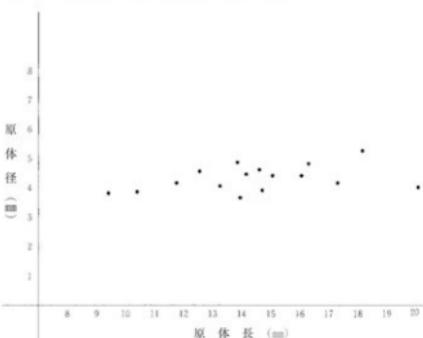
第14表-4

|        | 2条 | 3条 | 4条 | 5条 | 6条 | 7条 |
|--------|----|----|----|----|----|----|
| 黒鉛入土器  | 9  | 24 | 2  | 0  | 0  | 0  |
| 非黒鉛入土器 | 1  | 13 | 3  | 1  | 1  | 1  |

第15表 黒鉛入押型紋土器の原体長・径分布図



非黒鉛入押型紋土器の原体長・径分布図



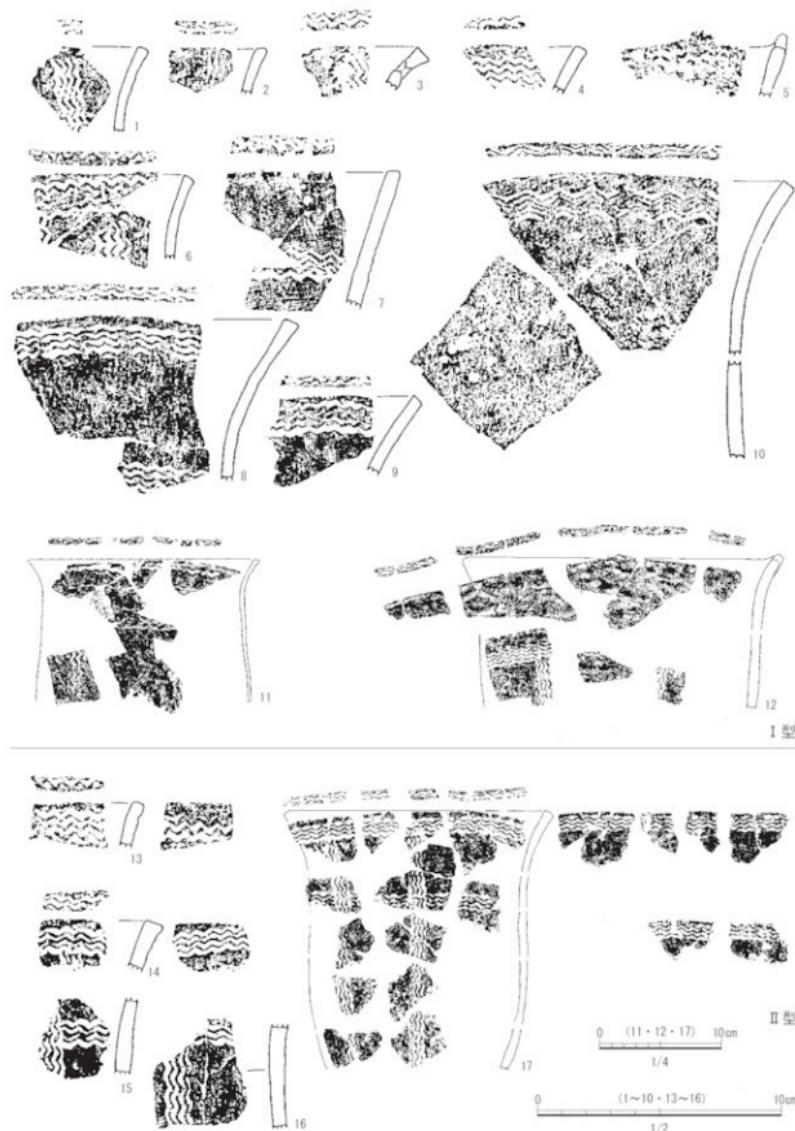
**黒鉛混入**　はつや遺跡の黒鉛混入のものと入っていないものの比率は2：1である。沢遺跡同様、黒鉛混入のものが多い。黒鉛混入の混入について、報告者の吉朝則富は「除粘材」として意識的に混入したのではなく、鉱床で採集した「粘土状黒鉛」で土器を製作した結果として位置づけた（吉朝1989）。このことは、黒鉛混入土器はすべて飛騨の地元で作られたもので、「除粘材」としての流通を否定したことになる。しかし土器そのものが移動したか、素材としての粘土が流通したのか、なお検討を要しよう。いずれにしても佐藤が指摘したように黒鉛混入土器の分布は、沢式の交易圏の重要な手がかりになろう。少なからず黒鉛の混入しない明褐色を呈すものがあることから、意識して黒鉛混入土器を作成していたに違いない。それは佐藤が外観上（色合）、吉朝が金属光沢に求めたように飛騨特産の「黒光り」土器を意図したのであろう。また、佐藤は黒鉛混入土器について沢式に限定せず、「やや時期の降る」ものの存在も示唆している。吉朝は宮ノ下遺跡の異方向密接施紋例を押型紋期の下限としている。おそらく黒鉛混入土器は方向帶状施紋から異方向密接施紋すなわち広義の樋沢式（1式～3式）に限定することができよう。後に述べるように飛騨の帶状施紋も三段階（沢→宮ノ前→宮ノ下）を経て、横方向施紋（細久保式）に変化すると考えられる（第34図）。

**信州の樋沢式・向陽台式**　信州において黒鉛混入土器は、下り林遺跡（1948年）、樋沢遺跡（1952年）の発掘調査で「青磁のような光沢をもつ極薄の土器」として注意されていた。それが黒鉛であることが判明するのは、1967年の沢遺跡発掘以降のことである。現在では、市道遺跡・御座岩岩陰遺跡・向陽台遺跡・小田原遺跡・反目南遺跡など10ヶ所以上の遺跡が確認されている。

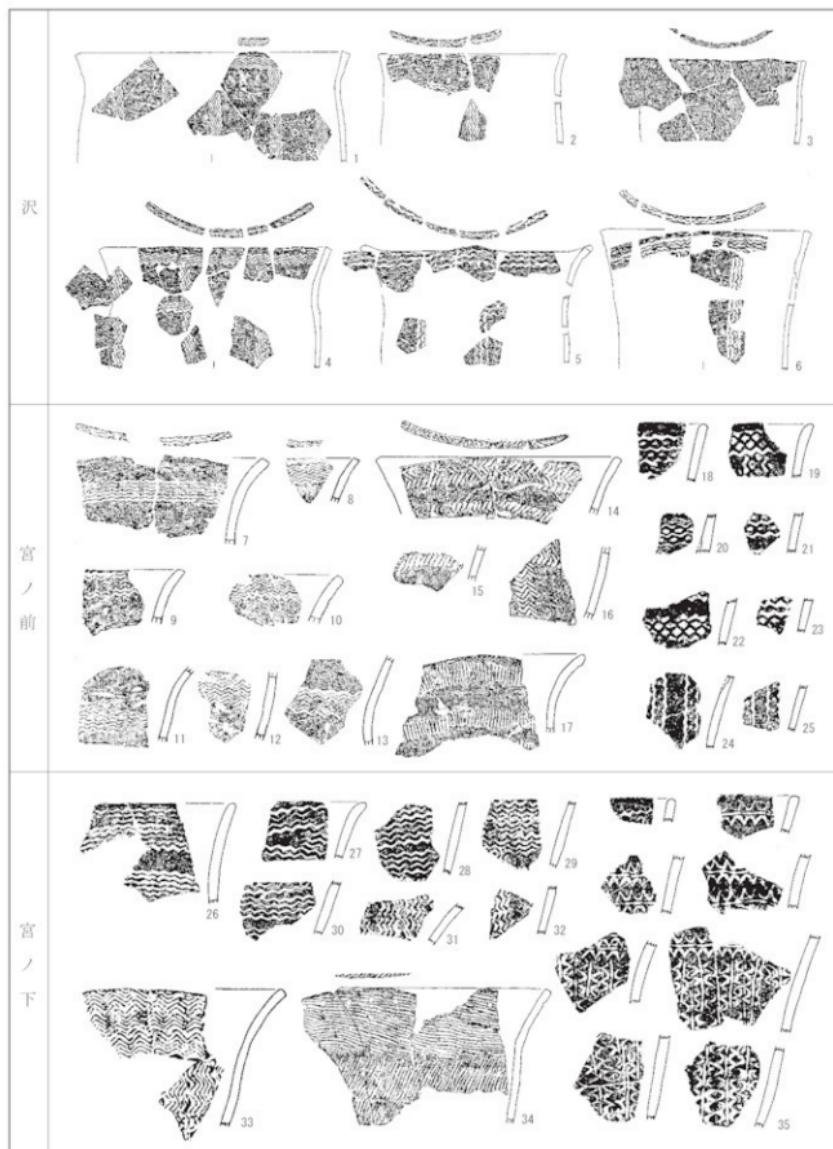
まずは沢式と樋沢下層式について考えてみよう。佐藤が楕円紋を含む樋沢下層式を沢式より後出的と考えた理由は前述のとおりである。それだけでなく、沢遺跡が沢式の単純遺跡であるのに対し、樋沢遺跡が押型紋期の拠点的な複合遺跡であることにも起因している。今日的観点からみると、樋沢下層式には複数の細別型式の押型紋が含まれ、当然、新しい後出的要素を有しているとみなさなければならない。戸沢光則が提示した樋沢式は、沢式に対比すべき黒鉛を含む樋沢1式、楕円押型紋を有する樋沢2式、口縁部三横帯・胴部縱帶密接化の樋沢3式の三段階の細別型式に弁別できる（岡本2016）。中島 宏や会田 進は帶状施紋最古の段階を「沢式」とはせず、学史的にみて「樋沢式」の枠内として提えるべきと主張する（中島1987、会田1988）。しかし、それは逆で沢式の提唱により学史的な樋沢式の実体が明確化されたと認識すべきであろう。そのうえで、信州の沢式に対比すべき細別型式を「樋沢1式」と呼ぶことには異論はない。その理由は黒鉛を含む押型紋は確かに沢式であるが、無紋土器は沢式の無紋とは胎土・器形とも異なり、独自の地域色をもっているからである。

今日、最も沢式に類似する樋沢1式は塩尻市の向陽台遺跡であろう（第33図）。住居址を伴って樋沢1式がほぼ純粹に出土し、「向陽台式」とでも称すべき標式遺跡である。最も出土量の多い第3号住居址の押型紋をみてみよう。総数は約1,800点で、山形押型紋（約480点）と無紋（約1,340点）の2種の単純な組成で、その比率は一対三である。詳細な個体別は不明であるが、沢遺跡やはつや遺跡に較べて無紋の量が多い。住居址以外の包含層からは格子目紋や変則的な帶状構成の楕円紋が出土している。楕円紋の帶状構成は樋沢遺跡にもみられ、やや後出的な樋沢2式段階のものであろう。

山形押型紋は七割が黒鉛混入土器である。口縁内面に施紋しないI型が殆どで、内面施紋のII型は僅かである。I型・II型とも殆ど口唇部には施紋を施す。その紋様構成はI型0帯a種、I型1帯a・a'種、II型1帯a種、II型2帯a・b種の6種である。器形は胴部が軽く膨らむ底尖深鉢で、口縁は平線であるが、山形口縁をもつものもある。原体の条数は2条～4条で、圧倒的に3条が多く、4条

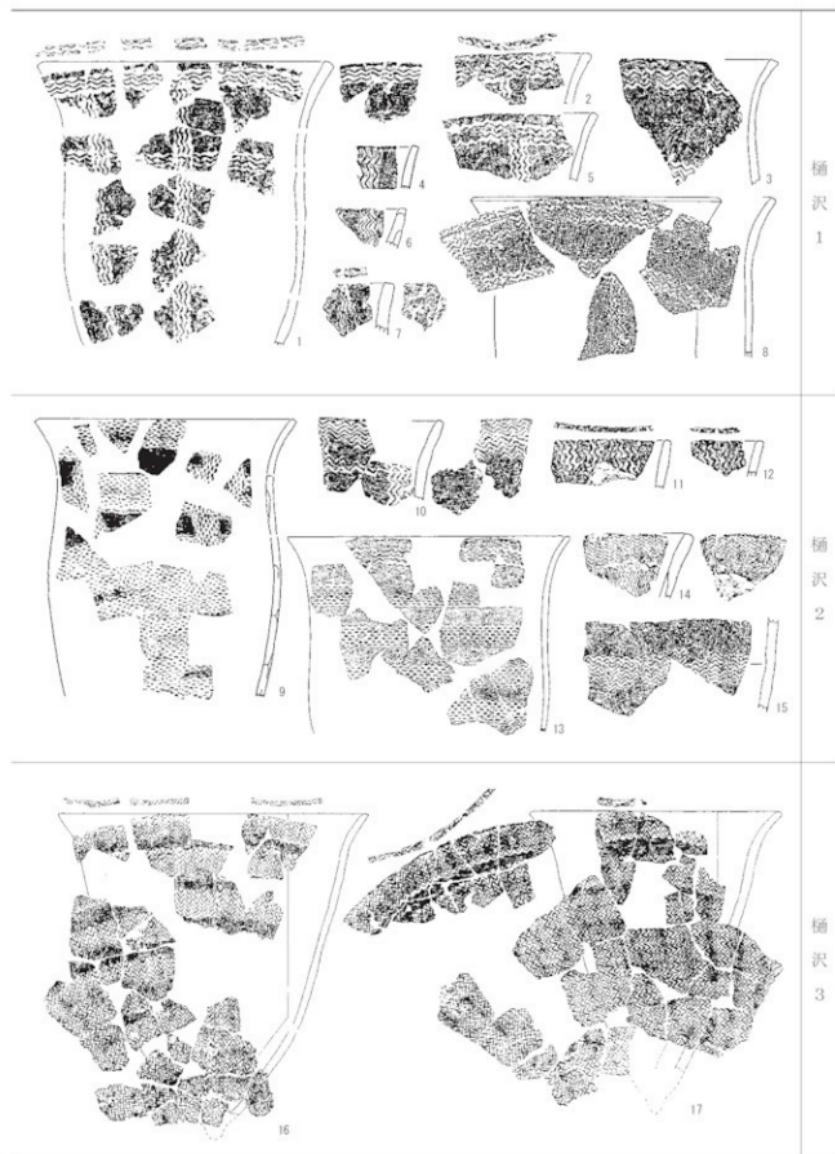


第33図 向陽台遺跡の帶状押型紋土器



第34図 帯状押型紋土器の三段階（飛驒）

1~6 沢遺跡 7~17・34 宮ノ前遺跡 18~25・35 宮ノ下遺跡



第35図 帯状押型紋土器の三段階（信州）  
1・9 向陽台遺跡 2～8・10～17 穂沢遺跡

のものが次ぐ、2条のものはごく僅か。単位は2単位が大半で、1単位のものが若干ある。原体の長さは10.0~19.4mmで、15mm以下のものが殆どである。直径は3.3~6.0mmで、4mm台のものが最も多い。

沢式にみられる無紋土器は黒鉛混入土器が圧倒的に多い。それに較べ向陽台遺跡や樋沢遺跡の樋沢1式は黒鉛混入のものではなく、砂粒（石英・長石・雲母・角閃岩）を多量に含む無紋土器が最も多く、口縁部の形状も内湾気味のもの、外反気味のもの、強く外反するものの3種がある。口唇端部も丸・平・尖端の3種に整形される。多くのヴァリエイションをもち、量的にも多い無紋土器に在地性をみることができる。

**沢式の定義** 沢式の型式学的要件については、前述したように佐藤の詳細な分析によって提示され、最古の押型紋土器として位置づけた。ここでは改めて樋沢1式を含めた広義の沢式の実体を明確にしておこう。

**種類**：有紋土器は山形押型紋が主体で、僅かに格子目押型紋が伴う。ほかに魚骨紋・繩紋（結節）などの回転施紋や条痕紋がある。山形押型紋に見合う無紋土器が伴うが、遺跡によってその比率は異なる。

**器形**：口縁部が外反し、胴部にやや膨らみをもつ尖底深鉢形。乳房状を呈するものもある。平縁が殆どであるが、山形口縁のものがある。器壁は薄く、約4~5mm。

**条数**：山形原体の条数は2条~7条で、3条ものが最も多い。2条、4条のものが次ぐ。並行する山形が殆どであるが、螺旋状原体や対向する山形紋もある。

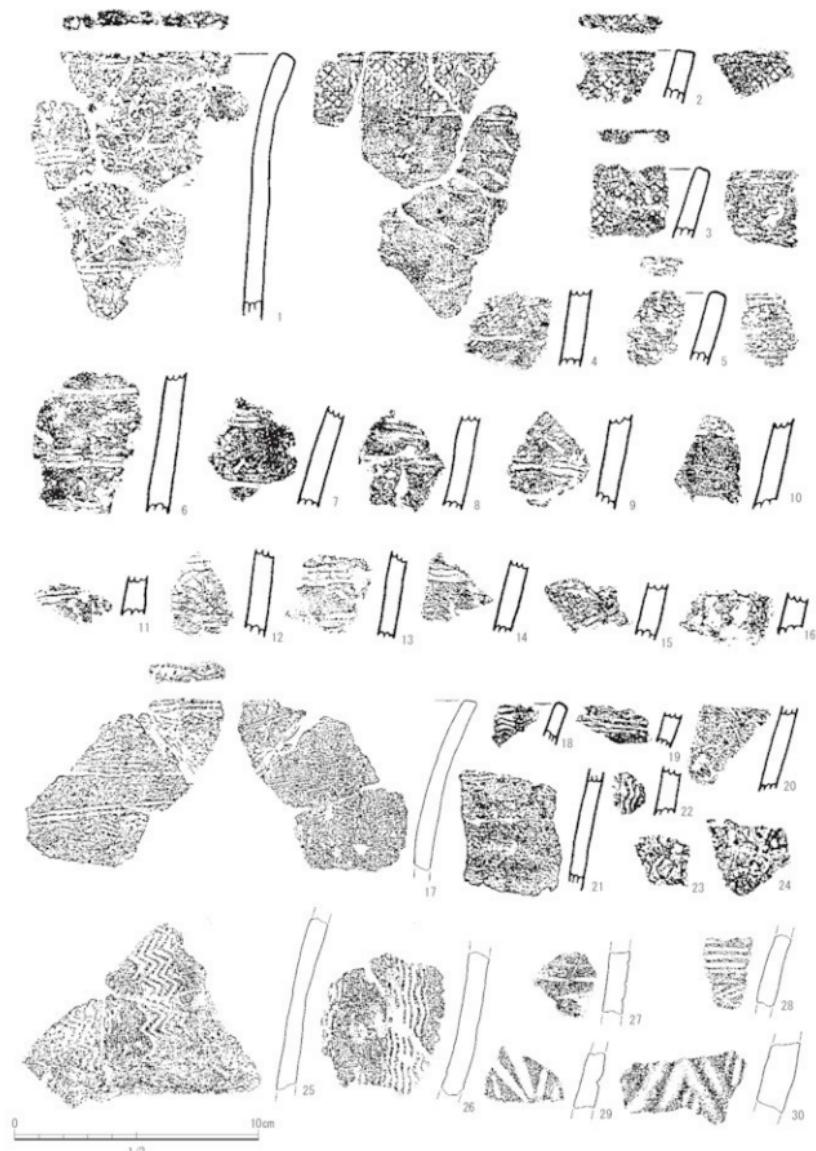
**單位**：原体の一周単位は2単位で、僅かに1単位のものがある。原体の端部はV字状に加工される。

**長さ**：9~17mmであるが、15mm以下のものが大半である。

**直径**：3~6mmで、3~4mm台のものが多い。

**施紋**：施紋は同一個体・同一原体が原則であるが、例外的に異種原体で施紋するものがある。また口唇部には原則的に施紋するが、ごく稀に施紋しない場合もある。口縁内面に施紋しないI型と施紋するII型があり、I型が多い。押型紋・結節繩紋・繩紋・魚骨紋を問わず、回転施紋は帯状施紋である。帯状施紋は縦帯のみの0帯型、横一帯の1帯型、横二帯の2帯型がある（第9図）。横三帯の3帯型は確認されていない。縦帯のみの0帯型はa種のみで、横帯のみのb種はない。1帯型には口縁部直下に施紋するa種と、幅広く無紋帯を設け、口縁部と胴部の境に施紋するa'種に分かれる。横帯を口縁部と胴部の境に廻らせ、縦帯を口縁部直下から施し直交させるb種がある。2帯型は下位の第二横帯からはじまるa種、上位の第一横帯から縦帯がはじまるb種となる。後者b種の縦帯は、第二横帯と直交することになる。押型紋を問わず、すべての回転施紋（結節繩紋・繩紋・魚骨紋）はI型・II型とも6種のいすれか帯状構成をとる。その構成は第9図に示したとおりである。

**黒鉛**：黒鉛混入のものと含まない2種がある。圧倒的に黒鉛混入のものが多い。沢式には有紋・無紋を問わず、黒鉛混入土器が存在するが、樋沢1式の無紋土器は黒鉛混入のものはない。吉朝は黒鉛混入の理由について、除粘材ではなく黒鉛鉱床の粘土状黒鉛を土器作りの素材としたためと推定している。つまり除粘材としての流通ではなく、土器そのものの流通を示唆している。この点については、なお検討を要しようが、黒鉛混入土器の分布は沢式の交易圈を知るうえで重要な手がかりと考えられる。なお、黒鉛混入土器は異方向帯状施紋の三段階（沢式→官ノ前→官ノ下、樋沢1式~樋沢3式）に存続したと推定される（第34・35図）。



第36図 平板貝塚の格子目・山形押型紋土器（1～26）と沈線紋土器（27～30）

**沢式と平坂型押型紋** 佐藤は帯状施紋の沢式を最古の押型紋に位置づけるとともに、撫糸紋終焉の平坂貝塚出土の押型紋を対比させた。この関東の押型紋を平坂型押型紋と呼んでおこう（第36図）。すでに芹沢長介は平坂貝塚の共伴例から、最古の押型紋土器を平坂式とする撫糸紋土器編年を提示している（芹沢 1954）。この芹沢編年が戦後長らく、押型紋土器出現の定点とされてきた。

では平坂型押型紋は如上の規定からみて、最古の沢式段階の資料であろうか。改めて検討することにしよう。出土した押型紋土器は格子目紋・山形紋である。両者とも原体の両端に平行線をもつ特徴がある。無紋帶を挟みながらに横方向に数帯を施している。格子目紋は大浦山式特有「絆しょう」な胎土で砂粒や気泡を多く含む。器壁も厚く、胎土も在地のもので、横方向施紋は大浦山式の施紋流儀かもしれない。格子目紋は口唇部、内面とともに紋様を施す（II型）。山形紋は口唇部には施すが内面には施紋しない（I型）。山形紋は山が低く幅広であり、1単位かもしれない。格子目紋・山形紋とともに縱方向の施紋はみられない。このほか胴部破片に平行線をもたない2種の山形紋がある。山形の高い4条ものと山形の低い幅広の5条もので、いずれも縱方向に施紋する。異方向帯状施紋を類推できるものは胴部破片のみである。両端に平行線を有する山形紋の類例は沖ノ島海底遺跡にあり、異方向帯状施紋や平行線のみのものもある（千葉大学考古学研究室 2000）。平行線紋のみで異方向帯状施紋する例は長井内原遺跡にもある。これらの平坂型押型紋は地域差というより、沢式よりも新しい段階のものであろう。また平坂式の無紋土器が出土する貝層の下から僅か1点ではあるが、三戸1式が出土している（第37図28）。平坂式と押型紋の共伴や下縄を中心に花輪台型押型紋と呼ばれる変容した押型紋の位置づけについても、慎重に検討しなければならない。なお、沢式は多摩ニュータウンNo.205遺跡例からみて、桶荷台式に対比すべき押型紋土器と考えられる。その詳細については別稿を参照されたい（岡本 2015・2016）。

### 第3節 沢式とネガティヴ押型紋の系統と編年

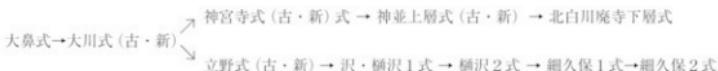
近畿地方のネガティヴ押型紋として注目された大阪府神宮寺遺跡や奈良県大川遺跡が発掘調査されたのは1957（昭和32）年のことである。その後、長らく神宮寺式が古く、大川式が新しいとする編年観（旧編年）が支持されてきた（岡田 1960）。1967年の「予報」においても、佐藤は神宮寺式と沢式の帯状山形紋を対比し、条数が多く全面施紋の大川式を後出とする編年観を提示した。その理由は、神宮寺式がより古い爪形紋に似た「舟形沈紋」のネガティヴ紋を有していたからに他ならない。もう一つは沢遺跡と桶沢遺跡の関係のように、神宮寺遺跡が純粹な単純遺跡に対し、大川遺跡がより新しい押型紋を含む複合遺跡であったことにも起因している。今日的にみれば、大川遺跡は大川式・神宮寺式・桐山和田式のネガティヴ押型紋から細久保2式・黄島式段階に至る継続的な撲点遺跡であることが判明している。

1980年代になると、神宮寺式の「舟形沈紋」が廻転施紋のネガティヴ押型紋であることが判明する（岡本 1980）。1979年から始まる大川遺跡の7次にわたる継続調査、1982年の神宮寺式期の神並遺跡の発掘調査によって、大川式や神宮寺式の豊富な資料が提示された。また1986年の三重県大鼻遺跡の発掘調査により大川・神宮寺式に先行する大鼻式、1988年には桐山和田式の新型式のネガティヴ押型紋が提示される。こうしたなか、1984年には、矢野健一・土肥 孝によって大川式→神宮寺式とする逆転編年（新編年）が発表される（矢野 1984、土肥 1987）。現在では、大鼻式→大川式→神宮寺式と

する編年観が定着し、今日を迎えている。

**一系統論** こうしたネガティヴ押型紋をめぐる動向の中、佐藤が「予報」で提示した二系統論に対し、山田 猛や矢野健一は押型紋土器の起源を西のネガティヴ押型紋に求め、立野式を介して西から東へと編年する一系統論を主張する。合わせて、押型紋土器の起源を関東の撫糸紋土器初出（井草式・夏島式）に並行する年代観を想定する（山田 1988、矢野 1993）。一系統論といっても、大川式を分岐点として西・東それぞれに展開する二系統論の変形ともいえる（第16表）。なお、立野式の成立については山田が神宮寺式とするのに対し、矢野が大川式（古）に求めている。

第16表 押型紋土器の一系統変遷観

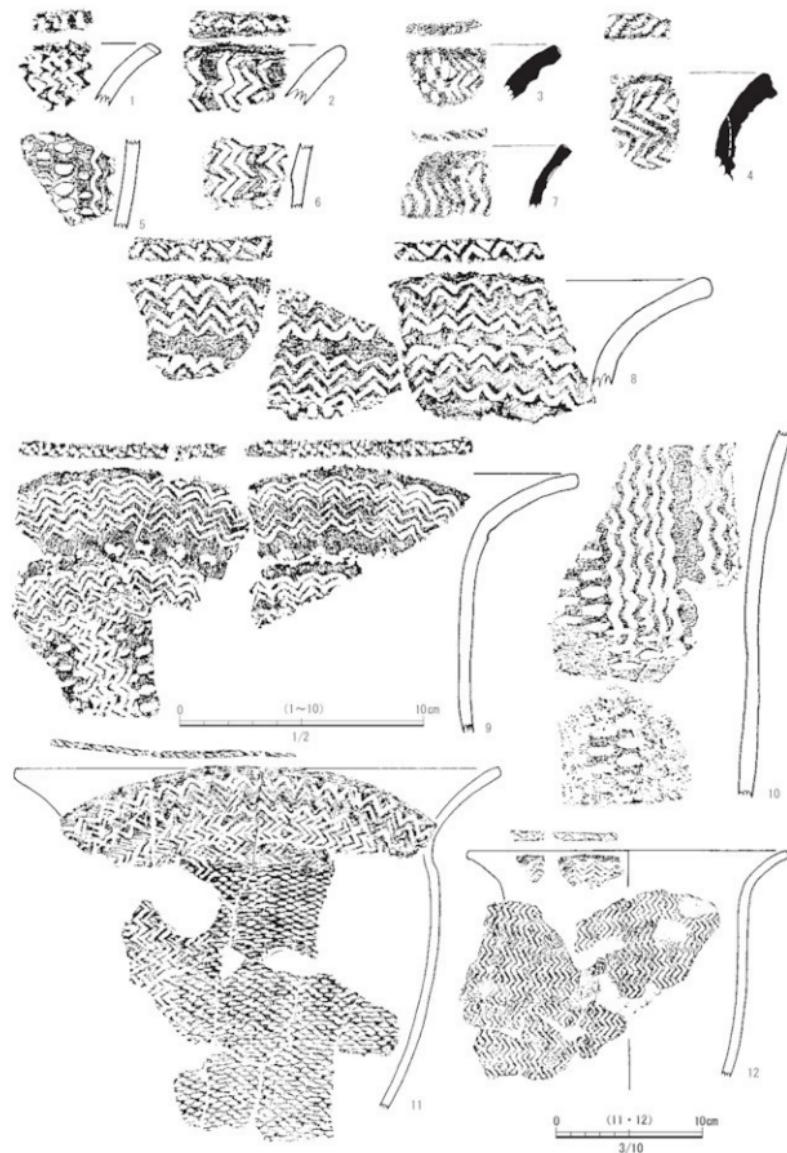


一系統論の問題点の一つは、立野式の成立時期である。立野式が西のネガティヴ押型紋によって成立した地方型式であることは、多くの研究者の認めるところであろう。まずはその時期を明確にしなければならない。また、立野式から沢式に乗り換えるためには、一定の型式学的手続きが必要であろう。なぜ、全面施紋→帶状施紋に転換するのか、ネガティヴ紋→ポジティヴ紋（山形紋・梢円紋）に替わるのか、長く太い原体→短く細い原体に、厚手→薄手の器壁に代わるのか、ネガティヴ押型紋から沢式・樋沢式への型式学的ヒアタスは大きい。

もう一つの大きな問題は山形紋の出自であろう（第37図）。一系統論に立つならば、沢・樋沢1式に先立つ大川1式に出自を求めるなければならない。ネガティヴ紋に伴う山形紋は極めて稀であり、量的に少なく客体的な存在である。大川1式に伴う山形紋が確認できるのは、大川遺跡・鶴山遺跡・西出遺跡・落合五郎遺跡の僅か4遺跡である。大川1式の山形紋には、ネガティヴ紋+山形紋を併用する全面施紋の押型紋がある。地紋としてネガティヴ紋を施し、上書きするように山形紋を帶状に施紋している。その後も神宮寺式・桐山和田式にも山形紋は継承されるが、その殆どは横方向のみ施紋である。また立野式の山形紋は縱方向密接施紋である。初出の異方向帶状施紋の山形紋は、なぜか継承されないか、また僅かであるが、縱方向のみ帶状施紋の山形紋（0帯 a種）が大川遺跡・鶴山遺跡にみられる。大鼻式以来、ネガティヴ押型紋は口縁部横方向・胴部縱方向を施紋原則としている。なぜ山形紋だけがその原則を逸脱して、縱方向のみの施紋が存在するのか。ネガティヴ紋の原体（約30mm）は長いのに、なぜ、山形紋の原体（20mm）は短いのか。いずれも一系統論では説明がつかない。ネガティヴ押型紋の世界において、山形紋の存在は量的にも、施紋法・原体においても「異質な在り方」を示している。まさに異系統の押型紋土器である。

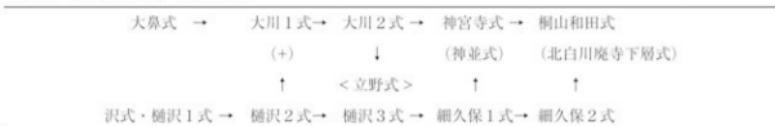
**二系統論** ではネガティヴ押型紋における山形紋の存在は二系統論に立つと、どのように解釈できるのであろうか。西のネガティヴ押型紋と東のポジティヴ押型紋の間には何ら障壁はない。事実、最古の大鼻式（お宮の森裏遺跡）は信州にまで入り、大川1式（最中上遺跡・美女遺跡）も波及している。このことは当然、逆に東の押型紋も西に波及していると考えなければならない。異系統土器の存在は開かれた繩紋社会の実体を示しているのであろう。

立野式の成立時期は大川2式の口縁部横方向・胴部縱方向の施紋原則を逆転させて、立野式独自の口縁部縱方向・胴部横方向の施紋を確立した点にある（第38図）（岡本 2015a）。すなわち立野式は西



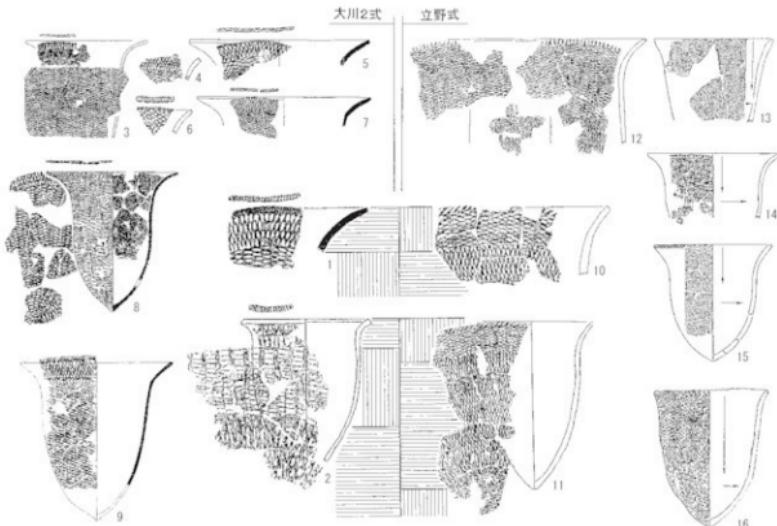
第37図 大川遺跡(1・2・5~11)・鶴山遺跡(3・4・7)の山形押型紋土器

第17表 押型紋土器の二系統変遷觀



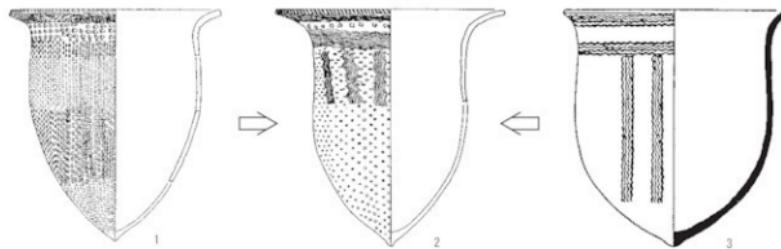
のネガティヴに由来する地方型式であり、東のホジティヴ押型紋の社会においては異系統の押型紋なのである。また、ネガティヴ押型紋における大川1式の帯状構成の山形紋も立野式と同じ現象のように、逆に東からの異系統の押型紋と考えるべきであろう(第39図)。では大川1式に対比すべき東の押型紋は、当然、帯状構成を有する押型紋(沢式・樋沢1式～樋沢3式)の三段階に限定される。大川1式の山形紋は最古の帯状山形紋より条数が多く原体もやや長い、後出的な樋沢2式段階とみることができる。如上の対比が正しいならば、大川1式=樋沢2式、大川2式=立野式=樋沢3式が併行しよう(第17表)。

神宮寺式は、神並遺跡の層位例から神宮寺式(12層)→神並上層式(11層)の変遷が提示されている。しかし、神宮寺式に続く桐山和田式はネガティヴ押型紋の伝統をお承継している。神宮寺式と桐山和田式の間に、異質な密接施紋山形紋の「神並上層式」を挟むことには型式学的に無理があろう。神並上層式も東からの異系統の押型紋であり、神宮寺式に伴う「神並式」とも呼ぶべき東の押型紋である。その時期は細久保1式に対比される。なお検討は要するが、続く桐山和田式と北白川庵寺下



第38図 大川2式土器と立野1式土器の施文規範(縮尺不同)

1・5・7 鶴山遺跡 2 薩津湖底遺物 3・4・6・9 大川遺跡 8 桐ノ川イモタ遺跡 10~12 美女遺跡  
13・16 三ツ木遺跡 14 赤坂遺跡 15 北田遺跡



第39図 ネガティブ押型紋と帶状押型紋の互換性

1・2 大川遺跡 3 権沢遺跡

層式の関係も、西の在地押型紋（桐山和田式）と東の異系統押型紋（北白川廃寺下層式）の関係に置き換えることができる。異形押型紋をもつ北白川廃寺下層式はおそらく細久保2式であろう。この関係を図示すると下記のようになる。

以上、二系統論の立場からみると、本州島における東・西の押型紋土器の対比関係とその変遷は、次のように整理できる。最後に編年表を提示して、結論としたい（第18表）。

第18表 押型紋土器前半期の編年

| 西部押型紋土器文化圏            |     |              |     | 東部押型紋土器文化圏 |          |         |      |     |  |  | 撫<br>系<br>紋 |
|-----------------------|-----|--------------|-----|------------|----------|---------|------|-----|--|--|-------------|
| 押<br>型<br>紋<br>土<br>器 |     | 栗津湖底         | 大鼻  | 沢          | 権沢1      | 西鹿田>権荷台 |      |     |  |  |             |
|                       |     | 大川1<(+)      | 鴻ノ木 | 宮ノ前        | 権沢2      | <八木沢 平坂 | 卯ノ木1 |     |  |  |             |
| 馬取                    | 大川2 | 馬瀬           | 宮ノ下 | 立野1>権沢3    | 普門寺>三戸1  | (+)     | 日計1  |     |  |  |             |
| (+)                   | (+) | 神宮寺<神並       | (+) | 西田1        | 立野2>細久保1 | 三戸2     | (+)  | 日計2 |  |  | 沈<br>線<br>紋 |
| 宝伝                    | (+) | 桐山<北白川<br>和田 | (+) | 西田2        | 細久保2     | 三戸3     | 卯ノ木2 | 日計3 |  |  |             |
| 四国                    | 中国  | 近畿           | 伊勢  | 飛驒         | 信州       | 関東      | 越後   | 東北  |  |  |             |

## 引用・参考文献

- 会田 進・中沢道彦編 1997『押型文と沈線文』長野県考古学会縄文時代（早期）部会
- 会田 進 1970「長野県南安曇郡奈川村学問遺跡発掘調査報告」「信濃」第22巻第2号
- 会田 進 1971「押型紋土器編年の再検討」「信濃」第23巻第3号
- 会田 進 1988「中部山岳地方押型文文化の様相」「縄文早期を考える」帝塚山考古学研究所
- 会田 進 1993「中部山岳地方の押型文系土器（前半期）の様相」「研究紀要」第2号 三重県文化財センター
- 会田 進ほか 2000『樋沢遺跡』岡谷市教育委員会
- 赤木 清 1936「江名古ひじ山の石器時代遺蹟、一」「ひだびと」第4巻4号
- 赤木 清 1937「江名古ひじ山の石器時代遺蹟、八」「ひだびと」第5巻1号
- 赤木 清 1937「押型紋における磨削手法について」「ひだびと」第5巻9号
- 上松町教育委員会 1993『最中上遺跡』
- 麻生敏隆 2009『榆木II遺跡(2)』（縄文時代編）財群馬県埋蔵文化財事業団
- 石坂 茂 1990「群馬県小野上村八木沢清水の押型文土器」「研究紀要」7 財群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石田由紀子 2011「奈良県の押型文土器の概観・集成」「押型文土器期の諸相」
- 石原正敏・小熊博史 1988「新潟県の研究動向」「縄文早期の諸問題」第2回縄文セミナー
- 池谷信之 2003「縦位密接施紋から異方向帶状施紋へ」「利根川」24・25
- 市原壽文・大參義一 1965「縄文文化の発展と地域性－東海」「日本の考古学」II
- 伊庭 功ほか 2000「栗津湖底遺跡 予備調査・南調査区（栗津湖底遺跡IV）」滋賀県教育委員会
- 伊庭 功ほか 2001「栗津湖底遺跡自然流路（栗津湖底遺跡III）」滋賀県教育委員会
- 今村啓爾 1985「縄文早期の堅穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」「古代」第80号
- 上野原町教育委員会 1976『仲大地遺跡』
- 上野 誠・畠中清隆 1986「岩の鼻遺跡－1985年度調査概報」
- 江坂輝弥 1944「迴転押捺文土器の研究」「人類学雑誌」70巻8号
- 上峰篤志・矢野健一 2011「京都府の押型文土器の概要・集成」「押型文土器期の諸相」
- 大江まさる 1987「下田遺跡」河合村教育委員会
- 大石崇史 2011「岐阜県の押型文土器の概要・集成」「押型文土器期の諸相 第12回関西縄文研究会 発表要旨・資料集」関西縄文文化研究会
- 大下 明・深井明比古 2011「兵庫県下の押型文土器概要」「押型文土器期の諸相」
- 大野政雄・佐藤達夫 1967「岐阜県沢遺跡調査予報」「考古学雑誌」第53巻2号
- 大野昌文・大野博見 2011「飛驒の文化 斐太の歴史－大野政雄著述集－」
- 岡田茂弘 1965「縄文文化の発展と地域性－近畿」「日本の考古学」II
- 岡田憲一 2003「大鼻式土器の多面性」「利根川」24・25号
- 岡田憲一ほか 2006「鶴山遺跡」奈良県橿原考古学研究所調査報告第96冊
- 岡本 勇 1953「相模平坂貝塚」「駿台史学」第3号

- 岡本東三 1987「押型紋土器」『季刊考古学』21号
- 岡本東三 1989「立野式土器の出自とその系統をめぐって」『先史考古学研究』第2号
- 岡本東三 1992「埼玉県・大原第3類土器をめぐって」『人間・遺跡・遺物』2
- 岡本東三 1997「関東・北の沈線紋と関・東北の押型紋」『人間・遺跡・遺物』3
- 岡本東三 2010「関東・北の沈線紋と関・中部の押型紋」『土器型式論の実践的研究』人文社会科学研究科プロジェクト研究第128集
- 岡本東三 2012「沖ノ島海底遺跡の意味するもの」『考古学論叢』千葉大学文学部考古学研究室30周年記念
- 岡本東三 2013「西部押型文土器文化圏への旅立ち」『日本先史考古学論集』
- 岡本東三 2014a「西部押型文土器文化圏への旅立ち－その2」『型式論の実践的研究』II 人文社会科学研究科プロジェクト研究第276集
- 岡本東三 2014b「押型紋土器の終焉」『鹿児島考古』第44号
- 岡本東三 2015a「西部押型文土器文化圏への旅立ち－第3章－」『考古学論叢』II
- 岡本東三 2015b「九州島における押型紋土器の出現とその前夜」『高野晋司氏追悼論文集』
- 岡本東三 2015c「黄鳥式から高山寺式土器へ」『先史考古学研究』第12号
- 岡谷市教育委員会 1998「問下丸山・桜海塚遺跡」郷土の文化財20
- 奥 義次 2011「三重県の押型文土器出土遺跡の概要・集成」『押型文土器期の諸相』
- 奥 義次ほか 1993「三重県下の前半期の押型文土器」『研究紀要』第2号
- 小笠原永隆 2009「早期の非在地系土器－押型紋土器について」『研究紀要』26 千葉県教育振興財團
- 小熊博史 1997a「卯ノ木遺跡出土土器の研究Ⅰ」『長岡市立科学博物館研究報告』第32号
- 小熊博史 1997b「新潟県における押型紋系及び沈線文土器群の様相」『押型文と沈線文』
- 小野上村教育委員会 1978「八木沢清水遺跡」
- 小野上村教育委員会 1997「八木沢清水遺跡」
- 遠部 慎編 2003「特集：押型文土器とその周辺」『利根川』24・25号
- 河西克造ほか 2002「馬捨場遺跡」長野県埋蔵文化財センター
- 片岡 肇 1974「近畿地方における押型文土器文化について」『平安博物館研究紀要』第5輯
- 片岡 肇 1980「桶沢式土器の再検討」『信濃』第32巻第4号
- 片岡 肇 1982「押型文土器」『縄文文化の研究』3
- 片岡 肇 1988「異形押型文土器について」『朱雀』第1集 京都文化財團
- 片山長三 1963「神宮寺早期繩文遺跡」『交野町史』
- 神村 透 1957「長野県立野遺跡の捺型紋土器」『石器時代』4号
- 神村 透 1968・1969「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』第20巻10・12号、第21卷3～5・7・9号
- 神村 透 1986「開田高原大原遺跡」開田村教育委員会
- 神村 透 2003a「木曾・稻沢(付、二本木遺跡)」「日義村の文化財」17
- 神村 透 2003b「田舎ッペ、押型文土器(立野式)にこだわる」『利根川』24・25
- 神村 透ほか 1995「お宮の森裏遺跡」上松町教育委員会
- 河合英夫ほか 1991「上町遺跡D地点発掘調査報告書」岐阜県吉城郡古川町教育委員会

- 川崎 保 2003『山の神遺跡』国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘報告書 2
- 河野典夫ほか 1988『落合五郎遺跡発掘調査報告書』中津川教育委員会
- 河野典夫ほか 1998『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』宮川村教育委員会
- 関西縄文文化研究会 2011『押型文土器の諸相』第12回関西縄文文化研究会
- 氣賀沢進・会田 進 1988『反目南遺跡』駒ヶ根市発掘調査報告第25集
- 群馬県考古学研究所ほか 1988『縄文早期の諸問題』第2回縄文セミナー
- 熊谷博志 2008『樋沢・細久保式小考』『文化財学としての考古学』
- 熊谷博志 2011a『鳥浜貝塚出土の押型紋土器』『福井県立若狭歴史民俗資料館館報 平成22年度』
- 熊谷博志 2011b『前半期押型文土器編年の再検討』『押型文土器の諸相』
- 熊谷博志 2012『鳥浜貝塚出土押型文土器の再検討』『信濃』64巻 4号
- 繩纏 茂 2013『桑田和町北貝戸遺跡』『豊田市史』18 資料編 考古 I 旧石器・縄文
- 甲野 勇・吉田 格 1949『縄文式文化編年図集－花輪台文化－』
- 紅村 弘 1963『東海の先史遺跡』総括編
- 小杉 康 1987『樋沢遺跡押型文土器群の研究』『樋沢押型文遺跡調査研究報告』岡谷市教育委員会
- 小島 功 2000『宮ノ前遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』宮川村教育委員会
- 小竹森直子 2013『栗津第3貝塚2・自然流路2』(栗津湖底遺跡V) 滋賀県教育委員会
- 小林康男ほか 1985『福沢遺跡』『堂の前・福沢・青木沢』塩尻市教育委員会
- 小林康男ほか 1988『向陽台遺跡』『一般国道(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』塩尻市教育委員会
- 近藤尚義 1988『八窪遺跡出土第一群土器の検討』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 2』－塩尻市内その1－(財)長野県埋蔵文化財センター
- 酒詰伸男・岡田茂弘 1958『大川遺跡』奈良県文化財報告2
- 酒詰伸男・渡辺 仁 1949『栃木県菱村普門寺遺跡発掘概報』『人類学雑誌』第61巻 1号
- 笹津海祥・白石竹雄 1966『修善寺池の本遺跡』『日本考古境界第32回総会研究発表要旨』
- 佐藤康男 1995『飛瀬・底津遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 塩尻市教育委員会 1988『一般国道20号(塩尻バイパス)改良工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 重住 豊 1991『東京都における押型文土器と遺跡』『縄文時代』2
- 下村晴文 1985『神並遺跡出土の押型文土器』『紀要I』(財)東大阪市文化財協会
- 下村晴文ほか 1987『神並遺跡II』東大阪市教育委員会
- 白崎高保 1941『東京稻荷臺先史遺跡』『古代文化』第12巻 8号
- 杉原莊介・芹沢長介 1957『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』明治大学文学部研究報告  
考古学第二冊
- 鈴木昭彦 1993『北貝戸遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報』8 愛知県教育委員会
- 澄田正一・大參義一 1956『九合洞穴遺跡』名古屋大学考古学研究室報告1
- 芹沢長介 1954『関東および中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察』  
『駿台史学』4号
- 芹沢長介 1956『神奈川県大丸遺跡の研究』『駿台史学』7号
- 高山市教育委員会 1982『向畠遺跡』高山市埋蔵文化財調査報告第6集

- 高山市教育委員会 1983『向畠遺跡の遺物』高山市埋蔵文化財調査報告第8集
- 谷口和人ほか 1998『牛垣内遺跡』財岐阜県文化財保護センター
- 谷口和人ほか 1997『西田遺跡』財岐阜県文化財保護センター
- 谷口和人ほか 1995『岡前遺跡』財岐阜県文化財保護センター
- 千葉大学文学部考古学研究室 2004『沖ノ島遺跡第1次発掘調査概報』
- 千葉大学文学部考古学研究室 2006『沖ノ島遺跡第2・3次発掘調査概報』
- 帝塚山考古学研究所 1988『縄文早期を考える』
- 土井義夫ほか 1974『秋川市二宮神社境内の調査』秋川市教育委員会文化財調査報告第1集
- 東海縄文研究会 2014『東海地方における縄文時代早期前縄文の諸問題』第10回東海縄文研究会
- 土肥 孝 1988『近畿押型紋土器素描』『縄文早期の諸問題』第2回縄文セミナー
- 戸沢充則 1955『樋沢押型文遺跡』『石器時代』2
- 戸沢充則 1978『押型文土器群編年研究素描』『中部高地の考古学』
- 戸沢充則編 1987『樋沢押型文遺跡調査研究報告』岡谷市教育委員会
- 戸沢充則編 1982『概報・樋沢遺跡』岡谷市教育委員会・塩尻市教育委員会
- 戸沢充則編 1994『縄文時代研究事典』東京堂
- 戸田哲也ほか 1993『中野山越遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡古川町教育委員会
- 戸田哲也・河合英夫 2015『第1部 考古(原始・古代)』『飛騨古川 歴史をみつめて』飛騨市
- 中島 宏 1986『普門寺遺跡の押型文土器について』『利根川』7
- 中島 宏 1987a『中部地方における押型文土器編年の再検討』『埼玉の考古学』
- 中島 宏 1987b『埼玉県の押型文土器』『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館
- 中島 宏 1988a『埼玉県における押型紋土器の様相』『縄文早期の諸問題』第2回縄文セミナー
- 中島 宏 1988b『関東地方における押型文土器の様相』『縄文早期を考える』帝塚山考古学研究所
- 中島 宏 1989『長野県柄原岩陰遺跡における層位的調査成果の検討』『利根川』10
- 中島 宏 1990a『普門寺式土器再論』『利根川』11
- 中島 宏 1990b『立野式土器についての一考察』『研究紀要』第7号 財埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中島 宏 1990c『細久保2類a群土器についての覚書』『縄文時代』1
- 中島 宏 1995『群馬県安中市中原遺跡の樋沢式押型文土器をめぐって』『利根川』16
- 中島 宏 2004『樋沢式押型紋土器の型式学的検討』『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第26号
- 長野県考古学会 1995『表裏縄文から立野式へ』シンポジウム特集号『長野県考古学会誌』77・78
- 長野県考古学会縄文時代(早期)部会 1997『押型文と沈線文』
- 中村由克 2000『市道遺跡発掘調査報告書』信濃町教育委員会
- 中村孝三郎 1963『卯の木押型文遺跡』長岡市市立科学博物館研究調査報告5
- 長沢展生 2003『新潟県の押型文土器の様相』『利根川』24・25
- 沼津市教育委員会 2001『葛原沢第IV遺跡(a・b区)発掘調査報告書』1
- 野内秀明 1982『長井町内原遺跡』横須賀市文化財調査報告書第9集
- 野内秀明 2010a『坂本貝塚』『新横須賀市史』別編 考古
- 野内秀明 2010b『長井内原遺跡』『新横須賀市史』別編 考古

- 馬場保之 1995「立野遺跡出土の立野式土器について」『長野県考古学会誌』77・78
- 馬場保之・下平博行 1998「美女遺跡」飯田市教育委員会
- 原明 芳 1994「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書－鳥林遺跡－」
- 原 宽・紅村 宽 1958「岐阜県花ノ湖遺跡略報」「石器時代」5号
- 原川雄二 1982「多摩ニュータウンNo205遺跡」「多摩ニュータウン遺跡」－昭和56年－（第2分冊）
- 東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集
- 原川雄二 1996「多摩ニュータウンNo200遺跡」「多摩ニュータウン遺跡」東京都埋蔵文化財センター調査報告第32集
- 原田昌幸 1987「土器様式における他様式型式表象の受容と展開」『竹籠』第2号
- 原田昌幸 1991「撫糸文土器様式」考古学ライブラリー 61
- 林 茂樹 1984「三ツ木遺跡の押型文土器と撫糸文土器」『中部高地の考古学』Ⅲ
- 東田原八幡遺跡調査団 1981「東田原八幡遺跡」
- 福島 水・会田 進 2004「小田原遺跡」上野地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
- 松井 朗 2001「黒鉛入り押型文土器の研究」千葉大学文学研究科修士論文
- 増田 修 1988「普門寺遺跡の調査と下層及び最下層について」『縄文早期の諸問題』第2回縄文セミナー
- 松沢亜生 1957「細久保遺跡の押型文土器」「石器時代」第4号
- 松澤 修 1993「栗津遺跡の縄文早期の土器について」
- 松島 透 1957「長野県立野遺跡の捺型文土器」「石器時代」第4号
- 松田真一 1988「奈良県出土の押型文土器」「樅原考古学研究所論集」
- 松田真一 1989「大川遺跡－縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書」山添村教育委員会
- 松田真一 1993「奈良県の押型文土器研究の動向」「研究紀要」第2号
- 松田真一ほか 2002「桐山和田遺跡」奈良県文化財調査報告書第91集 奈良県立橿原考古学研究所
- 松田真一ほか 1989「大川遺跡－縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書」山添村教育委員会
- 松田真一ほか 2002「桐山和田遺跡」奈良県文化財調査報告書第91集 奈良県立橿原考古学研究所
- 馬目純一ほか 1982「竹之内遺跡」いわき市埋蔵文化財報告第8集
- 三重県生活部文化振興室 2005「三重県史」資料編 考古1
- 宮坂英式・宮坂寅二 1966「御座岩遺跡」「蓼科」尖石考古館研究報告叢書第Ⅱ冊
- 宮崎朝雄・金子直行 1995「回転文様系土器群の研究」「日本考古学」第2号
- 宮崎朝雄・金子直行 2010「回転文様系土器群の再検討」「縄文時代」第21号
- 宮崎朝雄・金子直行 2012「回転文様系土器群の再検討(2)」「縄文時代」第23号
- 宮下健司 1988「縄文早期の土器」「長野県史」考古資料編 全一巻(四) 遺構・遺物
- 村上 界 2011「愛知県の概要」「押型文土器の諸相」
- 守屋豊人 1995「平坂貝塚出土土器の再検討」「考古学博物館館報」No10
- 矢野健一 1984「近畿地方における押型文土器前半期の編年案」「縄文文化研究会広島大会資料」
- 矢野健一 1988「奈良県天理市布留遺跡縄文時代早期の調査」「考古学調査研究中間報告」14
- 矢野健一 1993a「押型文土器の起源と変遷」「考古学雑誌」78巻4号
- 矢野健一 1993b「押型文土器の起源と変遷に関する新視点」「研究紀要」第2号 三重県埋蔵文化財

## センター

- 矢野健一 1995 「表裏縄文から立野式へ－シンポジウム－押型文土器コメント 1. 討議」『長野県考古学会誌』77・78
- 矢野健一 1997 「中四国地方における押型紋土器後半期の様相」「押型文と沈線文」本編
- 矢野健一 2011 「押型文土器編年の現状と課題」「押型文土器期の諸相」
- 矢野健一 2008 「押型文系土器（大川式・神宮寺式土器）」「総覧 縄文土器」
- 山田 猛 1986 「－大鼻遺跡の縄文時代早期特集号－」「国一バイパスだより」12号
- 山田 猛 1987 「大鼻（二～三次）・山城（三次）遺跡」一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ 三重県教育委員会
- 山田 猛 1988 「押型文土器群の型式学的再検討」『三重県史研究』4
- 山田 猛 1993 「大鼻式・大川式の再検討」「研究紀要」 三重県埋蔵文化財センター
- 山田 猛 1994 「大鼻遺跡」三重県埋蔵文化財センター
- 山田 猛 2003 「神村論文を読んで」『利根川』24・25
- 山内清男 1932 「日本遠古之文化」「ドルメン」第1巻4号～第2巻2号
- 山内清男 1934 「江名古ひぢ山の土器について」「飛騨考古学会々会報」第2巻1号
- 山内清男 1935 「古式縄文土器研究最近の情勢」「ドルメン」第4巻1号
- 山内清男 1936 「縄紋土器型式の年代的組織（仮説）」
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」「先史考古学」第1巻1号
- 山内清男 1969 「縄紋草創期の諸問題」「MUSEUM」224号
- 八幡一郎・上野佳也 1962 「長野県菅平東組の早期縄文式文化遺跡について」『考古学雑誌』第48卷2号
- 吉朝則富 1990 「高山市の縄文時代遺跡 二 ひじ山遺跡」飛騨春秋 第35巻9・10号
- 吉朝則富ほか 1988 「宮ノ下遺跡」国府町教育委員会
- 吉朝則富ほか 1989 「はつや遺跡」清見村教育委員会
- 吉朝則富ほか 2004 「宮村史」通史編1 宮村教育委員会
- 吉田英敏・篠原英敏 1989 「塚原遺跡・塚原古墳群」閔市教育委員会
- 米川仁一ほか 2003 「上津大片刈遺跡」奈良県文化財調査報告書第104集 奈良県立橿原考古学研究所
- 渡邊 誠・斉藤基成 2002 「北貝戸遺跡」「愛知県史」資料編1 考古1 旧石器・縄文

## 第6章 分析編

### 沢遺跡出土の黒鉛混入土器の胎土分析

中村由克（明治大学黒耀石研究センター）

#### 1. はじめに

沢遺跡は飛騨市古川町の吉城高校裏の扇状地の山麓部に位置する。沢式土器の標式遺跡として有名であるが、筆者は1994-95年に長野県信濃町の市道遺跡の発掘調査を担当し、黒鉛混入の押型文土器が出土したことを契機として、沢式土器の土器胎土に関心を持った。2001年の報告書作成（中村編2001）と同年の野尻湖ナウマンゾウ博物館特別展「押型文と古い布」の企画・準備をおこなう中で、飛騨地域の黒鉛混入土器の胎土観察をおこなったが、それ以降その仕事を追求できなかった。

今回、改めて縄文時代早期の土器胎土分析に取り組み始め、長野県内遺跡の資料調査を始めていたところ、沢遺跡の土器胎土を研究する機会を与えていただいたので、本稿にその結果を記述する。

#### 2. 胎土分析法

土器胎土分析法については、河西（2008）が方法論の体系を整理している。岩石レベルの胎土分析で光学顕微鏡を用いた研究法で現在主流になっているのは、0.02~0.03mmの厚さの土器薄片を作製し、偏光顕微鏡で観察する薄片法である。メカニカルステージを利用したポイントカウント法を用いて土器中の岩石鉱物粒子を計測する際に、水沢（2008）は1薄片で計測するポイント数を100から1000ポイントまでの5段階で試験し、250ポイント（測定間隔：0.5×0.6mm）が効率よく全体の傾向をとらえることができるとしている。

一方、薄片法は土器の一部分を破壊する方法であり、多量にある土器破片を利用するのに適しているが、研究史上有名になった土器資料や土器片の個数が限られた資料など、破壊ができない対象の場合、薄片法は実施できないという制約がある。中村（2001、2002）は、実体顕微鏡の倍率20~40倍で土器表面を観察し、含有される岩石鉱物種を記載する方法で、土器胎土観察をおこなった。この際に砂粒の種類の量比は定量的にカウントするのではなく、量的に多いものを数種類、記載するという定性的な記載方法のレベルであった。

矢野健一氏の「砂粒数カウント法」（松崎ほか 2011、矢野 2008）は土器表面の1×1cm区画内を20倍の実体双眼顕微鏡で砂粒数を計測する非破壊の方法で、粒径0.25mm以上のものを対象としている。特定鉱物が多量に混入される土器の統計的分析には適した方法だと思われるが、含有される砂粒の岩石鉱物種の厳密な鑑定はされてなく、この点に関しては不十分である。

土器の胎土研究を従来、対象にできなかったより多くの土器資料に拡大するためには、非破壊法で、かつ薄片法に匹敵する精度を備えた新たな土器胎土分析法の開拓が求められていた。この理由から、筆者がおこなったのは以下の方法である。

##### （非破壊式）実体顕微鏡土器胎土分析法

- 1) 土器表面を全体的に観察して、微細な砂粒粒子が比較的多くみられる場所を選定する。この場合、土器文様が施されない裏面が適している。その場所に、1cm四方の正方形に切り抜き、4辺に

- 2 mm間隔のメモリを付した自作の紙製枠を両面テープで固定する。
- 2) 1 cm四方の範囲を2 mm単位で25等分し、上下にa～e、左右に1～5のグリッド分けをし、それぞれa1～e5のグリッドとする。
  - 3) 紙製の1 cm計測枠の部分をカメラで接写し、写真をプリントする。この時、通常のカメラによる接写よりは、実体顕微鏡の6.7倍での写真撮影の方が、砂粒粒子は鮮明に撮影できた。なお、現地でプリントできない場合は、グリッドごと略図を書き、その中に粒子の位置と番号をメモとして記録する方法をとれば時間短縮ができる。
  - 4) 実体顕微鏡を20倍～40倍の倍率で、各グリッドごとに砂粒粒子の岩石鉱物種を鑑定する。砂粒粒子は2 mm単位のグリッドごとに、1番からナンバーをつけ、接写写真の画面に記録する。必要な場合は100倍まで拡大し、種類の鑑定をおこなう。鑑定をおこなう粒子の粒径は、おおむね0.1～0.2 mm (100～200 μm) 以上とする。
  - 5) 記録用紙に、区画、番号、岩石鉱物名、形状（角礫、亜角礫、亜円礫、円礫など）などを記載する。粒子のサイズが必要な場合は、あとから写真上で計測する。
  - 6) 記載、写真記録が必要と思われる砂粒粒子は、顕微鏡写真40～100倍を撮影する。
  - 7) 土器胎土の基質部分（粘土部分）の記載をする。黒鉛混入土器の場合は、黒鉛の混入比率を岩石用のカラーインデックス（0.33%～40%：大久保・藤田編 1999）を用いて判定記録する。
  - 8) 測定・観察終了後、紙製1 cm枠を取り外す。
  - 9) 計測終了後、土器胎土分析記録票を取りまとめ、砂粒の岩石鉱物の種類ごとの個体数をまとめる。
- この方法は、縄文時代早期の砂粒混入数が多い土器には特に適しており、今回の沢式土器の場合、0.1ないし0.2 mm以上の砂粒をすべてカウントした結果、1 cm中に196～232粒子の鑑定ができた。この数字は、水沢（2008）のカウント数にはば匹敵し、また、火山灰分析による砂粒カウント数の1サンプルあたり200粒という1つの基準にはば達している精度と判断できる。岩石鉱物種類の鑑定にあたっては、鉱物は野尻湖火山灰グループ（2007）を参考に鑑定し、岩石種は構成鉱物種や組織などを調べて鑑定をおこなう。この場合、0.1～1 mm程度の粒子を鑑定することが求められるので、言うまでもないが、岩石鉱物の鑑定には岩石学的な習熟が必要である。なお、この方法で土器の胎土分析を実施した場合、現在の方法と精度を求めた場合、1日7時間程度で計測・記載できる個体数は、3～4個体程度である。資料を借用できる場合は、多くの資料分析が可能であるが、借り出しができない場合は多くの資料分析は不可能である。
- 実体顕微鏡はニコンSMZ745Tに2倍の補助レンズをつけて、主に6.7倍と20～100倍で検鏡・観察し、写真撮影はマイクロネット社製のスーパーシステムをつけたデジカメ・ニコンJ2を使用した。

### 3. 沢遺跡の土器胎土記載

沢遺跡出土の主な土器の胎土記載を表1に示す。大野・佐藤（1967）に図示された国版番号に基づいている。沢遺跡の18点の土器胎土を概観すると、次の3類型の胎土があることがわかる。

- 1型：砂粒は飛片状麻岩の砂粒を主体とし、黒鉛を砂粒と粘土の両方に多く含むもの。基質（粘土）部分をカラーインデックスと比較して観察したところ、黒鉛の含有量はおおむね20～30%以上である。
- 2型：砂粒は飛片状麻岩を主体とし、黒鉛粒子は含むが、粘土にはほとんど含まないもの。基質部分はややガラス質にみえる。カラーインデックスと比較して観察したところ、黒鉛の含有量はおおむね

表1 沢遺跡出土の主な土器の胎土記載

| No. | 国版番号   | 色調   |     | 砂粒 (mm) |         |                          | 砂粒の種類                         | 基質                         | 黒鉛含有量 | 胎土分類型 |
|-----|--------|------|-----|---------|---------|--------------------------|-------------------------------|----------------------------|-------|-------|
|     |        | 表面   | 内部  | 粗粒の含有量  | 最大径     | 平均径                      |                               |                            |       |       |
| 1   | 3 国-1  | 黒灰色  |     | あり      | 4.0     | 0.5-2                    | GNS, Qt, Gra                  | 基質は砂質、黒鉛はとても少ない            |       | 1     |
| 2   | 3 国-2  | 黒灰色  | 赤褐色 |         | 0.5-2   | GNS, Qt, 小Gra (0.7-1 mm) | 基質は砂質、黒鉛はとても少ない               |                            |       | 2     |
| 3   | 3 国-3  | 黒灰色  |     | 4.5     | 0.5-2   | Gra多い、GNS, Qt            |                               |                            |       | 1     |
| 4   | 3 国-4  | 黒灰色  |     | あり      | 2.0     | 0.3-1.5                  | Gra (0.5-0.8mm) 多い、GNS        | 黒鉛が多い、全体に金属光沢              | 40%以上 | 1     |
| 5   | 4 国-1  | 黒灰色  |     | あり      | 2.0     |                          | GNS, Qt, Gra                  | 基質はやや砂質な粘土、光沢なし            |       |       |
| 6   | 4 国-2  | 暗赤褐色 | 暗灰色 | やや多い    | 1.5     | 0.3-1.5                  | GNS, Qt, Gra (0.1-0.3mm) 多くない | 基質はやや砂質な粘土、光沢なし            | 3%以下  | 2     |
| 7   | 4 国-3  | 黒灰色  |     | あり      | 1.5     | 0.3                      | Graめぐらしく、GNS, Qt,             | 光沢なし                       |       | 1     |
| 8   | 4 国-4  | 黒灰色  |     | あり      | 0.5-2.0 | GNS, Gra                 | 光沢あり                          |                            |       | 1     |
| 9   | 4 国-5  | 黒灰色  |     | やや多い    | 2.0     | 0.3-1.2                  | GNS, Qt, Gra多い、Bio (少)        | 基質に微細な黒鉛が多い                | 40%以上 | 1     |
| 10  | 4 国-6  | 黒灰色  |     | あり      | 0.5-1.8 | Qt, GNS, Gra             | 基質はやや砂質な粘土、光沢あり               |                            |       |       |
| 11  | 4 国-7  | 黒灰色  |     | あり～やや多い | 1.7     | 0.3-1.7                  | Gra, GNS, Qt, Bio             | 基質に微細な黒鉛が多い                | 40% ± | 1     |
| 12  | 4 国-8  | 暗赤褐色 |     | 含む      | 0.8     | 0.3-0.8                  | GNS, Gra, 赤岩片, Bio, Qt        | 基質に微細な黒鉛を含まない、砂質の黒鉛を少量含むのみ | 3%以下  | 2     |
| 13  | 4 国-9  | 濃褐色  |     | やや多い    | 0.5-2.0 | Qt, 白岩片, Gra多く           | 基質はやや砂質な粘土で、黒鉛を多く含む、ガラス光沢     |                            |       | 2     |
| 14  | 4 国-10 | 黒灰色  |     | あり～やや多い | 0.5-1.9 | GNS, Qt                  |                               |                            |       | 1     |
| 15  | 4 国-11 | 暗赤褐色 |     | やや多い    | 0.5-1.0 | GNS, Qt, 小Gra少ない         |                               |                            |       | 3     |
| 16  | 4 国-12 | 暗黒灰色 |     | 多い      | 1.6     | 0.5-1.5                  | Qt, GNS                       | 光沢あり                       |       | 1     |
| 17  | 4 国-13 | 黒灰色  |     | 多い      | 0.5-2.0 | Qt, Gra, GNS             | 光沢あり                          |                            |       | 1     |
| 18  | 4 国-18 | 黒灰色  |     | 多い      | 0.5-2.5 | GNS, Qt                  | 砂質な粘土、光沢あり                    |                            |       | 1     |

岩石記号名 Gra: 黒鉛 GNS: 片麻岩 Qt: 石英 Bio: 黒雲母

0.33~10%である。

3型：上記以外のもので、黒鉛を砂粒に僅かに含むもの。カラーラインデックスと比較して観察したところ、黒鉛の含有量はおおむね0.33%以下である。

この分類に従うと、胎土類型1は、3図の1、3、4、4図の3、4、5、7、10、12、13、18である。類型2は、3図の2、4図の2、8、9である。類型3は、4図の11である。

今回胎土分析した資料は、1型の3図-4、4図-7、2型の4図-2の3点である。

#### 4. 沢式土器の胎土分析結果（表2、図1）

3図-4： 黒灰色で、粗粒の砂粒含有量はやや少なく、砂粒の最大径2.0mm、平均径0.3~1.5mmで、基質には黒鉛を多く含み、全体に金属光沢を有する。黒鉛含有量は40%以上で1型胎土である。

胎土分析では、1cm中に232粒子をカウントし、黒鉛127点(54.7%)、片麻岩62点(26.7%)、石英17点(7.3%)、黒鉛を含む片麻岩12点(5.2%)、長石類9点(2.8%)という組成であった。黒鉛粒子は角がやや丸くなつた亜角～亜円レキ状を呈する。

4図-2： 暗赤褐色で、粗粒の砂粒含有量はやや多く、砂粒の最大径1.5mm、平均径0.3~1.5mmで、基質には微細な黒鉛を含むが多くない。基質は灰色でややガラス質で粘土には黒鉛を含まない。黒鉛含有量は3%以下で2型胎土である。

胎土分析では、1cm中に196粒子をカウントし、片麻岩74点(37.8%)、石英48点(24.5%)、黒鉛34

表2 沢遺跡出土土器の胎土分析結果

|      | 黒鉛   | 片麻岩  | 石英   | 片麻岩+黒鉛 | 長石  | スコリア | 岩石砂 | その他      | 総数  | 基質中の黒鉛含有量 |
|------|------|------|------|--------|-----|------|-----|----------|-----|-----------|
| 3図-4 | 127  | 62   | 17   | 52     | 9   | 1    | 1   | 鈎長石1、不明1 | 232 | 40%以上     |
|      | 547  | 267  | 73   | 52     | 28  |      |     |          |     |           |
| 4図-2 | 34   | 74   | 48   | 10     | 15  | 3    | 12  |          | 196 | 3%以下      |
|      | 17.3 | 37.8 | 24.5 | 51     | 7.7 | 1.5  | 6.1 |          |     |           |
| 4図-7 | 110  | 62   | 28   | 4      | 10  | 3    |     | 白雲母1、不明1 | 219 | 40% ±     |
|      | 502  | 28.3 | 12.8 | 18     | 4.6 | 1.4  |     |          |     |           |

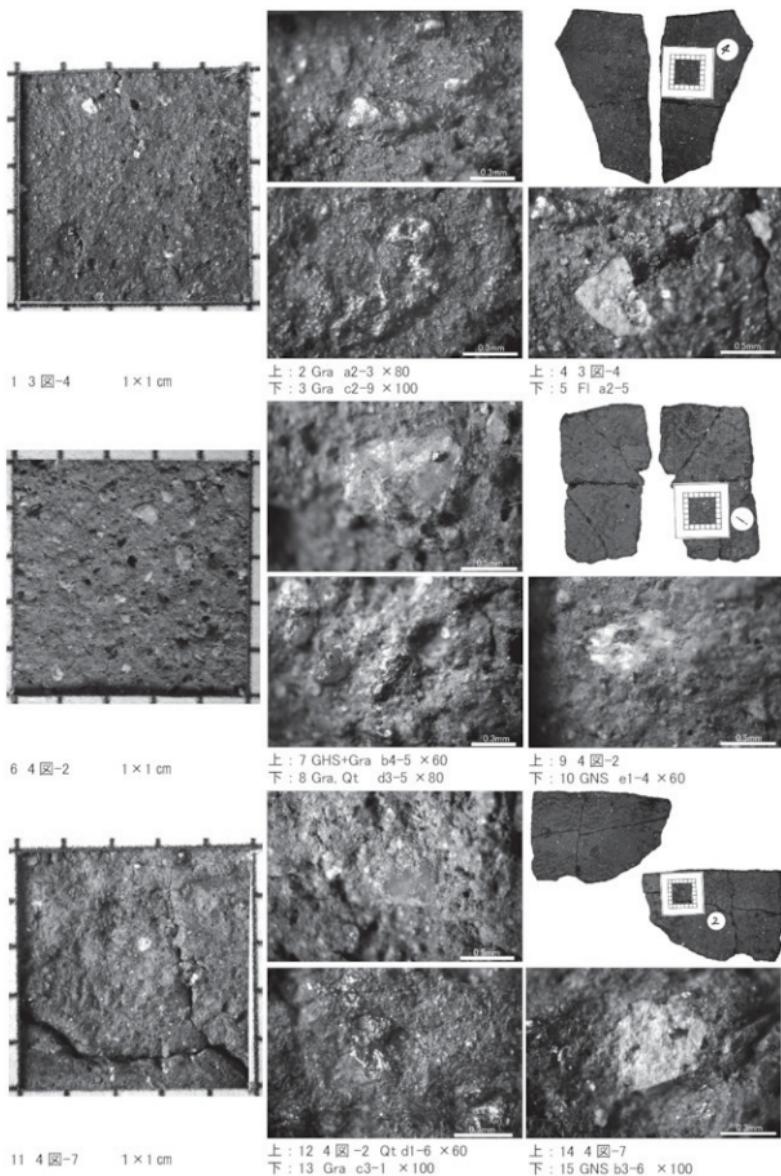


図1 沢遺跡出土の胎土の実体顕微鏡写真  
写真中の紙製枠の内側が1cm四方、メモリは2mm単位

点(17.3%)、長石類15点(7.7%)、黒鉛を含む片麻岩10点(5.1%)、スコリア3点(1.5%)という組成であった。灰褐色、明褐色系の岩石砂が12点(6.1%)とやや多く含む。内訳は亜円レキ8点、亜角レキ3点、角レキ1点である。片麻岩も亜角レキぐらいの多少円磨を受けたものが多い。

4図-7： 黒灰色で、砂粒含有量はやや多く、砂粒の最大径1.7mm、平均径0.3~1.7mmで、基質に微細な黒鉛が多い。黒鉛含有量は40%±で1型胎土である。

胎土分析では、1cm中に219粒子をカウントし、黒鉛110点(50.2%)、片麻岩62点(28.3%)、石英28点(12.8%)、長石類10点(4.6%)、黒鉛を含む片麻岩4点(1.8%)、スコリア3点(1.4%)という組成であった。

## 5. 考察

### 1) 土器胎土分析結果の所見

沢遺跡の土器で胎土分析ができる土器は3点であった。3図-4と4図-7の2点は、基質(粘土)部分に カラーインデックスによる比率で約40%近く黒鉛を含む1型胎土のものである。砂粒の組成は、ともに黒鉛が50%以上を占め、片麻岩が28%近く含まれる。黒鉛粒子は角が少し円磨を受けているものもみられる。片麻岩の中には、微細な黒鉛を含むものもみられる。これらの点から、この土器胎土には飛騨片麻岩の岩体の中に含まれる黒鉛鉱床の近くの沢で採集された黒鉛が多く、少量の片麻岩を含む砂を混和材として加えたものと思われる。

粘土中に黒鉛が多いが、通常の粘土に粉末にした黒鉛を混ぜたのか、吉朝(1990)が岐阜県はつや遺跡の黒鉛混入土器について指摘した現在飛騨市に含まれる「河合村天生の金山谷などに露出する粘土状黒鉛を素材とした」ものであるのかは問題である。金山谷の露頭は以前、吉朝氏に案内いただき地質状況の調査をしたが、そこでは結晶質石灰岩(大理石)帯のなかに黒鉛粘土が層状に含まれており、その中には結晶質石灰岩の岩片(小砾)が多数含まれていた。したがって、1型の土器胎土中に結晶質石灰岩が全く含まれていないので、粘土状黒鉛を素材とした可能性は少ないと考えている。

4図-2は、基質(粘土)部分に カラーインデックスによる比率で約3%以下の黒鉛を含む2型胎土のものである。砂粒の組成は、黒鉛が17.3%と相対的に少なく、片麻岩と石英で60%以上占め、さらに岩石を特定できなかったが亜円レキを多く含む岩石砂を6.2%組成する。このことから、この胎土には黒鉛鉱床の近くでも黒鉛が少なく片麻岩や石英に富む砂を混和材としたものと思われる。なお、飛騨地方では、飛騨片麻岩分布域の外では濃飛流紋岩とか美濃帯などの異なる地質系の岩石が分布しており、それらの砂粒を含んでいないことから、1型と2型の混和材の素材は、飛騨帯からそれほど離れた場所のものではないことが考えられる。

### 2) 黒鉛の産地と黒鉛混入土器

黒鉛(石墨・graphite)は飛騨帯に分布する堆積岩起源の変成岩類の中で、花崗岩質の片麻岩(アルミニナ質の角閃石黒雲母片麻岩)や結晶質石灰岩の中にしばしば含まれ、褶曲軸部や花こう岩体との接触部にあるベグマタイト(巨晶花こう岩)・アブライト(半花こう岩)の岩脈の周辺に濃縮して黒鉛鉱床ができているという(山下ほか編 1988)。ベグマタイトやアブライトの岩脈は、堆積岩が広域変成作用を受けて変成岩になるときに、変成度の低い部分に濃縮して片麻岩と同時期に形成されたものという(野沢 1952)。1950年代には、岐阜県北部から富山県南部の飛騨変成帯の分布域(山下ほか 1988; 野沢ほか 1975)に、約20の黒鉛鉱床が知られていた。



図2 飛騨片麻岩と黒鉛鉱床の分布（中村 2001）

網掛け部：飛騨片麻岩 ●：黒船鉛床

★：主な沢式土器の遺跡 1・宮ノ前、2・沢、3・宮ノ下、4・牛垣内

大野・佐藤(1967)は、黒鉛がこのように産地の限られた特殊な鉱物であることから、黒鉛混入土器が広域圏の指標になることを当初より指摘していた。沢遺跡出土の土器の胎土分析からは、飛騨地方でも飛騨片麻岩の分布域に限定された地域の胎土(粘土と混和材)を用いて生産されたものであると判断される。したがって、沢遺跡は飛騨片麻岩の分布域より南方に位置することから、本遺跡の沢式土器はより北方の飛騨片麻岩分布域で生産されたものか、あるいはその場所から運搬した粘土と混和材を用いて遺跡付近で生産されたもの、ということができる。

## 6. まとめと課題

今回、縄文時代早期を代表する沢式土器の胎土分析を実施することができた。この分析にあたっては、非破壊の分析法をあらたに開拓したので、本稿はその最初の分析記録である。したがって、分析法には改良の余地があるものと思われる。黒鉛混入の土器は、飛驒地方だけではなく、長野県から数少ないが関東地方にも分布が確認されている。従来は、漠然と黒鉛の有無が論じられていたが、本稿の分析法をおこなうことにより、縄文時代始原期の土器文化の様相が具体的に論じられる基礎資料になるものと思われる。

## 謝辞

沢式土器の胎土分析をおこなうにあたっては、戸田哲也、会田 進、岡本東三の各氏に研究機会をいただいた。2001年当時には、沢式土器の実見にあたって、松井 朗、吉朝則富の各氏ならびに古川町教育委員会（当時）のご指導と協力をいただいた。これらの方々に深く感謝する次第である。

## 文献

- 大久保雅弘・藤田至則編 1999「地学ハンドブック第6版」築地書館, 242P.
- 大野政雄・佐藤達夫 1967「岐阜県沢遺跡調査予報」「考古学雑誌」53, 99-113.
- 河西 学 2008「胎土分析と産地推定」「縄文時代の考古学7. 土器を読み取る-縄文土器の情報-」17-30. 同成社.
- 水沢教子 2008「屋代遺跡群出土煮沸具の胎土分析（下）-分析の詳細-」「長野県立歴史館研究紀要」14, 3-16.
- 中村由克 2001「市道遺跡発掘調査報告書」信濃町教育委員会, 311P.
- 中村由克 2002「押型文土器（縄文早期）の胎土からみた産地の推定-長野県市道遺跡例の検討-」「日本第四紀学会講演要旨集」32, 100-101.
- 野尻湖火山灰グループ 2007「新版火山灰分析の手びき-双眼実体顕微鏡による火山灰の砂粒分析法-」「地学ハンドブックシリーズ」, 14. 地学団体研究会, 57P.
- 野沢 保 1952「飛騨の黒鉛鉱床の形成について、花崗岩化作用による成因的考察」「地質調査所月報」3, 305-311.
- 野沢 保・河合清雄・河合正虎 1975「飛騨古川地域の地質」「地域地質研究報告（5万分の1図幅）」地質調査所, 79P.
- 松崎健太・柳原麻子・矢野健一 2011「砂粒数カウント法からみた土器胎土添加鉱物の推定-長野県宮崎遺跡における事例報告-」「日本考古学協会第77回総会研究発表要旨」184-185.
- 矢野健一 2008「角閃石含有土器」「縄文時代の考古学7. 土器を読み取る-縄文土器の情報-」31-41. 同成社.
- 山下 界はか編 1988「中部地方II」「日本の地質」5. 共立出版, 310P.
- 山田直利・野沢 保・原山 智・滝沢文教・加藤楨一編 1988「高山」「200,000地質図」地質調査所.

### 参考文献

- 赤木 清「江名吉ひじ山の石器時代遺跡、一」ひだびと4—4、昭11
- 同 「江名吉ひじ山の発掘報告——江名吉ひじ山の石器時代遺跡、八——」ひだびと5—1、昭12
- 同 「押型紋に於ける磨消手法について」ひだびと5—9、昭12
- 市原秀文・大參義「縄文文化の発展と地域性、6、東海」日本の考古学II、昭40
- 岡田茂弘「縄文文化の發展と地域性、7、近畿」日本の考古学II、昭40
- 西本 勇「相模・平坂貝塚」鎌台史学3、昭28
- 片山長三「神宮寺早期遺跡」文部省教育省調査報告(埋藏文化財編)2、昭33
- 酒詰仲男・岡田茂弘「大川遺跡」奈良県文化財調査報告(埋藏文化財編)2、昭33
- 酒詰仲男・渡辺仁「柳木真裏村普門寺遺跡發掘概報」人類学雑誌61—1、昭24
- 笹津海祥・白石竹雄「修善寺町池の本遺跡——縄文早期の住居址について」日本考古学会第32回総会研究発表要旨、昭41
- 紅村 弘「東海の先史遺跡 縄文編」東海叢書13、昭31
- 室紀要1、昭31
- 赤木 清「江名吉ひじ山の石器時代遺跡、一」ひだびと4—4、昭11
- 同 「江名吉ひじ山の発掘報告——江名吉ひじ山の石器時代遺跡、八——」ひだびと5—1、昭12
- 同 「押型紋に於ける磨消手法について」ひだびと5—9、昭12
- 市原秀文・大參義「縄文文化の発展と地域性、6、東海」日本の考古学II、昭40
- 岡田茂弘「縄文文化の發展と地域性、7、近畿」日本の考古学II、昭40
- 西本 勇「相模・平坂貝塚」鎌台史学3、昭28
- 片山長三「神宮寺早期遺跡」文部省教育省調査報告(埋藏文化財編)2、昭33
- 酒詰仲男・岡田茂弘「大川遺跡」奈良県文化財調査報告(埋藏文化財編)2、昭33
- 酒詰仲男・渡辺仁「柳木真裏村普門寺遺跡發掘概報」人類学雑誌61—1、昭24
- 笹津海祥・白石竹雄「修善寺町池の本遺跡——縄文早期の住居址について」日本考古学会第32回総会研究発表要旨、昭41
- 紅村 弘「東海の先史遺跡 縄文編」東海叢書13、昭31
- 室紀要1、昭31
- 杉原莊介・芦沢景介「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告、考古学2、昭32
- 芦沢長介「神奈川県大丸遺跡の研究」縄文考古学7、昭31
- 戸沢充則「鶴沢押型文遺跡」石器時代2、昭30
- 中村孝三郎「卯の木押型文遺跡」長岡市立科学博物館考古研究調査報告5、昭38
- 齊沢 保「飛騨の黒鉛鉱床の形成について(花崗岩化作用による成因説)」地質調査所月報3—7、昭27
- 原 實・紅村弘「岐阜県花ノ瀬遺跡略報」石器時代5、昭33
- 松沢重生「細久保遺跡の押型文土器」石器時代4、昭32
- 松島透「長野県立野遺跡の捺型文土器」石器時代4、昭32
- 宮坂英式・宮坂虎次「要利」尖石考古博物館研究報告叢書2、昭41
- 山内清男「江名吉ひじ山の土器について」飛騨考古学会々報2—1、昭9(山内清男・先史考古学論文集2所取)
- 同 「古式縄紋土器研究最近の情勢」ドルメン4—1、昭42
- 同 「古式縄紋土器研究最近の情勢」ドルメン4—1、昭10(山内清男・先史考古学論文集2所取、昭42)
- 八幡一郎・上野佳也「長野県喜平東郷の早期縄文式文化遺跡について」考古学雑誌48—2、昭37

ここに再録した調査予報は、考古学雑誌発表の抜刷をもとに、参考文献の追加二点を加え、当時の古川町教育委員会が普及版として配布したものをお原典とした。なお再録にあたつて原版の12倍に拡大している。

おそらく共通の祖源がある。沢では山形紋原体の細かい変化を生じたが、一方神宮寺では變も少ないが変化も少ない。おそらく两者はもともと土器施紋の型あるいは傾向を異にしていたのである。大川式における山形紋の変化は、全面施紋を特徴とした長い原体を用いる神宮寺式以来の伝統にもどりくものであろう。

神宮寺・大川両式に類似する土器は、近畿から東海にかけて分布し、南信に及ぶ。九合洞窟・北晉地・立野等が著名である。立野は岡田氏の指摘のごとく大川式に極めて近い。九

合・北晉地はこれと異なり、むしろ神宮寺式に接近しよう。立野は横円押型紋を伴なう。沢以後、おそらく松島透氏の推定のごとく埴沢下層式に近いのである。御座岩岩陰では大川式近似の破片が埴沢下層式とともに出土している。一方九合には埴沢下層よりもむしろ沢に類似する山形押型紋がある。これと海宮寺類似土器との前後関係は困難な問題であるが、共存の可能性がある。

神宮寺・大川両式は沢・埴沢下層のことき帶状施紋を特徴とする山形押型紋とは元来別系統に属し、ほぼ同時期に地域を異にして分布したものと思われる。相異なる沢・神宮寺両式の成立には先行型式の差異が与っていると考えられる。埴沢下層・御座岩等にみられるごとく、この時期に生じる全面施紋への変化はおそらく大川式の影響によるものである。埴沢下層以後なおしばらく帶状施紋の伝統が中部山岳地

帶に存続したが、これに並行してその南側では大川式系統の土器が、九合におけるやや複雑な押型紋のことき地方的型式に変遷したものとみられる。細久保・東経等の資料にその影響を窺うことができる。

沢出土の土器はその紋様、胎土等において、他の押型紋土器から分離しうる明確な型式的特徴を備え、一型式の標準とするに足るものと認められる。その編年的位置は押型紋最古の段階に列しうるものと考えられる。

調査には古川町教育長西村吉郎氏はじめ教育委員会の諸氏の御世話を頂いた。また吉城高校生諸君の援助を受けた。

山内清男博士のご好意により東京大学人類学教室所蔵の普門寺出土土器を拝見した。飛騨地方の黒鉛については高市市の直井亘氏、並びに国立科学博物館地学研究部の須崎祐吉・斎藤清二両氏の御教示に恵まれた。塙田光氏より池の本遺跡についてご教示を受け、また岡田茂弘氏より貴重な文獻の貸与を受け、種々ご教示に恵んで厚く謝意を表したいと思う。

追記  
雲泉志所藏の石碑は二木長嘔宛て石事書簡によれば巣山産のものかと推測される。

欠く沢遺跡の土器が、ひじ山に先行することは明らかである。帶状施紋にうしてはすでに江馬修氏により、ひじ山の一部の土器について押型紋における磨消手法として注意されてい る。ひじ山におけるこの種の紋様は、沢の帶状施紋の伝統に従うものである。押型紋土器全体を通して、帶状施紋を特徴とするものと、土器表面全体の施紋を基本とするものとに大別される。神宮寺・大川等の特別の型式を別として、やはり前者を押型紋の前半、後者を後半とすることができよう。ひじ山は前期の施紋法の残存から、むしろ中期的時に位置づけるべきかもしない。

沢の土器に最も近似する遼いた資料は樋沢下層の土器であろう。しかし樋沢下層は畠田押型紋を含み、また全面に施紋するものがあるから、沢以降に位置づけなければならない。樋沢下層は口縁部内面に施紋するものが少なく、約半数は口端上面に施紋しない。原本は沢に比べ山形の条数が多く、従つて長さも大である。これらの相違は時期の下降に応ずる変化と考えられる。同様のことは関東の押型紋中最古とされる普門寺式との間にも見られる。普門寺式は全面施紋の傾向が強い。関東ではむしろ平坂II式に伴なう押型紋土器が最も古く、また最も沢に近いものとして注目される。しかし平坂には格子目紋が多く、また原体に相違するところがある。地域差かもしれない。かくして中部・関東地方における押型紋の前期に帶状施紋の山形押型紋に発する伝統があり、時期的変

遷を持つたことがおぼろげながら推測される。現在のところ沢・平坂が最も古く、樋沢下層・普門寺がこれに続き、ひじ山がその後に位置することとなる。長野県では多分平東組・樋沢上層等がひじ山に並行しよう。細久保・卯ノ木等の水平帶状施紋を特徴とするものが、樋沢下層と東組間に位置することとなる。

もし沢の編年的位置に関する如上の推定に誤りないとすれば、近年押型紋土器最古の段階と考えられ、樋沢下層・普門寺以前に位置づけられている神宮寺式・大川式等の型式と沢との前後關係はどうのうに考えられるであろうか。神宮寺・大川両式はともに少量の山形押型紋を伴なう。大川式の山形押型紋には、山形の条数少なく、比較的短い原体によるものと、然らざるものがある。前者は帶状施紋の傾向を有し、後者は全面に施紋される。神宮寺式のそれは前者に限られ、沢に類似する。山形の条は二または三条であつて、この点は沢より古かるべき特徴を持っている。しかし原本の長さをみると二種前後で、沢よりは長いが、その他の押型紋原体に比べて著しく短く、神宮寺の押型紋中特異な存在をなしている。神宮寺式が大川式に先行し、両式間に連続性のあることは、園田茂弘氏のいわれる通りであろう。沢を神宮寺式の発展形態とみるには、大川式に比べて他の神宮寺式の要素の欠如が問題となる。その点と異なることも困難を伴なう。両者は時期的には極めて近いと思われる。山形押型紋そのものには

裏面に広い原剥離面が残されている。形態は三角形圓基。3  
は凹入が著しくない。他の一例は長三角形凹基、両側に鋸齒  
状の小突起を作る。全体の剥離は入念で前三例と異なる。あ  
るいは時期を異にするかもしだれなし。鍬形石鎚はない。石槍  
は一例(4)。粗製の破損品で、製作途中かまたは出来損いで  
ある。貝殻状剝片の周縁を簡単に打調した削器は破損品も  
含め七例はある(5)。うち一例は半錐体の部分に不完全な  
つまみと見えるものがある(6)。押型紋に伴なうものとして  
は珍らしい例である。石錐は少ない(7)。他に一例あるが  
尖端部の剥離が顕著でない。剝片の尖端部にわずかの使用痕  
あるものが數例あり、錐としての用途が考えられる。

粗製の小形打製石器は比較的多く、一二三の種類がある。こ  
れらは押型紋の施紋原体を工作するのに用いられたかと疑わ  
れる。有凹削器は剥片の縁に小さなノッチを持つ。しばしば  
ごく小型の剝片が利用される。ノッチの大きさは施紋具の直  
径に適合するようにみえる。押型紋の圧痕の溝底に見られる  
垂直の条痕は、これらの削器の削痕によるものではあるまい  
か。刃部が片刃のもの(8, 9)と両刃のもの(10)の二種  
あり、前者は二例、後者は二例ある。剝片または石核の一端  
あるいは両端に薄い両刃の刃を作る一種の小刀がある。剝  
片から作られたもの(11)、石核を利用したもの(12)<sup>1)</sup>、  
類品が廻沢遺跡にある。石核は曾根型石核あるいはこれと一  
連の技術的関係にあるものが用いられ、剝片もそれらの石核

からのものが多く利用されている。また厚みのある剝片の一  
端に鏽状の刃を作るものが七例ある(13)。これには burin  
に近いものか、keeled scraper に類するものがある。burin  
technique はない。

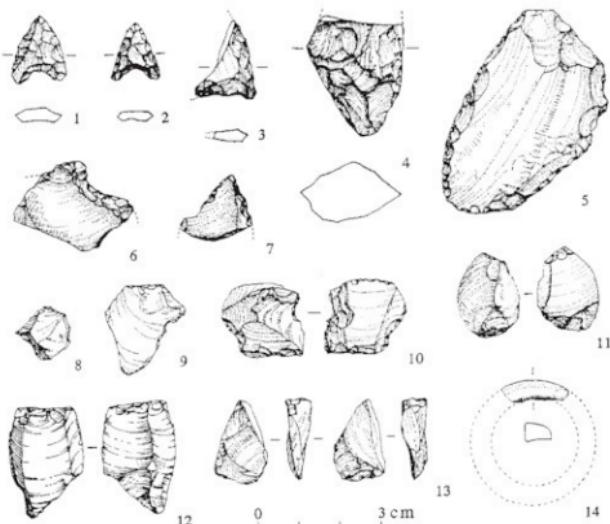
石核には盤状のものと、曾根型及びこれに類するものとの  
二種があるが、後者が圧倒的に多い。剝片にも盤状石核から  
えられる貝殻状のものと、曾根型石核からえられる石刃に近  
い細長なものとの両種があり、いずれも石器の製作に用いら  
れる」と前記の通りである。曾根型石核は曾根、花ノ瀬にお  
いて爪形紋土器に伴なう、また押型紋土器に伴なうものか  
て通説の例が知られているが、沢遺跡における「とく」の  
時期に多量に伴なうことは注目すべきことであろう。

#### ○ 其の他

半円形あるいは矩形に近い砂岩製板状の磨製品が二例あ  
る。花ノ瀬上層出土のものに類する。他に一例これに類し、  
線刻あるものがあるが、出土層位に疑問がある。磨製石斧の  
断片が三例あるが、層位的に押型紋土器に伴なうか否か疑問  
がある。

#### 5 考 察 —— 沢式土器の編年的位置について——

沢遺跡は飛騨の押型紋遺跡としてひし山に並ぶものである  
が、両者の土器は全く相違する。押型紋土器の編年に関する  
現在の知見からすれば、帶状施紋を特徴とし、横円押型紋を



第5図 打製石器・土製環飾実測図

石皿は砂岩の平坦面ある礫を用いる。完存品一、破片一。これに類し、砂岩の平坦面に顕著な敲打の痕跡あるものが二例ある。右石である。また砂岩の平坦な盤面に幅三ないし五厘の溝のあるものが一例ある。砾石として用いられたものであろう。

この地長角円形の礫の一端または両端に打痕あるもの、扁平な碟の一面に打痕あるもの、角柱状の礫の一側に打痕あるもの等の敲き石の類がある。

粗製の打製石器には礫の一部縁辺に片刃の刃を作るもの、「端に両刃」の刃を有する打製石斧に近いもの、使用痕ある大型剝片等がある。これらは砂岩が多い。一例用途が明らかでないが大型剝片の一側をわずかに磨いたものがある。

#### b 打製石器（第5図）

石錐・石槍・削器・石錐等の他、小型粗製の石器がある。安山岩とチャートが用いられるが前者が多い。石錐は四例。層位的に明らかに押型紋土器に伴なうものは一例（1）のみで、他は表層または表面採集。そのうち二例（2、3）は作り方が1に類似し、周時期かと思われる。貝殻状の剝片から周囲を簡単に打調して作り、

黒鉛の鉱床は飛騨北部から富山県南部及び石川県にかけて、飛騨变成岩地帯に分布している。産状は鱗片状・土状・中間型(半鱗片状)等。野沢保氏によれば、鱗片状鉱床として天生・元田・芦田・角川・金剛堂・二屋・虎屋・曾沼・直井・勝野・杉原・漆山・神岡(以上岐阜県)、土状黒鉛鉱床として東山(岐阜県)・千野谷・高清水・大長谷(以上富山県)・富士(石川県)・中間型黒鉛鉱床として蟹寺・谷・利賀(以上富山県)等があげられている。木内石亭が萬山の福島原瀬洲から贈られた石墨について雲根志後編に触れている。この地方の黒鉛はよく知られていたのである。沢遺跡は地理的には果山に最も近く、果山産の黒鉛が利用されたのであることは想像に難くない。しかし次の土器にはしばしばなり大型の鱗状黒鉛がみられる。果山以外のものも用いられてゐるかもしない。あるいは果山またはその附近に鱗状黒鉛鉱床があるかもしない。これらの点についても将来調査を続ける予定である。とにかく黒鉛混入の押型紋土器が、黒鉛産地の点在するこの地域にこれからも発見される可能性は大きいであろう。

山内博士から黒鉛混入土器が交易層の指標になるであろうこと、またヨーロッパのラウジック文化、ヘルシニタクト文化等の土器に黒鉛が混入されることについて、重要な指摘を受けた。ヨーロッパの例についてはメリヒヤール博士からもの教示を受けた。

#### 4 石 器

##### a 粗製石器

粗製石器の中では磨石が最も著しい。粗い安山岩質の礫が用いられる。破片を含め九例あり、うち三例は住居址床面から出土した。磨石には二種ある。一つは厚味のある角柱状の礫を行い、一側あるいは両側の突起部分を使用する。この部分に平坦な波状面ができる。二例あり、いずれも破損品。住居址床面からの一例は、やや扁平であるがこの種に近い。長さ一五・四種、幅八・八種、厚さ四・七種。磨面は両側にあり、両端に梗として用いた打痕がある。片面に敲打による凹みがあり、指かけに適する。他面は二箇所に敲打の痕がある。この種の磨石は長野県の押型紋遺跡に出土することが知られているが、丸丸跡の箱荷台式に伴うものに類似するから、革削期以来の伝統とみられる。他の一種は橢円形、扁平な礫を用いるもので、完存品が四例ある。大きさは一二・三×九・八種ないし一〇・三×七・七種。これには一端が他端に比べて尖る、三角形に近い形のものと、ほぼ正橢円形のものとの二種があり、どちらも二例ずつある。磨面は一側または両側にあり、一端または両端に打痕があるものがある。全例両面のほぼ中央部に凹みを作るが、その大きさと深さが均等でないものがある。この凹みは使用時の指かけと考えられる。花ノ湖、大川、ひじ山その他に類品がある。

格子・目紋の破片は二箇体に属するようにみえる（第4図9<sup>10</sup>）。いずれも斜格子。9は縦帯が見え、10にも縦帯の部分の破片がある。9は縦帯が先で横帯が後からつけられている。斜格子の条は9では一束おき、10では四束おきに同一のものが現われる。

10は格子が細かく、一端でさらに分岐している部分がある。原体は9が長さ一・柄、直徑三・五耗<sup>10</sup>は長さ一四耗、直徑三・八耗ほど。10の両端はV字形の切り込みがある。これは斜格子の条とは無関係であるから、山形紋の原体のそれを譲り受けるものであろう。9では一端に格子の条に応ずる筋度の切り込みがあり、一端では切り込みのある部分とない部分が交互に現われている。

b 結節迴転紋土器（第4図11-13）

結節迴転紋は六箇体とみられるが、二例は压痕が明瞭でない。紋様は押型板同様帯状に施される。原体は一段の纏で、R三例、L一例、纏紋に関する記載は山田博士の講義による。纏に精緻がある。結節迴転紋には二種ある。「一つは压痕が波状を呈し、原体が纏目を結節とみられるもの（第4図11<sup>12</sup>）。」他は压痕に直線的な部分があり、單輪絶条第三類とみられるものである（第4図13）。後者は「一例にすぎない」。

押型紋に伴なうこの種土器は初見であろう。他の纏紋、纏糸紋があり、そうに思われるが全くない。結節迴転紋は夏島貝塚の夏島式に伴なつて一例、横位施紋のものが稀有の例として報告されているが、これと沃との関係は明らかでない。

c 条痕紋土器（第4図14）

いずれも小破片で、土器表面全体の様子は明らかでない。三箇体であり、うち二箇体は表裏に条痕がある。無紋土器については省略する。

d 土製環飾（第5図14）

土製環飾の破片と思われるものが一点ある。多量の黒鉛を含む。環体は一面が平坦で、幅約五耗、高さ約六耗。断面形は中国新石器時代の環飾に類似するものがある。外径三耗、内径二耗ほどであろう。土製品として、他に土器片を利用した円盤の作りかけと思われるものが一例ある。

e 黒鉛の混入について

土器に黒鉛を混入する土器は、沢のほかに飛騨の数箇所の遺跡から発見されているが、いずれも少量である。それらの土器には沢の土器に近く類似し同型式に属するかと思われるものと、やや異なるところがあり時期が降るかと思われるものがある。しかしひし山の土器には黒鉛の混入は見られないから、この特徴は時期的にかなり限られるのであろう。この種の土器の分布と細別については今後の調査に期したいと思う。

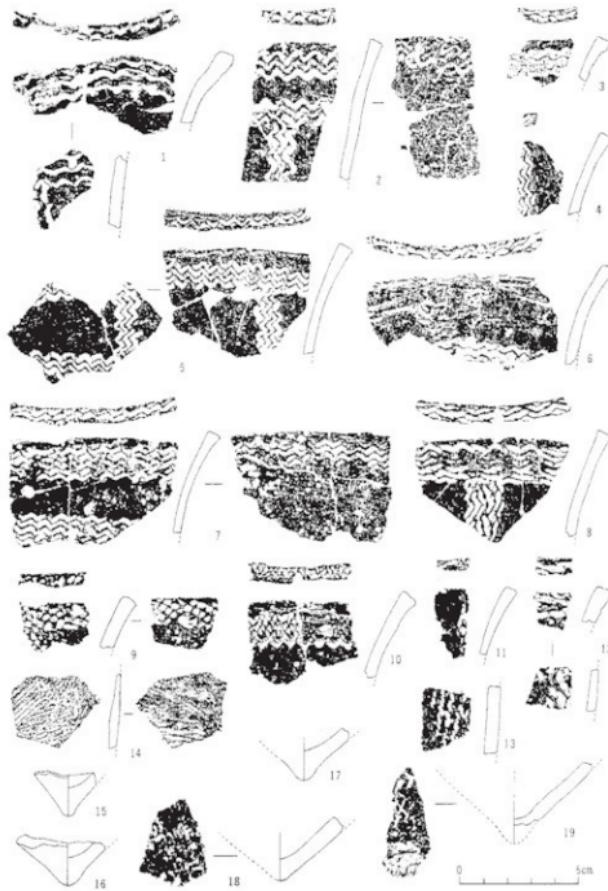
各地の押型紋土器に、しばしば雲母の混入が報じられている。黒鉛の混入も同様に除粘材として用いるほか、外觀上の効果を求める一面がたしかにあつたであろう。黒鉛の耐火性を利したか否かについても考慮の要があろう。

少量ある。

原体については山内清男博士の論文に詳しい。沢遺跡のものにについて見るに、条の刻み方は各条独立、すなわち環状を基本とするものが普通であるが、螺旋状に刻むものが少量ある（第3図4、第4図5）。螺旋の方向には左巻と右巻の両者がある。条数は二ないし五条、山形紋口縁部五六例中、条數を決定しえない二〇例を仮りに考慮外とすれば、二条六、三条一五、四条一三、五条二となる。しかしこの数量は胸部片の箇体別が完了すれば当然変動する。全体として三条が最も多く、四条がこれに次ぐ。両者の割合は二対一位である。二条は四条とほぼ同数かやや少ない。五条は稀である（螺旋状に刻む場合は条端の位置によって条数が一差異なる部分が交互する。この場合は条数の多い方をとった）。殆んどすべて山形の突起部は原体の一周にはほぼ等間隔に二箇、従つて圧痕では同一の突起が交互に現われる（螺旋状の場合は隣の条の同様の位置に現われる）。一周に一箇の突起を刻んだものが一例あり、それと疑わしいものが一例ある。また突起部が正しく重複せず、部分的に一周一箇の突起となつているものが一例あり（第4図8）。これに類するものが他に三例ある。この種のものは条の交叉がみられるなど、正規の山形とは違つている。原体の両端は山形の起伏に応ずるV字形の切り込みが加えられる。原体の長さは九ないし七種。一〇耗以下と一六耗以上は少ない。大体二ないし一五耗で指一本の幅

に適当している。条数の少ないものは短いものが多く、条数の多いものは長い傾向がある。直径は三・五ないし五・五耗程度。四耗台のものが最も多く、四耗台・三耗台・五耗台の比は大体八対二対一位である。四耗前後と四・五耗前後に集中する傾向が見られる。同一箇体の土器に二種以上の原体を用いて施紋した例はない。第一体一種である。同一原体をもつて別箇体の土器に施紋した例は四種見つかっているが、いずれも二箇体に共通し、三箇体にわたることはまだ見つかっていない。

施紋の特徴についてはすでに触れたが、横帯と縦帯との關係について補足する。横帯二条の場合、縦帯が上位の第一横帯から起つて、第一、第二横帯間の空間を貫くものと（第4図5）、第二横帯から起るものがある（第3図2、第4図1-2）。この点を觀察しうる破片は少ないが、前者が二例、後者が四例ある。横帯と縦帯との施紋の前後關係には、縦帯を先に施すものと（第3図3、第4図2-5-6-8）、横帯を先に施すもの（第3図1-2、第4図1）との二様がある。前者は一例、後者は六例。うち六例は前述の横帯二条のものであるが、縦帯を先にするものは、縦帯が第一横帯から起るものに一例、第二横帯から起るものに一例ある。他は横帯を先に施す。縦帯が第二横帯から発するものは、第一横帯の施紋順位は厳密には不明なわけであるが、常識的につみて両横帯は連續してつけられたものであろう。



第4図 土器実測図



第3図 土器実測図

れたとみられる表面に火熱を受けた大型の礫が各層中に認められた。

### 3 土 器

上層出土の少量の新しい時期のものを除き、押型紋を主体とする一群の土器について触れる。土器は押型紋・結節迴転紋・条痕紋・無紋の四種に分けられる。これらは一時期に属するると考えられる。押型紋最も多く、無紋はその約三分の一、その他はいく少量である。押型紋及び無紋の箇体別がまだ完了していないので全数を示すことはできないが、口縁部に限れば各種の数量は次の如くである。押型紋五八、結節迴転紋三、無紋二一。条痕紋の口縁部は見出されていないが、箇体數は三。結節迴転紋はすべて六箇体ある。押型紋と無紋の全箇体數はおそらく倍以上に上る。器形は口縁部が一般にかなり外反する純粋な尖底深鉢形。口縁は大部分平縁であるが山形が三例あり、この時期のものとして注目される(第4図1)。腹部は斜度のふくらみがあり、尖底部は乳頭状。器壁は薄く、三ないし六耗。四耗に達しないものは少なく、五耗を越えるものも多ではない。大部分は四ないし五耗。これら特徴は各種共通とみられる。黒鉛の混入も共通する。黒鉛を含まないものは明るい褐色を呈し、含むものはその量によって灰褐色ないし黒褐色を呈する。黒鉛を含まないものは少ない。鐵維の混入は見られない。

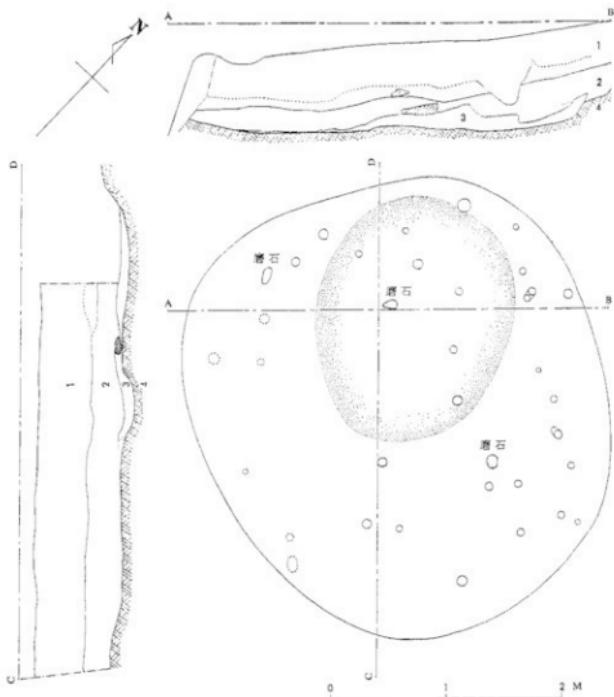
押型紋と結節迴転紋は施紋の方法が全く等しいらしい。いずれも帯状施紋を特徴とする。普通口縁部に一ないし二条の横帯を施す。但し小破片では横帯の数を決定しがたい。確實に一条のものは一例にすぎず(第3図1)。他にそれらしいものが一例ある(第3図4)。三条以上の横帯は確認されていない。以下腹部から底筋にかけて縦帯を施す。底部尖端近くまで施紋した例がみられる(第4図19)。口縁部の横帯は一般に口縁直下に施されるが、口縁直下の横帯を欠くものが押型紋に一例(第4図6)、結節迴転紋に一例ある。また口縁部の横帯を欠き、縦帯のみみられるものが押型紋に三例、結節迴転紋に一例ある(第4図41)。口端上面はすべて施紋され、今のところ例外はない。口縁部内面には施紋するものとしないものがある。押型紋の口縁部五八例中内面に紋様あるもの二三、ないもの三〇、内面剥落して不明のもの五で、紋様のないものがやや多いようである。内面の紋様も小片では明らかでないが、横帯一條である。結節迴転紋の口縁部三例には内面の紋様がない。

#### a 押型紋土器(第3図、第4図1—10)

押型紋は殆んどすべて山形で、格子目は二箇体にすぎない。山形紋中山形の起伏を上下並行させ、反対の位置に置いたものが一例ある(第4図3)。山形には波状のものとジグザグ状のものがある。山形の条と条が接着する箇所を有するもの、また原体において柔間に特殊な刻みを設けるものなどが

る。西北側の側柱の間隔の広い部分に、側柱の縦よりやや内側に二、三の柱穴があるが、また別の構造に關係があるかもしれない。このほか東北側の側柱列の両端に位置するいくつ小さい柱穴は斜めに穿たれており、支柱穴かと思われる。柱穴はすべて櫛木を用いたらしく、柱穴は小さい。主柱穴さえ直径八及び九厘米の側柱穴と大差ない。ただ深さは側柱穴より深く一八及び一九厘米である。側柱穴は直徑四乃至一二厘米で、大小しない柱穴のものが多い。深さは一八厘米の一例を別として、五、五ないし一厘米、九厘米前後のものが多い。中間柱穴はほぼ偶数穴と同大であるが、やや深い。

以上の諸種の柱穴の配置は、不明瞭な部分はあるが、ほぼ家屋の構造を示している。主柱上に櫛木を渡し、主柱から中間の柱を支えとして四方の隅棟を下ろし、樋をかけ、これを側柱と側柱を連ねる櫛木で受けるという骨組みであったようを見える。樋の先は堅穴外に伸びていたものであろう。屋根は円錐形よりもむしろ方錐形ないし四注造に近かつたのではないか。堅穴の西北側がやや直線的であり、東北の側柱が一直線上に列ることはこの推測を助ける。家屋の形態は必ずしも堅穴の平面形と一致しない場合もあるのである。入口はおそらく東南面にあり、いわば一種の平入である。この部分の両側には中間柱が一対ずつある。内側の柱は入口と關係があるのである。ただこの部分を入口とするとき、そのほぼ中央にある側柱一箇が邪魔になるが、これはあるいはまた別の用途を



第2図 住居址実測図

2図。主柱穴は二箇、中央部に並列せず、一箇はやや東南に偏する。側柱穴は壁に沿うてその内側に並ぶ。北半部では規則的に見出され、とくに東北側では直線的な列がみられるが、南半部では明確でない。南半部は基盤に角礫を多く含むので、穴を開けたない場合が多く、そのためであろう。主柱と側柱の間には中間柱穴がある。堅穴を長短両軸に従つて四分すると、中間柱は西北、東北、東南各部のほぼ中央部にある。おそらく西南部にあり、主柱と側柱列を結ぶ四本の線上にある(?)。



第1図 沢遺跡堅穴住居址全景（東北より望む）

認められる、風化砂礫を含む黒褐色土層、最も厚い部分で約二〇センチ、極めて薄く、殆んど認められない部分もある。第4層、基盤、花崗岩の風化土層、黄褐色。上部は粘土化しているが、下部は砂質で花崗岩の風化した礫を含む（第2圖断面図参照）。押型紋土器の破片は第1乃至第3の各層に含まれるが、量的には第2層に最も多く、第3層には細片が目立つた。第4層中その上面から四個下位に発見された例があるから、元來の層位は第4層の表面とみなされる。住居址は第4層に掘り込まれ、住居址外と同様第2層に被われる。押型紋土器以前と考えられる確実な資料はない。押型紋土器以降の少量の土器片は、下部まで擾乱を受けた地点の紛らわしい、二の例を除き、第1層に限られる。第1、第2層の厚さは地点により異なるが、住居址の部分は最も厚く、第1層は約五〇センチ、第2層は約三五センチに達する。第1層は上下二層に識別しうる場合があり、近世の墓が上層から穿たれている。

住居址は層位的事実から押型紋土器の時代のものと認められる。堅穴の直径は西北—東南、約三・九五メートル、東北—西南、約三・五メートル。基盤の傾斜の方向にやや短いが、不整形に近い。面積約一一・五平方メートル。自然的小家族を容れるに足る。堅穴の掘り込みはごく浅く、傾斜は緩い。從つて基盤の高い北側では明瞭であるが、南側では不明瞭である。北側の掘り込みの深さは二五センチ前後。床面から壁面に移る邊は明瞭でなく、全体として浅い皿状を呈する。炉はない（第1、

出典 考古学雑誌第53巻第2号、昭和42年

# 岐阜県沢遺跡調査予報

佐 大  
野 政 達 峰  
藤 巫

## 1 はしがき

沢遺跡は岐阜県吉城郡古川町大字上気多字沢に属する。山麓の斜面に位置し、主として押型紋土器を出土する。遺跡は大野の発見に係り、昭和三十九年予備的調査を行なった。本年第一回の発掘を行なう。神型紋土器時代の堅穴住居址を掘りえた。土器は押型紋土器の一新式に属する。帶状施紋の山形押型紋を主とし、無紋及び少量の格子目押型紋、繩紋（結節螺旋紋）、条痕紋等を伴なう。帶状施紋の筋節螺旋紋はこの遺跡特有のものである。横円押型紋が一片もないことは、押型紋土器群内における該式土器の古さを示している。

胎土に黒鉛を混入することは著しい特色であつて、その混入量の多いものはあたかも鉛筆の心のことく、銀鏡色の金属的光沢を有し、紙に書くことができる。黒鉛混入土器は本遺跡においてはじめて知見に上つたものである。押型紋土器時代の住居址ははじめての発見ではないが、早期の住居址として貴重であり、ことに特殊な構造を示している。石器は貧弱であり、特別なものは少ないが、粗製小形打製石器中に土器の施紋原本を作る道具があるとうと考へた。沢遺跡の調査は短時間であったが、幸いに如上の新事実を明らかにすることができた。ここに予報を草する所以である。

## 2 遺跡及び住居址

遺跡は西南に低く傾斜する斜面上にあり、東北より西南に流れる谷に沿つてゐる。東北——西南、西北——東南方向にともに約四〇米の範囲に土器片が散布している。層序は上から次の通りである。第1層、黑土層、二〇~三〇厘米。第2層、褐色土層、五~一五厘米。第3層、住居址の床面直上部のみに